蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・ブラスフェマ）3

榊一郎

Ichirou Sakaki

illust. 赤井てら

Bluesteel Blasphemer

「神の御許に跪きなさい」

宣教騎士団再び!!

絶好調異世界銃×剣バトルファンタジー第3弾!!

さ01-04-03

榊一郎　蒼鋼の冒涜者3

HJ文庫

HOBBY JAPAN

榊 一郎 さかきいちろう

刊行点数を減らした筈なのに締め切りは以前より集中する不条理に喘ぎつつ、今日も原稿中。嫁の買ってくれた「着る毛布」が大変暖かくて良い感じ。

赤井てら あかいてら

宮城県出身のイラストレーター。
タイツが美味しい季節になってきましたね。

HJ文庫の最新情報はここから！

http://hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

9784798611495

ISBN978-4-7986-1149-5

C0193 ¥648E

1920193006483

定価：本体648円＋税

順調に発展を始めたフリートラントに、宣教騎士団に追われていた傭兵が流れ着いた。それをきっかけとして訪れた宣教騎士は、街が教化済みでないことを見破ってしまう。戦力を整え、再び襲い来る宣教騎士団を前に窮地に陥るユキナリたち。
《教会》を前にしたアーロンと、戦う力を手に入れたが人を傷つけることを厭うベルタ。それぞれの決断とは――。

HJ文庫の人気作外伝から完全新作まで
すべて無料で読めちゃう小説サイト
読める!HJ文庫
yomeru-hj.net

見逃せない連載ラインナップ（2016年1月現在）
◆高1ですが異世界で城主はじめました 外伝 著／鏡 裕之
◆六畳間の侵略者!? へらくれす！ 著／健速
ほか、毎月新作が続々登場！

http://yomeru-hj.net/ PC&スマートフォン対応で毎週火曜＆金曜更新中！

榊 一郎　作品

プリンセスはお年頃! 1
プリンセスはお年頃! 2
プリンセスはお年頃! 3
模造王女騒動記フェイク・フェイク カーム・ブレイカー
模造王女騒動記フェイク・フェイク ルナティック・シスター
模造王女騒動記フェイク・フェイク エイリアン・ネイション
タタリ・ブレイカー弑子
蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・ブラスフェマ）
蒼鋼の冒涜者2（ブルースチール・ブラスフェマ）
蒼鋼の冒涜者3

HJ文庫1月の新刊

NEW 征天の無双神器	著／坂本一馬
セブンスターズの印刻使い2	著／涼暮 皐
蒼鋼の冒涜者〈ブルースチール・ブラスフェマ〉3	著／榊 一郎
六畳間の侵略者!? 21	著／健速
六畳間の侵略者!? 21　ドラマCD付き特装版	著／健速

蒼鋼の冒涜者 3

ブルースチール・ブラスフェマー

Ichirou Sakaki

榊一郎

Illust. 赤井てら

Bluesteel Blasphemer

さ01-04-03

榊一郎 蒼鋼の冒涜者3

HJ文庫

HOBBY JAPAN

榊 一郎 さかきいちろう

刊行点数を減らした筈なのに締め切りは以前より集中する不条理に喘ぎつつ、今日も原稿中。嫁の買ってくれた「着る毛布」が大変暖かくて良い感じ。

赤井てら あかいてら

宮城県出身のイラストレーター。
タイツが美味しい季節になってきましたね。

カバーイラスト／赤井てら　装丁／ AFTERGLOW

9784798611495

ISBN978-4-7986-1149-5

C0193 ¥648E

1920193006483

定価：本体648円＋税

順調に発展を始めたフリートラントに、宣教騎士団に追われていた傭兵が流れ着いた。それをきっかけとして訪れた宣教騎士は、街が教化済みでないことを見破ってしまう。戦力を整え、再び襲い来る宣教騎士団を前に窮地に陥るユキナリたち。
《教会》を前にしたアーロンと、戦う力を手に入れたが人を傷つけることを厭うベルタ。それぞれの決断とは――。

HOBBY JAPAN

榊 一郎　作品

プリンセスはお年頃! 1
プリンセスはお年頃! 2
プリンセスはお年頃! 3
模造王女騒動記フェイク・フェイク カーム・ブレイカー
模造王女騒動記フェイク・フェイク ルナティック・シスター
模造王女騒動記フェイク・フェイク エイリアン・ネイション
タタリ・ブレイカー弑子
蒼鋼の冒涜者（ブルースチール・ブラスフェマ）
蒼鋼の冒涜者2（ブルースチール・ブラスフェマ）
蒼鋼の冒涜者3

榊 一郎
蒼鋼の冒涜者3
（ブルースチール・ブラスフェマ）

（ブルースチール・ブラスフェマ）

蒼鋼の冒涜者3

榊 一郎

HJ文庫

HJ文庫

「何者だ……？」
アーロン達二人の宣教騎士と
斬り結んでいる何者かが……一人。
そう。たった一人なのだ。
ブルースチール・ブラスフェマ

私……
守護聖人像の向こうに控える
宣教騎士達の姿は見えた。
オルガノを演奏する者の姿もだ。
ただ、守護聖人像が手前に居るせいで、
時々その巨体が射線を遮って邪魔をする。
やるのか。できるのか。
自問するだけで手が重くなる。

初めてユキナリがベルタに与えてくれた御役目。
初めてユキナリがベルタに与えてくれたもの――〈テールリンガー〉。

今なら当てられる。確実に、ベルタが思い描いた場所に。
息を殺して。心を殺して。

引き金を――引く。

アンジェラ・ジンデル
王国の貴族ジンデル伯爵家の長女にして、ベイトソン隊の副隊長。自ら望んで宣教騎士となり、辺境への教化遠征にも積極的に参加している。
その程度の腕で私の前に立つのは間違いなのよ！
ヴェロニカ
フリートラントに流れ着いた女傭兵。たたし傭兵にしては妙に育ちが良さそうな部分を垣間見せる。とうやらハリス真教会との間に何か因縁かあるらしく　。
笑いながらアンジェラが次々と剣の攻撃を繰り出していく。本来、剣と槍ならば間合いの大きな槍の方が有利だ。しかしアンジェラの動きは鋭く、早く、積極的に前に出てヴェロニカを追い詰めていく。

ブルースチール・ブラスフェマ

蒼鋼の冒涜者3

榊 一郎

HJ文庫
616

口絵・本文イラスト　赤井てら

Blue Steel Blasphemy

CONTENTS

第一章 亡国の声 005

第二章 [illegible] 018

第三章 [illegible] 037

第四章 [illegible] 128

第五章 勇者の戦い 145

第六章 [illegible]の神と神 [illegible]

序章 亡国の声 1

合戦に滾る外の熱気とは裏腹に……場内は冷たく張り詰めた広く、しかし石造りそのままの無骨な一室。戦議場には実利の無い装飾など施さないのが慣わしである。と二十余りの座、燭台、そして壁に――これだけは色とりどり入りの旗があるだけだ。戦意高揚の為に唯一この場に許された……今となっては、ひどく重苦しい空気を醸し出していた。

戦議場に居るのは文官が一人、女官が三人、そして騎士が三人。部屋の広さに比してあまりに少ない。だからこそ凝る静寂がより一層、重圧となって彼等にのしかかっている。黙れと命じられた訳ではなく、外から伝わってくる諸々の音に耳を澄ませているのだ。

剣戟の音と。怒鳴り声と。軍靴の音と。それらが交じり合った……合戦の音。時折伝わ

る遠雷の如き重い響きは、破城槌のものだろうか。
それらは微かに、しかし確実に大きくなっている。
この城の奥に位置する戦議場にまで届く程に。
そして――

「……陛下！」

ふと一人が顔を上げてそう叫んだのは、聞き慣れた主の足音に気付いたからか。
次の瞬間、弾け飛ぶ様にして分厚い戦議場の扉が左右に開かれる。その向こうから現れた偉丈夫を目にして、文官と女官が安堵の溜息を漏らした。

「国王陛下……！」

一同の視線を集めながら戦議場の中央、円卓に歩み寄るのは身鎧を纏い、深紅のマントを翻す、壮年の男性だった。元より単なる成熟以上の何かが漲っている。
国王にして武人。ただ歩くだけの姿からもそれが分かる。

「すまんな。戦支度に手間取った」

脇に抱えていた兜を円卓の上に置き、男は――王は戦議場の一同を見回した。

「その方らも大事ないな？」

平伏しようとする者達の動きを片手で制しながら、王はそう問うた。

一同は揃って首肯する。だがこの城の奥にある戦議場の者達いつ敵兵が場内に雪崩れ込という事は……既に状況は逼迫しているのは明らかだった。んできてもおかしくない。

「ヴェロニカ、状況は理解しているか？」

問われて女官の一人が小さく頷いた。

いや。その娘は女官ではなかった。何故か王侯貴族のものとめの衣装に身を包んでいるが、その整った顔立ち、そして赤毛も見いだせる。血縁である事は一目瞭然だった。

「は。卑劣にもスカランの蛮族共は、奇襲攻撃にて我が王都を――」

「敵はもうすぐそこまで迫っておる」

娘の――姫の言葉に覆い被せる様に王は言った。

事実を事実のみとして認めるだがそれだけに重い言葉であ

「戦力を出し惜しんでいる場合でもあるまい。我も出陣する」

どよめきが戦議場に満ちた。

本来それは悲壮感を伴うものである筈だ。王たる者までが自ら剣を握って戦陣に立つな

ど、既に後が無いと告げている様なものである。

だが戦議場に居合わせた一同の表情には希望の色が、うっすらとだが浮かんでいた。

この国の王――ギャレット・ウォルフェンデンは生きた伝説だった。

彼は王族である。生まれついての権力者だ。権力と財力によって確保された安寧の中で、怠惰な人生を送っても責められる事などない立場でありながら……しかし彼は、これをよしとはせず、自らを王族であるより前に武人、と決めて鍛え抜いたという。

先代の王が在位中にも、辺境の反乱や国境線における紛争へと積極的に出向き、最前線で数多の兵に交じって剣を振るってきた。元よりの才に加え、実戦で磨き抜かれたその戦の技は、王族でありながらも達人の域に達すると評判であり――その武功は周辺諸国にも鳴り響き、『ウォルフェンデンに戦上手の王子あり』と語り草になっていたそうだ。

即位し、妻を娶って子をなしてからは、すっかり落ち着いたと言われ、良き夫、良き父、そして良き王として善政を敷いてきたが……その一方で、武人たる事を忘れた訳ではなく、朝晩に鍛錬の為に城の中庭で剣を振る王の姿を、多くの家臣が目撃している。

「父上！」

ヴェロニカが勢い込んで言った。

「では私も共に！　爺、私の具足と剣を持て！」

ヴェロニカ・ウォルフェンデン。

この父にしてこの娘在り――多くの家臣が苦笑交じりにそう囁く、血気盛んな姫君だ。

崇敬する父に少しでも近づこうと、女だてらに武術を学び、十二を超える頃にはもう、一般の兵士と剣で互角に打ち合える程の練達振りを示していたという。幼い頃に母を亡くして以来、ヴェロニカにとってギャレットは唯一にして最愛の家族だった。単に血の繋がりが在るという以上に、自ら言動の全てを以て、ギャレット・ウォルフェンデンに相応しい娘たらんと、武芸に磨きを掛けてきたという事もあるのだろう。

そんな健気な姫君を、家臣達も、そして父王も可愛がった。

「ヴェロニカ、歳はいくつになった？」

ギャレットはむしろ静かにそう尋ねてきた。

「は？　……い、いえ、十五になりました。初陣を飾るに足る充分な年齢です！」

予想外の問いかけに戸惑いつつも、ヴェロニカはそう答える。

ギャレットは微笑を浮かべて小さく頷くと、戦議場の壁――王国旗が飾られている壁の方を見遣って言った。

「クレール、トラウトマン、娘を頼む。近衛から数名を見繕え」

「陛下……？」

その言葉の意味を悟って二名の騎士と、そしてヴェロニカ
「ち、父上！　私は腕に自信があります！　今ではこの城内でも父上以外の人間で私に土をつけるものはありません。槍だろうと剣だろうと、負けは――」
「ならん。お前の戦場は此処ではない。今は、逃げよ」
ギャレットはそう断言した。
ヴェロニカは言葉に詰まる。父王は『逃げよ』と言った。
と彼が認めている事に他ならない。
だがヴェロニカにとってそれは、あり得ない事だ。
父が出陣を決めたのだ。一騎当千、生ける伝説の父が剣を
木っ端兵など瞬く間に一掃されよう。ヴェロニカはそう信じて疑わない。
「……姫様、こちらに」
ヴェロニカ付きの老騎士が彼女に言った。
「爺!?」
驚いてヴェロニカは隻眼の老騎士フーゴ・トラウトマンを振り返った。
若い頃は父王と共に戦場を駆けたとされる歴戦の兵である。ギャレットの信任も厚い。
矢傷を受けて片眼を失った後は、一線を退き、ヴェロニカの守り役を任されてきた。ヴ

エロニカの誇る武技の何割かは父に、そして残りは彼に教わったものだ。

そんな彼が――彼もがこの戦は負けると思っているのか。

「頼んだぞ」

ギャレットはそう言い残して踵を返す。

ヴェロニカは彼の背中に声を掛けようとして――しかし言葉が出てこない。ギャレットの後ろ姿ははっきりと娘の追従を拒んでいる。物心ついて以来、愚直に追い続けたからこそ、その背中の語る事をヴェロニカははっきりと理解する事が出来た。

「父上――」

「……姫様」

ただ呆然と去って行く父の姿を見送るヴェロニカの手を、老騎士が引いた。

脱出路は城の近く――鬱蒼と木々の生い茂る山林の中に通じる位置としては城を斜めに見下ろせる場所だ。

馬も入れず、足場も悪く、敵軍も奇襲の経路に選ばない行軍には向かない地形であるからだ。

なかった様だった。恐らくこの場で敵兵に遭遇する恐れはある此処まで来れば、ひとまず安全だ。

フーゴもそう判断したのだろう、小休止を宣言する。脱出路らない様な場所も多かった為、ヴェロニカも、そして護衛の騎

「父上……！」

それでもヴェロニカは這うようにして城を――戦況を俯瞰出来る位置へと進む。

そして木々の間から、改めて見慣れた自分の『家』がどうなったのかを、彼女は見る事になった。

「……！」

ヴェロニカは息を呑んだ。

城は彼女の予想した以上に大量の兵で囲まれていた。そして寄せる軍勢は勿論、何の躊躇も無く、城のあちこちを壊していまるで洪水だった。

蠢く兵の姿に、城の佇まいも数を増やしながら押し積んだ中庭も、全てが軍勢の呑み込まれていく。母の愛した庭園も、父と修練を下に踏みしだかれていた。恐らく連中が退いた後にはもう何も残るまい。まさに蹂躙だ。

守勢の兵達は必死に抵抗している様だが、明らかに攻め手の方が勢いがある。その上、次から次へと増援が到着している様だ。じわりじわりと防衛線が城そのものへと押し込まれていく。

ただ――

「父上……！」

にわかに沸き立つ守勢の兵達。

父王が指揮を執る近衛騎士団が出陣したのだ。いずれも父には及ばずとも精鋭揃い。彼等は大軍勢を前に臆する事無く最前線に出て、敵の雑兵を駆逐していった。

「ああ……」

敗色濃厚だったウォルフェンデン王国がにわかに盛り返していく気配が、遠く離れたヴェロニカにも感じられた。生ける伝説たる武王が、最前線で、末端の兵と共に戦っている。しかもその武技は伝説すらもがその全てを伝えきっていないと思われる程に、凄まじいものだった。

一撃必殺どころの話ではない。

ギャレットが長槍を振るう度に、二つ三つの首が宙に舞う。

不意を突いたという事もあろうが、瞬く間に十名以上の敵兵を斃すと、ギャレットは更

に近衛騎士団を率いて敵陣に深く切り込んでいく。勢いづいた兵達が更にその後に続き、城を包囲する敵の軍勢には、大きな『切り欠き』が出来つつあった。敵兵の足並みは乱れ、ギャレットを前にして恐れ、惑い、逃げだそうとした挙げ句、転んで味方を巻き込む無様な者まで居た。

たった一人でこの威力。これぞ奇跡。これぞ伝説。

ギャレット・ウォルフェンデンの参戦は確かに戦況を変えていた。

しかし……

「……あ」

思わずヴェロニカは声を漏らしていた。

最初に綻びが訪れたのはギャレットではなく、その脇を固めていた近衛騎士達だった。

精鋭とはいえ彼等も人間である。指揮者たるギャレットが如何に強烈な精神性を発揮していようと、出せる力には限界が有る。

また……ギャレットは強すぎた。

恐れず怯まず、次から次へと敵兵を斃していった結果、ギャレットと近衛騎士達は、深く敵陣に切り込みすぎる事になった。結果として王を先頭に細長い隊列を強いられた近衛騎士達は、側面からの攻撃を受け、一人、また一人と倒れていき、やがて包囲されてしま

う事になった。

周囲から十重二十重と押し寄せる敵兵。

ずらりと並んだ彼等の槍が、獲物を食い千切ろうとする顎のや近衛騎士達を苛んでいく。

だがギャレットは退かない。いや。既に退けない。

彼は味方の兵を鼓舞しつつ戦い続ける。

だが傍に居る近衛騎士は一人また一人と倒れていく。敵兵も様に後続が尽きる事なく押し寄せてくる。

こちらは数に限りが無いかのごとく幾つもの死体が折り重なり、死屍累々。敵も味方も区別無く、あるいは負傷者も倒れた上で踏み殺されて骸となり、足場はひたすら悪くなっていく。

武芸の神髄は足運びにあると言われる。それを封じられればそれ以上に斃されているが、せざるを得ない。目に見えてどんな武芸も威力を半減さそして――遂にギャレットや近衛騎士達が敵兵を「父上っ……！」の槍が折れた。

悲鳴じみた声を上げるヴェロニカ。

咄嗟にギャレットは剣を抜き、応戦する。

だがもうギャレット達の劣勢は明白だった。
厭くことなく殺到する敵の群れ。
名工の鍛えた剣も程なくして折れた。
ギャレットの動きもまた、目に見えて鈍っていった。
武王、生ける伝説、そう呼ばれていても、彼もまた一人の人間である事に変わりは無い。
やがて――
「……ー」
槍の一本が、鎧の隙間から彼の腹に突き刺さった。
一対一であれば決してギャレットも遅れをとる事など無かったであろう。だが数の暴力は英雄をも滅ぼす。名剣を手にした一人の達人よりも、石礫を投げる暴徒の方が強い。その事を……ヴェロニカが見た光景は嫌という程に物語っていた。
刺された事で生じた隙に、更に十本以上の槍がねじ込まれる。
王を守るべき騎士はもう一人も残っていない。
膝を突くギャレットを、調子づいた敵兵の槍が更に突く。
敵兵は四方八方からギャレットを突き刺し続ける。
既に彼は動きを止めていたが、安心出来ないとばかりに、まるで屍肉に集る鴉の様に、槍で四方八方から縫い止めら

れ、倒れ伏す事すら許されないその身体を、更に敵兵が突きまくった。

「ち……父上えええええええっ！」

ヴェロニカの絶叫も戦場の喧噪にかき消される。

巨大な――あまりに巨大な数の暴力。

如何に強かろうと、一人の人間は、それに対して余りにも無力だ。

その事を……情け容赦なく、身も蓋も無いその事実を、ヴェロニカ・ウォルフェンデンは十五歳になったばかりの春に、嫌という程に思い知らされる事になった。

第一章 傷だらけの稀人

瞼越しに白く強い日差しが染み込んでくる。
ユキナリは朝の訪れを知って、眠りの底から意識が浮かび上がるのを感じた。
「……」
短く二度ばかり瞬きをする。
何か陽の光がいつもと違う様に感じられるのは気のせいか。そもそも昨日まではこんな風に朝日を感じて起きる事は無かったのだが。この『神殿』で暮らし始めて数ヶ月――季節の移ろいに従って、日差しにも変化が生じているのかもしれない。
「ん……？」
頭を掻きながら身を起こすユキナリ。
改めて深呼吸をしてみると――未だ空気が冷たく湿っている。恐らくは未だ早朝なのだろう。既に外は明るい様だが、いつも起きる時間よりも若干早い印象だった。
「ふぁ……あ……」

自然と漏れる欠伸を噛み殺して、寝台から下りる。
改めて陽の光が差し込む窓の方へと眼を向けて――そこでユキナリは凍り付いた。
「……」
そこには一人の童女が立っていた。
十歳を幾つか超えたか否か……そんな雰囲気の娘である。こちらに背を向けているせいで顔は見えないが、体つきを見れば明らかに未だ成長途中――輪郭には、幼さがそこかしこに見て取れる。第二次性徴も未だ現れていない様だった。
「――ウルリーケ」
眉を顰めてユキナリは唸る様に言った。
後ろ姿だけだが間違い様が無い。この『神殿』でこんなに幼い姿をしているのは一人だけだ。ましてやその頭部に鹿の様な――否、枝の様に枝分かれする複雑な形状の『角』を備えている者も他に居ない。
異形と言えば異形なのだが、醜くは見えない。
それは良いのだが――
「何してるんだ？」
不思議と左右一対のその角は、童女の頭部に馴染んでいて

「む。ユキナリ――起きたのか」

童女ウルリーケが振り返り――その動きに釣られて、長い髪が流れるように動いた。

その色は芽吹いた若葉のような鮮やかな緑である。この髪が、先の角と相まって童女の姿を人ならぬものに見せているが、彼女の異形はこれら変わらない。とはいえ、彼女の異形はこれだからこそ、余計にまずいのだが。

普通の人間とはごくごく普通の人間とはごくごく普通の人間とはごくごく

ユキナリと話す際には元々に居るイグドゥーラのものである。どちらが主でどちらが従い状態らしいのだが、さすがただこの童女の物の考え方元々、人間とは生き物としての在り方が違う――違い過ぎる為、イグドゥーラは人間との言動はさておき、思考の根本正気の沙汰ではない様な事を例えば、全裸で、窓辺に立って陽の光を浴びるとか。

「草木は光と水で活力を得るを浴びるのじゃよ」

そう言って恥ずかしがる様してくる。白い肌の上には、によって描き出されている。血の代わりに葉緑素でも含いずれにせよ、この紋様に光を浴びる事で――光合成をするのだろうか。

ユキナリの言動が表に出ているより、明確な境目が無にこの辺りの感覚はユキナリにもよく分からない。

が、普通と明らかにずれているのは間違いなかった。

意思疎通の媒介としてこうした眷属を用いる。だが表面的ながイグドゥーラの影響下に在る為、ユキナリの眼から見れば

やらかしたりする。

一部じゃからな。此処に光

子も無く、その未だ凹凸に乏しい

裸体を堂々とユキナリに示

、複雑な紋様が薄緑色の線

いるのだろうか。

事で、ウルリーケの体内に

在る植物細胞が活力を得ているのは間違いない様だった。
「理屈は分かるが、服を着てくれ」
「うん？　何故じゃ」
無垢そのもの、小鳥の様なユキナリの前で素っ裸で居る事に何の疑問も、羞恥も、感じ仕草でウルリーケが首を傾げる。
（まあ植物だもんな……）
草花が裸で恥ずかしがる事は無いのだから、当然だが。
しかし前述の通り首から下の身体は——その薄緑の紋様はさておき、身体の輪郭は、明らかに成熟前の童女のものである。見せつけられる側のユキナリとしては、色々と問題を感じずにはいられない。
「まずいんだよ。色々と」
「まずい？　何がじゃ？」
「だからだな……」
どう説明したものか。
ユキナリが頭を悩ませていると——
「ユキナリ様、おはようございま——」

開け放したままの部屋の入り口から、一人の少女が姿を現した。
年の頃は十代後半といったところか。小柄だがウルリーケと異なり、既に女性としての丸みをあちらこちらに備えている。特に服の上からでもはっきりと豊かな膨らみを示す胸は、彼女が既に成熟しつつある証だった。
亜麻色の髪を三つ編みにし、おっとりと優しげな――若干の緩さを備えた目鼻立ちで、全体的に地味な印象が強いが、美人である事は間違いない。
ベルタ・ヴォーマン。
この『神殿』の主に――即ち『神』であるユキナリに捧げられた『巫女』だ。ユキナリとしては捧げられても困るのだが、本人を含め周囲の者に異論が全く無い様なので、彼女は何の疑問を感じる様子も無く、ユキナリの傍に侍っている。
「ユキナリ様……」
ベルタは驚きの声を抑え込もうとするかの様に、両手で口元を押さえて立ち竦む。
まあ朝の挨拶にやってきたら、主の――男の部屋で堂々と真っ裸の童女が立っているのだから、驚かない方がおかしい。
「ああ……ベルタ、これはだな」
硬直しているベルタにユキナリは溜息交じりに声を掛ける。

「ウルリーケの、朝の……習慣というか、そういうものらしくて」
「ユキナリ様」
ベルタは大きな眼を瞬かせて言った。
「お呼びくだされば、私はいつ朝でも夜でもご奉仕――」
「せんでいい。余計ややこしくなるから」
明らかに何か勘違いしているらしいベルタに顔をしかめてそう告げるユキナリ。
元々人喰いの地神に捧げられる予定だったベルタは、ユキナリによって助けられた訳だが……物心ついた頃から生贄たる『巫女』として育てられてきた為か、彼女は『身を挺して』の奉仕をする事が自分の存在理由だと思っている節がある。
先の地神を斃してこの地の神になったユキナリに奉仕する事が、彼女の精神的な安寧に繋がる様なのだが……ユキナリは勿論、人喰いの獣ではないから、『その身を捧げての奉仕』となるとどうしても、性的なものに偏ってしまう。
性的欲求が原因ではなく、純然たる使命感からユキナリに抱かれたがるので、非常に扱いが面倒くさい事になるのだ。
しかも――
「……ユキ」

部屋の入り口で立ち竦んだままのベルタの、更に、後ろ。
そこに、もう一人の少女が姿を現していた。
いつの間に来たのか、分からない。ベルタより更に小柄で華奢な為、その姿が見えていなかったのである。
短く切りそろえられた銀色の髪に、蒼い瞳、そして白磁器のように滑らかで白い肌。
いずれも怜悧で、生身の俗臭をまるで感じさせない、超然とした美しさである。黙ってそこに立っていれば精緻な造りの人形に見えるかもしれない。
ダーシャ・ウルバンというのが彼女の名前だ。
ユキナリの相棒であり、彼の恩人の妹であり、この世界を学ぶ上での師でもあり……とユキナリと彼女の関係は複雑で一言では言い表しにくい。
「何してる、の」
「俺は何もしてない」
とユキナリは主張するが、
「寝て、起きただけだ」
「ウルリーケと？」
「一人で！」
眼鏡の奥のダーシャの眼は、疑いに細められている。

ユキナリは大声でそう言った。
だがダーシャは尚も疑わしげな表情で、何処(どこ)からか取り出した〈レッチリ〉の装填孔(ローディングゲート)を開いて、弾(たま)を確かめる仕草をしている。
キナリに銃(じゅう)を向けて撃(う)ってくる事は無いだろうが、何というかまずい。
「……ユキ、女たらし」
「だから誤解――いやもういい。いいから銃仕舞(しま)え」
「日光浴は動物の身体にも良いと聞くぞ。ユキナリもどうか？」
「お前もいいから服を着ろ!!」
尚も素っ裸のままの童女に向けて、ユキナリは悲鳴じみた声でそう言った。

●

フリートラントは山間部の小さな街である。
王都から離れた僻地(へきち)にある為、比較的(ひかくてき)中央からの影響を受けにくく、事実上の自治を認められた地方都市だ。

辺境においてこの種の街や村や習俗を持つに至っている事が珍しくない。多くは独自の政して定住したのではなく、辺境に自然発生した小国が、そのまま形式的に王都の支配下に在るからだ。街道を利用した行き来についても、それぞれが王繋がっているばかりで、辺境地における地方都市群が、相互に都やその周辺の中央都市とその理由の一つが、これら辺境地にしばしば見られる『地神信仰』である。

地神……それは、霊的に強大な力を持つに至った生き物である。

正確には異獣や亜神と呼ばれて、一定範囲の環境に対する影響力を行使するに至った生物が、土地と霊的な結合をする土地は豊饒を約束される為、場合、これを地神と呼ぶ。多くわし、ある程度の安定した生活元々過酷な辺境地に住まう人々の場合、地神の影響下に在これが地神信仰である。は、地神達と『契約』を交だが何事にも代償というものが在る。

地神も、全くの無償で実りをもたらしたり、災害から街や村はない。を守ったりする程、酔狂で多くの場合に地神は人身御供を――つまりは生け贄を要求した。

元々土地と霊的な結合を果たした地神は、徐々にその知性や自我が拡散し、土地そのものに同化していく。これを防ぐ為には、高い霊力を持った存在、即ち同じ神か、さもなくば人間を摂取して知性や自我を繋ぎ止めておく必要があったのだ。

いざ災害や飢饉となれば数百、数千の単位で人が死ぬ。

数年に一度の生け贄でそれが防げるならば安いもの――多くの人々はそう考えてきた。

フリートラントも例外ではなかった。

だがそこに一つの異変が起こる。

生け贄の儀式に捧げられた『巫女』を喰らおうとした地神を、たまたま現場に居合わせた流れ者の青年が――即ちアマノ・ユキナリが殺してしまったのである。

神と呼ばれる事からも分かる様に、地神は人間に斃せる様な存在ではない。少なくとも個人で地神を斃した者の話などは、神話や伝説の中にすら存在しなかった。神とはあくまで万物の霊長たる人間を前提に、その上に君臨するもの、として定義された存在であり、超越的であるからこそ神なのだから。

結果……ユキナリは、フリートラントの新たな神として祀り上げられてしまう。

フリートラントは『地神の空白地帯』となってしまった。こうした空白地帯には新たな亜神が現れ、地神の座に就こうとする事が多い。地神になるという事は、即ち、永劫不滅

の存在として君臨する事に他ならず、亜神――未だ神になりきれていない獣達にとって、それは、ひどく魅力的な事であるからだ。

だが新たに現れる亜神が先の地神より悪質である場合、フリートラントは非常に困った事になる。要求する生け贄の量が桁違いに多かったり、戯れに人間を殺して喰う様な性質だったりすれば、大量の犠牲が出てしまう。

また……複数の亜神が現れ相争うような事態になれば、それら の争いに巻き込まれ街に被害が出ることも起こりうる。亜神が力を付けるのに最も手っ取り早いのは、数多く人間を喰って霊力を高める事であるからだ。

こうした事態を防ぐ為……フリートラントの人々は地神を殺害したユキナリに責任をとるように求めてきた。便宜的に彼を神として祀り上げ、『この地はユキナリの縄張りである』と掲げる事で、亜神の襲来や、それらの争いから、フリートラントを守ろうと考えたのである。

「……」

ユキナリは『神殿』とフリートラントを結ぶ参道を逆に辿って歩きながら、ふと、道沿いに流れる小川を見つめた。

見るからに『新しい』川である。

その周囲には殆ど草が生えておらず、綺麗な真水が流れているが、眼を凝らしても魚影は全く見られない。何より真っ直ぐに引かれたそれは、人の手によって造られたものなのは明らかだった。

街に近づくに従って、川は更に細かく分かれ、付近の畑にもまた作られて日が浅い事が分かる。開墾されたばかりの土地なのだ。そこでは未だ小さな若芽が列を成して陽の光を浴びていた。

「順調……かな」

ユキナリは呟く。

彼は請われてフリートラントの神の座についた。

だがこれは形だけの事で、本来の地神が行う様に、土地と繋がって環境操作をする様な能力は無い。いや、その方法さえ分かればあるいは可能なのかもしれないが、不老不滅と引き替えに、土地の一部になって、次第に薄れていく知性や自我に怯える生活など、真っ平御免だった。

だが、このままではフリートラントにおいて安定した収穫は望めない。

凶作になれば大量の餓死者が出るのは間違いないだろう。

失った土地は痩せていく一方だそうでなくとも地神の支配をこの問題を解決する為にユキナリが採ったのは、彼の持

つ知識を用いて、効率的な農法を確立する事だった。

ユキナリは、実を言えば、この世界の人間ではない。

異世界から飛ばされてきた魂が、『御遣い』と呼ばれる人造人間の身体に入った状態である。そして彼の元居た世界では科学技術が発展しており、教育水準も高かった為、農法の専門家でないユキナリにも、幾つかの改良案を思いつけたのだった。

まずは天候に影響されやすい水――不足しがちな水を安定して得る為に、近くの湖を水源として、街の近くまで用水路を引いてきた。

更に土壌の改良、肥料の改良といった幾つかの提案も行った。

勿論、この世界の農作物がユキナリの元居た世界のそれと全く同じという保証は無いので、その辺りはどうしても試行錯誤となるが、地神の存在によって農法の改良にまで意識が向く事の無かった人々に、『人の手で環境を変える』という考え方をもたらしたのは大きかった筈である。

実際――

「地神様じゃ！」

「おはようございますー」

フリートラントに向かう道を歩いていると、ユキナリ達の姿を見かけたフリートラント

の住人達が、野良仕事の手を止めて挨拶をしてくる。誰もが一様に笑顔で、ユキナリのもたらした幾つかの新しい農法が、順調である事がそこからも分かった。

「ウルリーケ様も」

彼等は一緒に歩いていたウルリーケにも挨拶をしてくる。

彼女はロストルークの街の地神であるイグドゥーラの、いわば名代としてこの地に来ている為、ユキナリと同様に畏敬の対象となっているのだ。農作物も植物である以上、彼女から教わる事も多く、ある意味ではユキナリ以上に、彼等はウルリーケにも期待を寄せていた。

ユキナリの隣にはダーシャやベルタの姿も在るのだが、こちらには人々は軽く会釈する程度である。ダーシャやベルタを軽んじているというよりも、ユキナリの一部の様な認識なのだろう。

「早くから頑張ってるな」

ユキナリは足を止めてそう住人達に声を掛ける。

以前は、明らかに年上の住人には敬語や丁寧語を使っていたのだが、相手にやたら恐縮されてしまったので、今はざっくばらんな喋り方にしていたという事らしい。

神を演じる以上、あまりへりくだっても良くないという事らしい。

「なに、これまでと違って、こんだけ水がありゃ、間違いなく豊作になるってもんです。そう考えたら働くのが楽しくてしかたないですな！」

鼻歌を歌い出さんばかりの陽気さでその男は言った。

他の者達も同意するかの様に頷いている。

「そいつはよかった」

人々に頷いて見せながら、ユキナリは辺りを見回して付け加える。

「街に近いとはいってもここは街壁の外だからな。亜神や異獣の類いには気をつけて」

「勿論ですよ、地神様もお気を付けて！」

「それじゃ」

軽く手を挙げて挨拶するとユキナリは再び畑の間を通り抜けて歩き始めた。

彼のすぐ後ろを歩きながら――

「……嬉しいですね」

ふとベルタが控えめな口調でそう言った。

「なんだか……こういうの……」

「そうだな」

ユキナリは頷きつつも、少し意外に思った。

ベルタは何につけても引っ込み思案というか……問われてもいないのに、自分の意見や気持ちを口に出す事そのものが珍しい。これはユキナリ達と暮らす内にベルタが少し変わってきたのか、それとも、今の状況が特に嬉しくてつい口をついて出てきた言葉なのか。

生まれ育った街が豊かになる事を喜ぶのは、自然な事だろう。

特異な生い立ちのベルタが、より人間らしい、普通の感情を取り戻しているのならそれは喜ばしい事である。

そんな事をユキナリが考えていると――

「ユキ、急いだ方がいい」

ぐい、とユキナリとベルタの間に、小柄な身体を割り込ませる様にして言ってきたのは、ダーシャである。

「人を待たせるのは、良くない」

「ああ。そうだな」

苦笑してユキナリは頷いた。

ダーシャはダーシャで、ベルタとは別の意味で不器用なところがある。

あまり表情にも声音にも感情が見えないのだが、こちらはどうしてそうなったのかは、ユキナリもよく分かっていない。ベルタ同様に、いや彼女以上に特異な生い立ち――錬金

術師の身内として監禁生活を強いられた上、ユキナリと出会うまではろくに眼も見えていなかった事――が影響しているのは間違いないのだろうが。

いずれにせよ、二人共、今の四人での生活は、思った以上に楽しかった。

彼女等にウルリーケを加えた四人での生活は、思った以上に楽しかった。

三人の少女達と同じ屋根の下で生まれ変わる前の世界では、姉と二人だけで身を寄せ合う様にして暮らしてきただけに、しは、ユキナリに充足感を与えてくれていた。

寝起きし、一つの街の未来の為に試行錯誤を繰り返す暮らただ――

（姉ちゃん……）

ふと、ユキナリは死に別れた姉の事を思い出す。

ユキナリと同様、もう逃げ様のない火災に巻き込まれていたろう。姉が死んで、自分も死んで、しかし自分だけがこんな異世界に生まれ変わって、幸せを感じながら生きている。そんな気持ちすら覚えた。今更、あれこれと悔やんでもどうにもならない、どころか、思い返してもあの火災はユキナリにはどうにもならない事であったのだが。

「……ユキ」

ふとダーシャが声を掛けてくる。彼女に促されて視線を改めて前に向けると――街の方から、三人分の人影が近づいてくるのが見えた。

農作業の為に出てきたという訳ではないのは、見れば分かる。腰には剣を吊るしていた。馬にこそ乗っていないが、明らかに騎士の戦闘装備だ。

「……む」

その中の一人が、こちらに気付いた様だった。

面頬をはね上げている為に、表情が見える。金色の髪の、いかにも育ちの良さそうな顔立ちの――良くも悪くも貴族然とした青年である。端正だが妙に傲慢というか尊大という か、やたらと仕草のせいで、屈折した様な印象がある。

名前はアーロン・ランズダウン。

彼はハリス真教会という宗教団体に属する宣教騎士だった。

その身分を、彼は失っていないのだが。

元々彼と彼の所属する宣教騎士団は、教化遠征、つまりは『野蛮な習俗に盲従する辺境の蛮族に、真に尊い教えを広める』為にこのフリートラントにやってきた、大義名分はさておき、要するに、武力によって自分達の勢力を広げようとしたのだ。

彼等は地神信仰を否定している。

そしてたまたま地神役を担っていたユキナリと彼等は衝突する事になってしまった。

ユキナリは彼等を……撃退した。騎士達を制圧したのみならず、彼等が最終兵器としてれにはダーシャの援護もあっての事だが、事実上、ユキナリは一人で一つの軍事集団を撃持ち込んできた守護聖人像、機械仕掛けの戦闘兵器を完膚なきまでに破壊した。勿論、こ退した事になる。

だがこの勝利は、あくまで一つの部隊を斃したに過ぎない。

彼等の背後には巨大な宗教組織たるハリス真教会が控えており、強化遠征軍の敗北を知れば、それに倍する、いや桁違いの戦力を送り込んでくるのは明白だった。

故にユキナリは一計を案じる事になる。

アーロン達を殺さない代わりに、『無事にフリートラントを制圧した』という偽の報告を彼等にはさせた。強化遠征軍はそのまま現地で駐屯部隊として留まる事が殆どなので、不審に思われる事も無い。アーロン達は命を助けられた上、任務失敗を中央に知られる事無く、面目が立つ、ユキナリ達は後続の強化遠征軍を警戒する必要が無い――そういう取引を持ちかけたのである。

こうしてアーロン達は、微妙な立場のままこのフリートラントに留まっている。

「よう、アーロン。これから見回りか？」

ユキナリはかつての敵にそう声を掛ける。

現在――彼等にはフリートラント周辺の治安維持を担ってもらっていた。

先の住人達にも声を掛けた通り、街の外には異獣や亜神のみならず、危険な野生動物も出没する。農作業に出る住人達の全てをユキナリ一人で守り切る事など出来る筈も無いので、アーロン達にユキナリから巡回警備を依頼したのだ。

これは元々、宣教騎士団がフリートラントを教化した際、彼等がやるべき仕事の一つだった。それ故、ユキナリからの依頼、という事に難色は示したものの、比較的すんなりと彼等はこの役目を受け入れてくれていた。少なくとも街のあちこちで雑用だの何だのに駆り出されてこき使われるよりはマシと考えているのだろう。

「……ああ」

アーロンは、見るからに嫌々といった表情と口調でそう応じてきた。

後ろの二人は面頬したままなので表情は分からないが恐らくはアーロンと似たような物だろう。偽りの報告で共犯関係にあるとはいえ、彼等は未だハリス真教会の宣教騎士であるという自分の立ち位置を捨ててはいない。ユキナリに脅されて仕方なく――という言い訳が彼等の中では成り立っているのだろう。

「……まったく貴様の様な奴が神などと……」
ぶつぶつと吐き捨てる様にアーロンは言う。
「せめて立ち居振る舞いを少し考えたらどうなのだ」
「立ち居振る舞い……？　どういう意味だ？」
ユキナリは眉を顰めて言った。
「どうもこうもそのままの意味だ！　どうしようもない奴だな貴様は！」
「おい、ランズダウン……」
後方の二人が慌てた様に声を掛けてくるが、構わずアーロンは言った。
「野蛮なる辺境の信仰とはいえ、貴様はその信仰を捧げられるべき神なのであろう！　神ならその振る舞いというものがある！　そんな事も分からんのか!?」
「振る舞いって……」
そもそも神の定義はひどく曖昧だ。
人が人以上の力を持つ圧倒的な存在をひとまとめにして神と呼んでいるに過ぎない。だから人によって神という言葉の意味する所は変わってくる。
アーロン達が信じているハリス真教会は唯一神を奉じる一神教だが、それはあくまで信仰の対象というだけで、実際に『私は神である』と主張する存在が居る訳ではない。そう

いう意味でハリス真教会というのは、ユキナリの知る宗教に極めて近い。
　一方……地神や亜神に代表される様な『実体を持つ神』もこの世界には居る。例外も勿論在るが、彼等の多くは、その形態から性格まで多種多様、更には数も常に変動する。新たに神と『成る』獣も居ればだり消滅したりする神も居る。こちらはどちらかといえば多神教だろう。
　神とは事程左様に千差万別である。
　かくあるべし、などという決まりがあるとはユキナリには思えなかったのだが。
「そもそも神とは威厳に溢れるものなのだ！」
　アーロンは拳を握りしめてそう主張した。
「いや、確かにお前の神様とは違うだろうけど……」
「比べるのも汚らわしいが、我々ハリス真教会だろうと蛮族どもの宗教だろうと同じだ！　威厳に溢れる相手だからこそ崇め奉る甲斐があるというものだろうが！」
「はあ……」
「隔絶されているからこそ畏れる。畏れるからこそ敬う。力を示し、その威を以て周囲を圧倒し、制し、御する。それぞ神の在り様だろう！　それを何だ、貴様は……その辺の庶民と気易く言葉を交わすな！　貴様の振る舞いは力の価値を貶めるだけだ！」

「……」

ユキナリは困惑していたが、他の二人の宣教騎士と同様、アーロンもまたユキナリを恐れて彼の機嫌を損ねる様な事は言わないと思っていたのだが。

どうもそんな損得計算や保身の意識が働かない程に、ユキナリの言動は腹立たしいものに見えるらしい。アーロンの言葉をそのまま借りれば、『威厳に欠けて神らしくない』といったところか。

一方で、アーロンはふと、そんな事も思った。

実際、前述の様にユキナリは街の住人に対して、年齢その他一切関係なく、敬語や丁寧語を使うのを止めた。仮初めとはいえ、神の代役を引き受けてしまった以上、それに相応しい立ち居振る舞いをした方が何かと円滑に物事が進むという事はあり得る。

しかし――

「大体、貴様は――」

「……うるさい」

そう言ったのはユキナリではなく、ダーシャだった。
彼女は眼鏡の奥の瞳でアーロンを睨む。
途端――慌てて後方に居た二名の騎士がアーロンを押さえに掛かった。
「すみません」
「ランズダウンにはよく言って聞かせます」
彼等はそう言って頭を下げると、ユキナリ達の横を通り過ぎようとしたアーロンを引っ張って行ってしまう。その際、ユキナリには腰回りの装甲に孔が空いているのに気付いた。
銃弾痕である。
フリートラントに来た当初、ユキナリかダーシャの銃撃を受けた経験の在る宣教騎士だったのだろう。つまり〈レッチリ〉やユキナリの使う〈デュランダル〉の44マグナム弾の威力は――鋼の鎧すらぶち抜くその力は、文字通り骨身にしみて知っている。
ダーシャを怒らせてはまずい、と判断したらしかった。
「ダーシャの方が神様らしいかもな」
「……？」
ユキナリに言われて首を傾げるダーシャ。

「何でもないよ。急ごう」
ユキナリは苦笑してそう言うと、ダーシャの背中を押す様にして、歩き出した。

●

「今の所は順調ですね」
娘は、フリートラントの現状をそう評した。
窓辺から差し込む陽の光を浴びて、長く艶やかな金の髪が輝いて見える。
とても綺麗な娘であった。
「新しい畑は順調に作物が育ってきている様ですし、周囲で亜神や異獣を見かけたという報告もありません。このまま順調に進めば収穫量は二割から三割は増えるでしょう」
単に目鼻立ちが整っているという事が、ほんの少し相対しているだけでも良いのだという事が、口調には淀み無く、表情は怜悧そのもの……見るからに理知的で、所作の端々には気品すら感じられる。育ちだけでなく頭も良いのだ。
でもよく分かるのだ。加えて気の強さが、その翡翠色の瞳にも表れていた。
それも当然と言えば当然――世が世なら彼女は『姫』と呼ばれていてもおかしくはない

血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多いというものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者そもそも地方都市の街長というものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者の血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多いというものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者そもそも地方都市の街長というものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者の血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多いというものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者そもそも地方都市の街長というものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者の血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多く、街長の家系として認められている。

そもそも地方都市の街長というものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者の血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多く、街長の家系として認められている。

そもそも地方都市の街長というものは、元からその土地に住んでいた小国の王や有力者の血筋と立場の人間である。

フリートラント街長の娘にして街長代行フィオナ・シリングスがそのまま任じられる事も多く、街長の家系として認められている。

そして体調を崩して伏せりがちな父に代わって、事実上、この街の諸々を取り仕切っているのがこのフィオナなのである。

「それは何よりだ」

この少女の真正面に座って頷くのはユキナリである。

彼の左右にはそれぞれ、ダーシャとウルリーケ、そしてベルタの姿も在った。ユキナリ達がこのフリートラントの街にやってきたのは、街長代行たるフィオナと諸々の打ち合わせをする為である。

「しかし二割、三割か……倍増とまで期待していた訳じゃないんだが、中々劇的には変わらないもんだよな」

と苦笑を浮かべてユキナリは言った。

用水路を引いて。肥料を用いて。畑そのものを増やして。

ユキナリは勿論、フリートラントの住民達も結構な労力を掛けて環境を整備してきたのだが、それに見合う収穫量の増加かどうかは、少し怪しい。住民の数は――農作業に従事する者達の人数は変わらないのが本当の所だろう。

「理屈は理屈ですから」

とフィオナはあまり気にした風も無い。むしろその二割三割が重要であるという風に彼女は微笑を浮かべて続けた。

「実際にやってみないと分からない事も多いですね。とはいえ一割でも収穫量が増えそうなのは、大きいですよ」

「まあ、そう言って貰えると俺も助かるが」

ユキナリは肩を竦めた。

前述の通り、地神の代わりにこの街の守護者を引き受けたのは良いとしても、地神の担っていたもう一つの役割――豊饒を約束するという点は、ユキナリ自身にはどうにも出来ない。だからこそ地神に生け贄を捧げて豊作を祈る様な、旧来のやり方を一掃できる様な、住民達を安心させたかったのである。

ベルタ一人を助けて人喰いの地神を殺した結果、何十人、何百人という餓死者が出てしまったのでは、割に合わないだろう。

「次に交易ですが」

彼女はウルリーケの方を一瞥してから続けた。

「幸い、私達が提示した幾つかの品に、ロストルークの方達が興味を示してくれました。これと引き換えに食料と、開拓した畑に植えるための種や苗を分けてもらえそうです」

「それも何よりだ。畑だけあっても、植えるものがなきゃはじまらないからな」

栄養学的な見地からも、そして各種災害に対する危機管理の見地からも、栽培する作物は種類が多い方が良い。作物が持つ栄養はそれぞれ微妙に異なるし、冷害に強い植物もあれば、日照りに強い植物もある。フリートラントで代々作られてきた作物以外にも、他所から持ち込んだ作物を栽培する事で、こうした問題に対応しようという考えである。

畑を広げたのも、単純な収穫量を増やす、という事以外に、こうした『新しい』作物を試験的に栽培する実験場を確保する、という意味合いがあった。

街の住人達はあまり細かい事までは理解していなかった様だが——さすがに王都に留学して学んできただけあり、フィオナは早々にユキナリの意図を理解してくれた様だった。

実際、彼女は察しが良いし、何かを教えても理解が早い。身につけた知識を応用する事にも長けている。ユキナリが様々な思いつきを試せるのも、彼女の補佐在っての事だ。

「交易路も問題無い様です。イグドゥーラ様が異獣や亜神を遠ざけてくださっている様で

すし、宣教騎士達も今の所は真面目に働いてくれている様です」

「……みたいだな」

先程出会ったアーロン達の事を思い出しながらユキナリは言った。

宣教騎士達には、ロストルークとの交易の護衛及び、開墾地の定期巡回警備を頼んである。さすがに元はこの街にやってきた宗教的侵略者であるから、未だ全幅の信頼を置く訳にはいかないだろうが、武装を取り上げ、鎖に繋いで、奴隷の様にこき使うよりは、多少なりとも有意義だろう。警備や護衛といった仕事には適材適所だった。

「眷属の方にも問題は出ておらんな」

と言うのはウルリーケである。

彼女自身がイグドゥーラの端末、つまりは眷属である訳だが、ロストルークから離れたこの地で彼女が問題無く活動できているのは、『中継』として交易路に一定間隔で配された他の眷属が居るからだ。

この眷属達はウルリーケとイグドゥーラを繋ぐ中継役であると同時に、交易隊を守る為の存在でもある。イグドゥーラの気配を纏う彼等は、地神としての『縄張り』を主張して亜神や異獣を遠ざける役にも立つ。

「他の眷属の方々の社も出来るだけ早急に用意させる予定です」

「うむ」

フィオナの言葉にウルリーケは鷹揚に頷いて見せた。

実は――中継役の眷属達は、今現在、野宿の状態である。元々植物であるイグドゥーラの眷属だけに、雨風に晒されるのはさして苦にはならない様だが、だからといって神の遣いを野宿させておくというのも、あまり体裁の良いものではないだろう。

交易路の目印の意味も兼ねて、最低限の小さな社を眷属達の為に建てるという案は、早々にフィオナ達の方から出ていた。

（まるでお地蔵さんだよな）

ふとユキナリはそんな事を思う。

彼の生まれた異世界――日本においては、民間信仰として道祖神という概念があった。

路傍の神とも呼ばれ、境界を守り、子孫繁栄、旅の安全を祈る神として祀られてきたという。『お地蔵さん』とは、元々地蔵菩薩という仏教から来た概念が基になっているが、道祖神信仰と結びついているので、しばしば道の脇の小さな祠に祀られているのを見かけたものだ。

「なんじゃ？」

とウルリーケが首を傾げて問うてくる。
どうやらユキナリが微笑しているのに気付いたのだろう。
「いや。俺の元居た所にも、少し似た様な神様が居たなって」
「ほう。興味深い話じゃの」
「まあ、それはまた今度」
身を乗り出してくるウルリーケの興味をかわして、ユキナリは話題を変えた。
「そういえば、ここに来る前にアーロン達に会ったよ」
「何か失礼な事を言いませんでしたか？」
フィオナは苦笑を浮かべてそう言ってきた。
アーロンとフィオナは、元々顔見知りだ。王都の学院で机を並べて学んだ、いわば同窓生なのだという。その頃から妙に尊大で極端な物言いが多かったらしい。
「ああ、まあ、な」
曖昧に言葉を濁しながらユキナリはダーシャを一瞥する。
黙っていてくれ、という合図だ。アーロンが噛み付いてきたのは事実だが、いちいちそれをフィオナに告げ口する様な趣味は無い。むしろ彼の立場からすれば笑顔ですり寄ってこられる方が不気味である。
報告されればフィオナとしても立場上、アーロンを諫めねば

ならないだろうし、少しずつに、また軋轢を生む様な真似は避けたかったのだ。

ともあれ――

「まあ基本的な部分は何とかなったとして」

ユキナリは腕を組みながら言った。

「ここからは応用だな。一つ提案がある」

「提案、ですか？」

「ああ。ちょっとした思いつきなんだが、開墾した土地のいくんだ。その許可をもらいたいと」

「許可も何も……ユキナリがしたいというのなら、私達に止めど。一体、どのような試みを？」

「俺の能力であるものを錬成する。それで農地の一部を覆うつ

「覆う……？　保温の為です眉を顰めてフィオナは呟いた。

彼女自身も自分の知識の範囲で色々考えている様だが――

「失礼ながらユキナリ、そんな事をしては、光が足らず作物が育たなくなるのでは？」

保温や保湿の為に一定期間、畑を布やゴザの類いで覆う、というのは知識としてユキナリにもある様だった。だがユキナリの考えているものとは根本的に異なる。

「布や木の板で覆うのならなんとなく分かるけど……ガラスを――その白い顔を横切る眼鏡を指さした。

言ってユキナリは傍らのダーシャを――その白い顔を横切る眼鏡を指さした。

「硝子、だよ。大量に硝子を作ってそれで温室を作る」

「温室……ああ、そういえば王都で見た事があります。南方の花を育てたりする為の、あの、温室でしょうか？」

首を傾げてフィオナが呟く。

「理屈としては同じものだな」

王都には交易路を介して各地から様々な品が持ち込まれるとともに、辺境の動植物が持ち込まれる事も多いらしい。しかしそれは貴族の趣味嗜好を満たす為の一環に過ぎず、温室というのもその範囲内に収まるものでしかない様だった。

「花を育てる様な温室は小さなものが多いだろ？　精々、部屋一つ分とかそんな」

「それは……確かに」

頷いてから、フィオナは改めて驚きの表情を浮かべた。

「まさかユキナリ、畑を丸ごと納める様な大きなものを造ろうというのですか？」

「正解。硝子なら光を通すからな」

にやりと笑ってユキナリは言った。

「……硝子による温室、は」

それまで黙っていたダーシャが、ふと口を開いた。

「植物の生育に必要な光は確保出来る一方で、実体のある『壁』として、空気の流れを制限する事も、可能。『扉』を開け閉めする事で、植物の育成に必要な温度、湿度を、保つ事が、可能」

「それは……」

「当然、病虫害からも隔離、出来る」

「……！　そんな事が？」

さすがにその発想はフィオナにも無かったらしい。

そもそも病虫害を防ぐという意味では、それなりに密閉度の高い施設が必要になってくるが、巨大な硝子温室という発想そのものが無かったフィオナとしては、気密性の高い温室を造るという事そのものが、不可能に思えるのだろう。

だが――その一方でダーシャは元錬金術師の助手である。

むしろ気密性の高い容器や、無菌状態を確保する為の硝子製実験器具など、その手のものには馴染みが深い。ダーシャにしてみればそれをただ大規模にしただけ、という認識なのだろう。

そしてそうした品に最も必要とされる精度については、ユキナリが自ら造る以上、何の問題も無い。銃器の部品や、人工の水晶体まで造り出せる彼の能力は、構造さえ理解していれば ミクロン単位の電子回路でも造り出す事が可能だからである。

「温室なら、寒い季節でも、暖かい季節と同様の栽培が可能になる。弊って問題は在るけれど、年中、季節に関係なく安定して作物を育てる事が出来る施設っていうのは、間違いなく収穫量の増大に繋がる」

「確かに……しかし硝子で畑を丸々覆うなど、考えたこともありませんでした」

フィオナは不思議そうに眼を瞬かせながらそう言った。

確かにこの世界で硝子は――特に透明度の高い品は貴重品だろう。大量に用意するだけでも相当な金銭が必要になってくる。わざわざ畑をそんなもので覆おうなどと考える人間は居ないだろう。

「もちろん硝子だけじゃ強度が足りないだろうから、しっかりと柱や枠で固定してやらないといけないだろうけどな」

硝子は重い。勿論、太い木の柱でも支えられない事は無いが、出来るだけ光を採り入れる面積を増やしたいならば、鉄の様な素材で枠組みや骨組みを作った方が良かろう。」

「では材料はユキナリにお願いします。ですが人足はこちらで手配するので、必要になったら声を掛けて下さい」

「わかった。頼むよ」

「何度も言いますが」

フィオナは微苦笑を浮かべて言ってきた。

「ユキナリはただ命じてくれれば良いのですよ。頼むなどと言わずとも。貴方は私達の神なのですから」

「……」

ユキナリは言葉に詰まる。

彼にしてみれば、この農作業や交易への提案と尽力は、いわば事情も良く知らないままのフリートラントと地神の関係に介入し、地神を殺してしまった事への『贖罪』の様なものだった。ベルタを助けた事を後悔はしていないが、その結果については責任を持たねばならないとは思っているが。だからこそユキナリとしてはフィオナを介して街の住人を労働に駆り出すのは、『要請』もしくは『助力を請う』事であって、命令すべきものではない

と考えていたのだ。
しかし……
（アーロンは、こういう所にいらついてたんだろうな）
そんな風にも思う。
神は神として堂々と――横柄とも言える姿で振る舞っていなければ、従う側にも疑問や躊躇が生じる。神の役目をする以上、その辺りの事は、ユキナリ自身の感情とは切り離して考えるべきなのかもしれなかった。
（柄じゃないっちゃ、そこまでの話だけどな……）
そんな事をユキナリが考えていると――
「――し、失礼いたします！」
扉を叩くのもおざなりに、一人の男が慌てふためいた様子で部屋に飛び込んできた。
「なんですか、無作法ですよ」
フィオナが眉を顰めて男を窘める。
だが男は明らかに礼儀だの作法だのを気にしている余裕が無い程の慌て振りだった。
「も、申し訳ありません。しかし急ぎフィオナ様にお伝えしたいことがあります。地神様好都合、ともかく街の外までお越しください！」
もいらっしゃるのでしたら、

言っている事が、まるで要領を得ない。

ユキナリが居れば好都合という事は、亜神でも襲ってきたのだろうか。

とにかく男の切迫した様子に、事態の逼迫振りを感じ取ったユキナリは、ダーシャ達共々、席を立った。

●

鋼と鋼の撃ち合う響きが先ず耳についた。

ただそれだけであれば鍛冶仕事や大工仕事でもあり得る音だ。

だがそこに怒声や罵声が混じれば、全く別の場面が容易に想像できる。

「……！」

男に案内されてユキナリ達が駆けつけたのは、フリートラントの街壁に設けられた幾つかの街門の一つだった。先程、ユキナリ達がくぐってきたものとは別だ。主要街道に真っ直ぐ繋がる正門とその道は一つだが、通用口とも言うべき門が幾つか設けられており、そこからは畑や周辺地域に向かう為の細い道が延びている。

門をくぐって山の方に繋がる細い道を進むと、程なくして問題の現場が見えてきた。

こちらに背を向けているのは、アーロン達――街の周囲を巡回していた三人の宣教騎士である。いずれもが剣を抜き、小型の盾を掲げて戦っている。

そして彼等に対して剣を抜き、斬り結んでいる何者かが……一人。

「何者だ……？」

厚手の外套を着て、フードを目深に被っている為に、その容姿は判然としない。

ただ、その立ち姿は決して巨躯という訳ではない。外套の下に鎧を着込んでいる可能性も在るので、細かい体つきは分からないが――背丈はユキナリと同程度、手足の長さもごく普通だ。

手にする得物は槍、いや長柄戦斧と呼ばれる複合的な武器だろう。ただ突くだけでなく、薙ぎ払う動きにも威力を発揮する。間合いが大きいので剣を相手にしても有利な場合が多いが、狭い場所での戦いにはその長さを持て余しかねない――そんな武器だった。

外套にはいくつか血で出来た野盗の類いだろうか。だが曲らしい赤黒い染みがついていた。がりなりにも相手は宣教騎士、それも三人を相手に、一歩も退かずに戦うその様子は、明らかに武術の訓練を受けた者のそれだ。

「……ッ！」

『外套』が手にした長柄戦斧を突き出す。

「ぬわっ!?」

串刺しにされる直前でアーロンが身を捩った。

長柄戦斧の切っ先が彼の鎧の表面を、火花を散らしながら抜ける。

同時に彼の左右に控えていた騎士二名が、突きを放って体勢の伸びきった相手に――無防備とも見える姿の『外套』に斬り掛かる。

人間の身体の構造上、前に出るよりも後ろに退く方が遅くなる。長い槍を携えていては尚更だ。騎士二人の斬撃はそこを狙っての事だった。

だが……『外套』はそこから予想外の行動に出た。

前には出ない。後ろにも退かない。その場で長柄戦斧を手にしたまま、身を限界まで沈めて左右からの斬撃をやり過ごす。続けて長柄戦斧を引き戻しつつ片足を軸に回転しながら『外套』は身体を伸ばした。

当然、『外套』本人と共に回転した長柄戦斧が不用意に接近した騎士二人はあっさりと転倒してしまった。全身鎧を着けている彼等はそれだけでも相当な衝撃であったか、二人は倒れたまま低い呻き声を漏らしている。

だが彼等にとどめを刺さず、武器を構え直した『外套』は再びアーロンに向き直る。

アーロンは『外套』に斬り掛かるが、長柄戦斧の柄でこれを攻撃を届かせる事が出来ない。二度三度と剣を振っている間にきたが、そこからはまた同じ事の繰り返しだった。

「なんだあいつは……？」

アーロン達は三人、相手は一人。

それでも勝てない。三人が気づいたときにはもうあんな感どめを刺すことができず、よどうやらこんな状態がしばらく続いているらしい……が。

「わ、わかりません、ただ俺うやく拮抗状態を保っているといった有様だ。

じで……」

（攻撃力はともかく、体力はそうはいかない）

ユキナリの読み通り、僅かずつだが『外套』の動きが鈍ってきた。

二人を相手に長時間戦い続ければ、どう考えても体力は先に

「せやっ！」

『外套』の動きが鈍ったのにアーロンも気付いたのだろう、彼る。相手の身体ではなく長柄戦斧狙いだ。相手が自分の斬撃を最初から武器を狙いに行ったのである。

『外套』もアーロン達にと

尽きる。

は大きく踏み込んで剣を振これで受けるのを見越して、

甲高い鋼の音と共に、長柄戦斧が『外套』の手からはじき飛ばされる。

これで勝負は決した――と思いきや、飛ばされた得物が地面に落ちるよりも早く、『外套』は外套の中に隠し持っていた長剣を引き抜いて、斬り掛かった。

一つの武器に拘泥しない。状況判断が異様に早い。

「ぬおっ!?」

血相を変えて斬撃を回避するアーロンに、追撃が繰り出される。

後ずさりつつ、どうにかこれをかわしきるアーロン。

もし三対一でなければ次の一撃で完全に決まっていただろう。

「せやっ!!」

他の二人がアーロンを庇うように斬りかかる。

だが『外套』は二人の僅かな速度差を見切ると、自分の剣で易々とこれらの斬撃を受け流した。剣に持ち替えたことで明らかに攻撃の速度が上がっているのだ。

「これは……」

生半可な相手ではない。

間違いなく実戦経験豊富な武術の達人だ。しかも複数の武器を使い慣れている。

アーロン達には巡回の途中で亜神に遭遇した時の為、ユキナリは複製した〈デュランダ

ル〉を手渡しているが、彼等がそれを使う様子は無かった。使い慣れない武器なので躊躇しているのか、それとも人間相手に『銃』を使うのは卑怯だとでも思っているのか。

「それで死んだら元も子もないだろー〈デュランダル〉を使えー！」

いっそ割って入るべきか――そう考えたユキナリだが、彼の叫びにようやく自分達が強力な武器を携帯している事を思い出したのか、アーロン以外の二人が後方に退きながら背中に吊っていた〈デュランダル〉を構えた。

しかし『外套』は止まらない。

当然と言えば当然――この世界に『銃』という武器を持ち込んだのはユキナリだ。あの『外套』には〈デュランダル〉が単に、拵えのごつい剣にしか見えていないだろう。むしろ銃を撃つ為の構えが、隙だらけにすら見えたかもしれない。

『外套』は一気に間合いを詰める。

その動きの速さに、〈デュランダル〉を構えた二人はろくに狙いも定めず慌てた様子で引き金を絞った。

空気を引き裂く様な破裂音。

音速を超える速度で撃ち出される強力な44マグナム弾。

だが銃というものは、余程に扱い慣れた者でも、不規則に動き回る的に当てるのは至難

の業だ。ましてや慌てて
実際――二人の撃った
は、奇跡の様な幸運だっ
なるが、それで怯む様子
た訳ではないので、その
「あいつは……」
露わになった『外套』
先ず目に付いたのは、
顔の左右に二房、長い
めに整えられている。
切れ長の眼は涼やかで
は焦りも怒りも見えず、
いや。それよりも何よ
「……女？」
歳は、二十歳前後だろ
そう――それは明らか

に狙いも定めていないとなれば、
が『外套』のフードを掠めたの
弾丸は外れた。むしろ弾丸の片方が
ただろう。フードが裂けてめくれ上
は無い。大きな音に多少驚きはした様だが、弾丸を実際に視認し
威力を――脅威を『外套』は理解していないのだ。
の顔を見て、ユキナリは思わず驚きの声を上げていた。
燃えるような赤い髪だった。
髪が揺れているが、動きの邪魔にならぬ様にか、髪は全体的に短
鼻筋の通った整った顔立ち。戦いの場でありながら、その顔に
淡々と単純作業をこなすかの様な落ち着きが見えた。
に女の顔だった。

「……!?」

驚いたのはユキナリだけではなかった。

自分達が三対一でも翻弄されていた相手がまさか女だとは思わなかったのだろう。二人の騎士は驚きで動きが止まっていた。

半ば棒立ちの二人に向けて、一人の『外套』は――女は、間合いを詰めると、素早く二度の斬撃を繰り出す。二人の騎士は辛うじて〈デュランダル〉を掲げてこれを受けたが、見た目以上に重い一撃だったのか、彼等の手から〈デュランダル〉が弾き飛ばされて地に落ちた。

「おのれっ！」

アーロンが女の背後から斬り掛かる。

だが女は騎士の片方を蹴り飛ばし、その反動で半回転、アーロンの方へと向き直る。

「――！」

素早い動きにアーロンが眼を剥いた。

その顎に向けて女の剣が下から、すくい上げる様に突きを放つ。

顎から脳天に抜ける文字通りに必殺の一撃。

だがそれは……アーロンの頭を串刺しにする直前で止まっていた。

「……」

ユキナリが〈デュランダル〉を手に割って入ったからだ。
女は即座にアーロンへの攻撃を中断し、剣をユキナリに向して構え直す。
小手調べの様な、軽い、しかし素早い斬撃を二度三度放量った後――
「……っ!?」
女が猛烈な殺気を吹き付けてくる。
それまでと打って変わった鋭く重い一撃がユキナリに向けて放たれたのは、次の瞬間だった。
咄嗟に〈デュランダル〉を防御を軽視されがちだが、太ももの内側には太い動脈が通っているので、傷つけられれば致命的だ。やはり実戦を――戦場を、身も蓋も無い代わりに――
殺し合いを知っている人間なのだろう。
「――ユキー」
轟音が響いた。
下ろして防御しようとするが、間に合わない。
ダーシャである。彼女が〈レッチリ〉を抜いて撃ったのだろう。
銃を使い慣れている上に、彼女の〈レッチリ〉は拳銃だが狙撃用だ。斬り合う事も前提

の〈デュランダル〉とは精度が違う。弾丸は狙い違わず女のらもぎ取っていた。

「ぐっ!?」

女は右手首を左手で庇いながら驚きの表情を浮かべる。恐らく着弾の衝撃で手首を捻ったのだろう。

「……なんだこれは!?」

女もようやく『銃』という武器の威力を身を以て知ったのだが――それも一瞬。

驚く程の切り替えの早さで女は外套の懐に左手を滑り込ませる。恐らくはそこに別の武器が仕込んであるのだろう。戦場においては剣は折れるもの、曲がるものとして、予備の武器を携行するのは当たり前だ。

「――よせ」

だがユキナリは彼女の首筋に〈デュランダル〉の銃剣部分を突きつけていた。

「……く」

女は、ここで初めて悔しげに表情を歪めた。

「お前は、宣教騎士ではないのだろう！　だったら何故私の邪魔をする！」

敵意に満ちた目がユキナリを睨み付ける。
「宣教騎士？　ああ……そういう事か」
どうやら彼女は、アーロン達の事をハリス真教会の宣教騎士だと思い込んで襲いかかったらしい。いや。実際に今でもアーロン達自身は宣教騎士の積もりなのだろうが、それはさておき。
「とりあえず、話がしたい。武器を下ろしてくれ」
「なん、だと……」
途端――琥珀色をした女の眼が胡乱なものを見るかの様に細められる。
「あんたも、もう限界だろ」もないものだという事だろうが――
よく見れば女の呼吸は乱れ、肩で息をしている有り様だ。
むしろ三人の宣教騎士を相手に長々と立ち回りを演じた事を考えれば、見た目に似合わぬ、並み外れた体力の持ち主なのだろう。だがそれとて無限の意味を持つものではない。
外套の血も……よく見れば返り血というより、本人のものの様だった。内側の衣装にも何カ所か血が滲んでいるのが見て取れた。
これでよくアーロン達三人とやり合えたものだ。

いや、それ以上に――この女は何処から来たのか？

フリートラント以外の街から来たとすれば、異獣や亜神を含め、危険な獣が徘徊する領域を一人で突っ切ってきた事になる。女とは思えぬ異様な剛胆さだった。

「あんた、何者なんだ？」

若干、声に呆れの響きを乗せてユキナリがそう問う。

女はしばらく、荒い息をしながら彼を睨み据えていたが――

「私、は……」

どうやら限界が来たらしい。

女は最後まで自分の名を告げる事無く、意識を失ってその場に崩れ落ちた。

●

夜陰に紛れて必殺の鋼と鋼がぶつかり合う。

火花が何度も何度も咲き乱れるが、全てを黒く塗りつぶす闇を追い払うには、あまりにささやかな灯火だった。場は既に完全な乱戦模様を呈していて、何処に誰が居るのかすら判然としない。

「おおおおおおっ！」

森に木魂する雄叫びは、敵のものか味方のものか。

……

脱出は深夜に決行された。

目立たぬ様に全員が黒い外套ですっぽりと身体を覆い、金を握らせた役人に、こっそりと裏門を開けさせ——そこから抜け出した。どれだけ綿密な警備を敷いていたとしても、それを担う人間が腐敗していれば幾らでも抜け穴が生じる。よくある話だ。

だが彼女等の予想以上に、その役人は腐りきっていたらしい。

彼女等から金を受け取るだけ受け取った後、役人はすぐに掌を返して街の支配者に密告したのだ。恐らくは受け取った賄賂の事などおくびにも出さずに、職務に忠実な役人の振りをして。

何より腹立たしかったのは、役人の裏切りよりも、そんな相手を頼り信じるしかなかった自分達の無力さだった。充分に力が在れば、そもそもこんな真似をする必要など無かったのだから。

街を出て、しばらくは問題が無かった。抜道を通り、とりあえず街から離れた。

もう大丈夫だろうと街道に戻った所で——待ち伏せを喰らった。

ハリス真教会。そしてその教化遠征軍の主力、宣教騎士団。敵に回すには地神や亜神、異獣の類いよりも恐ろしい――おまけに相手だった。

「怯むな！　敵は少数だ！」――彼女は仲間に檄を飛ばしながら自らも愛用の長柄戦斧を手に、彼女等が街道に戻る地点を正確に予測するのは不可能に近い筈だ。ならば待ち伏せといっても戦力を一カ所に集中させる訳にはいかず、数カ所に分散させて『取りこぼし』を防いでいた筈である。

むしろ恐れるべきは、戦いが長引いて相手の増援が駆けつけてくる事だろう。

ただ……

「お行儀のいい騎士様は泥仕合に不慣れだ！　むしろ状況は私達に味方している！　怯むな！　突き進め！　切り開け！」――

仲間を鼓舞する為、咄嗟にこれはあながち的外れという訳でもなかった。騎士達の動きは、夜戦になれていないから、精彩を欠いている。

一方こちらは日頃から汚れ仕事を率先して引き受けてきた為、夜襲には慣れている。いつもはむしろ待ち伏せして襲いかかる側だったが。

何とかなるかもしれない。
そう彼女が考えた、その時で、宣教騎士達は歓声を上げた。
「……！」
厚く垂れ込めた雲の隙間から、月光が降り注ぐ。
闇を散らす冷たく白い光の中で、そこには――
彼等が振り返って見る先、
「聖人出陣ッ！　聖人出陣ッ！」
叫びに被り、闇夜を切り裂くかの様な、硬く鋭い音色が響き渡る。
音は途切れる事無く、旋律を編みながら戦場を覆った。
そして――
「聖なるかなー　聖なるかなー」
傍にいた騎士達がいっせいに合唱をはじめる。
「偉大なる我等が先達、尊き教えを守護せし聖人の御影！」
「今こそ鋼鉄の肉体を得てここに出陣せんッ！」
「聖なるかなー　聖なるかなー」
仮にも聖人と名付けられているにもかかわらず、それは、月光の下で黒々と、まるで闇

を固めて造ったかの様な巨体を晒していた。

まずい。増援が到着したのだ。それも最悪の殲滅兵器を携えて。

「騎士は退け！　残っている者は誰であろうと構わん！　叩き潰せッ！」

巨人――守護聖人像の背後で誰かがそう叫ぶ。

その瞬間、戦況は一変した。

一斉に後方へと退却していく宣教騎士達。彼等と入れ替わる様にして前に出てきたのは鋼鉄の巨人である。人間相手の武器や武術が通用しない事は、いわば、人間の造った鋼鉄の神だった。

重々しい足音を立ててそれらが近づいてくる。

それは異様な動きだった。

動作の一つ一つは早いが、一歩踏み出すまでに若干の間が生じる。恐らく宣教騎士達が連なっていない。

一歩踏み出すその動きは気持ちが悪い程に速いが、次の一歩を踏み出すまでに若干の間どく先読みのしにくい動きを動作の一つ一つを指示しているからだろう。結果としてひ故に――それはしていた。

「――っ!?」

ぶん、と虚空を抉り抜く勢いでその拳が振り下ろされた時も嗟に反応出来なかった。一瞬前までぎくしゃくしていた筈なのを引く様な早さで鋼鉄の塊が襲いかかってきたのだ。

「へぶっ――」

「ぎえっ……」

悲鳴とも嗚咽ともつかぬ声を漏らして二名が吹っ飛んだ。

彼等は街道脇の草むらに突っ込んで消えたが……恐らく既に死んでいるのが、宙を飛んでいるその瞬間に見えた。破城槌の一撃を首がおかしな形に曲がっている。四散しなかっただけでも未だ人間がその身に受けたに等しい。

「逃げろ！　むしろ好都合だ！」

誰かが叫んだ。

彼女もまたその一言で我に返る。むしろ包囲が解けた今なら逃げられる。如何に強大な力を持っていようと、守護聖人像はたった一体。多分、全力で走って逃げれば逃げ切れる。

騎士達が退いてくれたのだ。

彼女や部下達は、雇い主達を促して走り始める。

だが――

「聖なるかなー　聖なるかなー　聖なるかなー」

その唱和は……前方から聞こえてきた。

「なっ……」

彼女は思わずその場に立ち竦む。

前方からも別の守護聖人像が近づいてくるのが、月明かりのかもその巨大な影は、二つ在った。

更に……

「火……!?」

轟、と音を立てて、守護聖人像が腰の辺りから炎を噴き出す瞬間的に膨れ上がる火炎が、宣教騎士団の最終兵器を下から照らし、その威容を殊更に強調して見せていた。

どうやらあの鋼鉄の巨人は内部に油壺か何かを仕込んでいて、火を噴く事が出来るらしい。あるいは煮えたぎった油を浴びせる事も可能かもしれない。

近づけば命取りだ。

だが、このままでは挟み撃ちどころか、三体の守護聖人像に取り囲まれてしまう事になる。恐らくその外側では駆けつけてきた増援の宣教騎士達が包囲網を敷いているだろう。

「くっ……！」

まずい。このままでは全滅だ。

かくなる上は何とかあの守護聖人像の攻撃をかいくぐり、後方に居るであろう宣教騎士達の所に斬り込んで死中に活を求めるしかない。外套が守護聖人像の吐く炎にどれだけ耐えられるかが問題だったが――

「お待ちを」

そんな一言と共に、彼女の肩を掴んだ者が居る。

振り返れば、白髪をたくわえた隻眼の男が首を振っていた。

彼女が最も信頼する片腕――年齢的には既に最盛期を過ぎているが、古強者の名に相応しい経験と実績を備えた男である。

「どうかお逃げ下さい」

皆で退却するという意味ではない。

一人で逃げろという意味だ。自分達を見捨てて。

「馬鹿な、そんな事――」

汚れ仕事を沢山こなした。

身も蓋も無い戦い方をして
だがそれでも――
「いえ、お逃げ下さい。ここ
そうだ。生き残る事が彼女
その為には何でもしてきた
逃げる事も恥とは思わない
だが……六年前のあの日。
城を捨て、国を捨て、父を
そうしろと望まれたからだ
だが……いつまで逃げれば
りにしてでも、大切な仲間が
生き残らねばならないのか。
それは最早――
「あああああぁぁぁぁぁぁぁ
ぁぁぁぁぁぁっ！」

で死す事など、許されません、姫様！」
等にとって最優先の目標だ。
きた。
見捨てて逃げてきた。逃げ続けて
。
良いのだろう。これからも、死ぬ
まで殺されるのを横目に、自分だけ逃げて、逃げて、逃げ続けて、

……獣のような声を上げて跳ね起きる。

そこでようやく彼女は、自分が今まで見ていたものが夢だと知った。

「……ここは」

見回してみれば、見覚えの無い佇まいの部屋だった。

広くはないし、家具調度品の類いも殆ど見当たらないが、掃除が行き届いていて清潔な印象がある。

「……」

ふと気付いて眼を向ければ、壁際に一人の少女が居た。

十代後半の、身なりからすごく普通の町娘だ。彼女は何かに驚いた様子で、床に座り込んでいる。近くには小さな木の桶と、その中に入っていたであろう水がぶちまけられていた。

そこでようやく彼女は気付いた。自分が思わず絞り出した叫び声で、驚いたのだろう。

「なんだ、お前……？」

見張りかとも思ったが、こんな気弱で武器も帯びていない少女一人では、そんな役割などつとまるまい。単純に彼女の様子を窺っていただけか。

「ユ、ユキナリ様を呼んできます」

狼狽える少女は、問いに答える事も無く、慌てた様子で部屋を出て行った。

「……」

分からない。

自分は宣教騎士達と戦った後、疲労と出血のせいで意識を失ってしまった様だが。何故、拘束されていないのか。何故、武器を持った見張りがすぐ傍に居ないのか。見ず知らずの余所者を扱うにしては不用心に過ぎる。

「あの若者――」

最後に見た、あの白い髪と赤い瞳の青年。

彼は『話がしたい』と言っていた様だが、あれはその場しのぎの出任せではなく、本心だったという事か。これはむしろ捕虜というより、客人の扱いだ。

「……ユキ、ユキナリ、か」

眉を顰めて、彼女はその不思議な響きの名を呟いてみた。

●

「あ、あのっ……」

唐突に応接室の扉を開いてベルタが飛び込んでくる。

「……ベルタ。ノックをしてフィオナが顔をしかめてそう窘めたユキナリ達と話をしていた」

「えっ……あっ、すみません……あのっ、それで、女の人が、眼子を見に行こうか」

「……起きたみたいだな。様がると、フィオナも溜息を一つついリ、フィオナの他に、ユキナリ達は女が寝かされていた客間に向かう。ユキナ「全く、ノックも知らないとヤとウルリーケ、それにアーロンも一緒である。

「す、すみません……」

「田舎、でひとくくりにしないでくれる？」

相変わらず妙に尊大な物言いをするアーロンに、溜息をついて「ベルタは知らないんじゃないて慌てて忘れてただけよ。それとしたら、殴るわよ」

「なっ……貴様、何様の積もりだ、地神の威光を笠に着て――」

「あんたにだけは言われたくないわね！」

フィオナが言った。

年齢は私と大して違わな

ダーシャがユキナリの傍に居るのはいつもの事であるし、ユキナリを気に入っている上、色々なものに興味を示すウルリーケが一緒であるのもまた、いつもの事である。この面子の中にアーロンが居る事だけが、普段と異なる点だった。

これは直前の話し合いに同席していたから――という事も在れだけではなく、アーロン自身が件の女性に興味が在るのだろうか、アーロンが居る事が出来なかった、どこするのかもしれない。アーロンの様なものを感じているのだが、明らかに格上だったのであるのだが、あの女性の方が虜囚の身となった彼女の姿を見る事で、溜飲を下げよう、としれない。実際には客間で寝ている訳でもないのだが。ている訳でもないのだが。

（疲労が限界を超えて気絶した……って感じだったし、大人数るけども）

ユキナリは左隣を歩くダーシャを、そして反対側のウルリーケを順に見る。

「……ユキ？」

「どうした？」

ダーシャとウルリーケがそれぞれ首を傾げて尋ねてくる。
「なんでもないよ」
苦笑してユキナリはそう言った。ダーシャにしてもウルリーケにしても、応接室で待っていてくれと言っても聞いてくれそうにない、と思ったからだ。
「……眼が覚めましたか」
開きっぱなしだった扉を軽く叩きながら、フィオナがそう声を掛ける。
女性は——何処かぼんやりとした様子で寝台に腰掛けていた。
だがユキナリはある種の違和感を覚える。女性は、ただ座っているだけにも見えるが、その姿に緊張感の様なものが漂っている様に思えるのだ。改めてその姿を頭から爪先まで眺め——ユキナリは、ようやくその違和感の正体に気付いた。
（……足が）
しっかりと床を踏んでいる。ただ足の裏が床についているというのではなく、床に力を掛けている。その為に女性は寝台に浅めに腰掛けているのだ。
それはつまりいつでも立ち上がれる様に——つまりはいつでも相手に飛びかかれる様に身構えているという事に他ならない。無警戒を装いつつ、隙あらば即座にそこを突く、そういう積もりである事が分かった。

（……まるで野良猫だな）

そんな風にユキナリは思うそして――

「感謝するがいい」

いきなりアーロンが前に出そう言った。

「貴様を殺す事も無く、五体満足に――」

「ああ。この馬鹿は無視してください」

「なっ……!?」

フィオナに『馬鹿』呼ばわりされて顔色を変えるアーロン。

その様子を苦笑して眺めてから、ユキナリは言った。

「安心してくれ。とりあえずあんたを積極的に害する積もりは無い」

「……」

女は眼を細めてユキナリを睨んでくる。

明らかにこちらを値踏みしている眼差しだ。自分が捕まる事介入が在ったから、と理解しているのだろう。実際にはユキナたからだが、銃そのものを知らないだろうこの女性に、細かい部分までは分かるまい。

やがて――アーロンの方に視線を移すと、女性は忌々しげな口調で言った。
「そいつは宣教騎士だろう？」
「む？　如何にも私は光輝満つる――」
「いいから黙ってて。あんたがフィオナが言う。
横からアーロンの耳を引っ張ってフィオナが言う。
「――確かにこいつはハリス真教会の宣教騎士だが」
ユキナリは『痛い、痛い、やめろー！』と悲鳴を上げるアーロンを一瞥してから言った。
「それが？」
「私はハリス真教会に追われる者達に捕まった状態で、安心なぞ出来る筈が無い」
「あー……なるほど？」
アーロンによると、女性は何の脈絡も無く、姿を現した途端襲いかかってきたとの事だが……これで合点がいった。ハリス真教会に追われる立場であるから、アーロン達を追っ手の類いと勘違いしたのだろう。ユキナリもハリス真教会から追われる身なので、その辺の感覚は理解出来ないでもない。
「この場で証明するのは無理だが、こいつは普通の宣教騎士とは違う立場だ。あんたとハ

リス真教会の間にどういう事情があるのかは、知らないが、そ
限り、あんたに危害を加えたりはしない。というか、させない
「貴様、アマノユキナリ、何を勝手に――」
「いいから黙ってなさいって言ってるの！」
「痛い、痛い、髪は、髪はやめろ、やめて――」
フィオナに金髪をがっちり掴まれて引っ張られ、悲痛な叫び
その様子を、女性はしばらく見ていたが――
「……」
短く溜息をつくと、全身に漲らせていた緊張を僅かに緩める
完全に信じた訳ではないが、とりあえず話を聞く気にはなっ
「追われていると言ったが、理由は？」
「私は、傭兵だ」
ユキナリの問いに女性はそう答えた。
「依頼があれば大抵の仕事は引き受ける。依頼主を差別はしな
の交易を行う商人であってもだ」
「……なるほどな」

要するにこの女性は――女傭兵は、王都の許可を得ず税も納めた商人の、護衛をしていたらしい。

基本的に主要な街道を使うのには税が掛かる。更に取り扱う品税を掛けてくる。結果として正規の掛かる。各地の領主も、更に少なくない。

は、元の倍以上の値がつく事そしてなんだかんだと名目によっても個別に税がるが、払わずに済ませる事は交易で売り買いされる品税権は無いので、形としては商人側から自主的に行う喜捨――御だからこそ、商人達の中に布施という事になっていい当然、比較的安全とされる事実上、不可能だ。

れる可能性は高い。山賊や野盗の類いも出没するだろう。これらして何より荷を守る為、傭兵が雇われるのだ。

「今回はアルドレイルの街に荷を運ぶ際の護衛だったが……」

「ハリス真教会の人間に、見つかった？」

「というか……知らなかった。私達も、雇い主も」

忌々しげに女性は言った。

そしてなんだかんだと名目によっても個別に税が掛かる。更に取り扱う品

基本的に主要な街道を使う交易で売り買いされる品

掛かる。各地の領主も、更に税を掛けてくる。結果として正規の

は、元の倍以上の値がつく事

当然、比較的安全とされる事実上、不可能だ。

れる可能性は高い。山賊や野盗の類いも出没するだろう。これら

して何より荷を守る為、傭兵が雇われるのだ。

「今回はアルドレイルの街に荷を運ぶ際の護衛だったが……」

「ハリス真教会の人間に、見つかった？」

「というか……知らなかった。私達も、雇い主も」

忌々しげに女性は言った。

そしてなんだかんだと名目によっても個別に税が掛かる。更に取り扱う品

基本的に主要な街道を使う交易で売り買いされる品

掛かる。各地の領主も、更に税を掛けてくる。結果として正規の

は、元の倍以上の値がつく事

当然、比較的安全とされる事実上、不可能だ。

れる可能性は高い。山賊や野盗の類いも出没するだろう。これら

して何より荷を守る為、傭兵が雇われるのだ。

「今回はアルドレイルの街に荷を運ぶ際の護衛だったが……」

「ハリス真教会の人間に、見つかった？」

「というか……知らなかった。私達も、雇い主も」

忌々しげに女性は言った。

そしてなんだかんだと名目によっても個別に税が掛かる。更に取り扱う品

基本的に主要な街道を使う交易で売り買いされる品

掛かる。各地の領主も、更に税を掛けてくる。結果として正規の

は、元の倍以上の値がつく事

当然、比較的安全とされる事実上、不可能だ。

れる可能性は高い。山賊や野盗の類いも出没するだろう。これら

して何より荷を守る為、傭兵が雇われるのだ。

「今回はアルドレイルの街に荷を運ぶ際の護衛だったが……」

「ハリス真教会の人間に、見つかった？」

「というか……知らなかった。私達も、雇い主も」

忌々しげに女性は言った。

「知らなかったって、何を？」
「アルドレイルに、ハリス真教会の宣教騎士団が駐屯している事を、だ」
「……」
ユキナリはフィオナとアーロンの方を振り返った。
「アルドレイルは、フリートラントよりは王都寄りで、街道の分岐点に近い街ですね」
「我々もアルドレイルを経由してフリートラントに来た訳だが」
とフィオナと、彼女に髪を掴まれて身を屈めているアーロンが答える。
「つまり、地方に宣教騎士団が出掛ける際には、中継地みたいな感じで立ち寄る様な場所って事か？」
「かなり大きい街ですから、辺境交易正規、非正規を問わず、辺境交易の中継地としては以前から使われていましたね。教化遠征の基地としてハリス真教会が眼をつけたのでしょう」
とフィオナはまとめる様に言ってきた。
「……」
ユキナリは頭の中でこの周辺の地図を思い描く。
そういえば、ユキナリとダーシャも、王都から逃げてフリートラントに辿り着く前、一度、大きな街に立ち寄って諸々の品を買い込んだ事があった。
大きな街道をそのまま街の

中に引き込む様な形になっていて、大小無数の荷馬車が街の中を行き来していた風景を、ユキナリは覚えている。あそこがアルドレイルなのだろう。

「宣教騎士団は、王都から離れた辺境地域の、無知蒙昧な民を教化するための組織だ。定期的に教化遠征を行って、何故か妙に得意げにアーロンが言ってくる。

「そんな事皆知ってるわよ」

「いいから聞け、どうしよっこむフィオナに、アーロンは怒鳴った。

うんざりした表情でそうこ

「何処まで話したか――あ、そうそう、教化遠征だな。で――村や街に直接、王都から個別の部隊を派遣していたのでは人材も物資も無駄が多い」

「まあそりゃそうだな」

とユキナリは頷く。

宣教騎士団一つを維持するだけの食料でもそれなりの荷物になるだろう。更に各種生活必需品が加わる。当然、それらを全て運ぶのは、あまりにも効率が悪い。現地調達した方が良いだろう。

実際、ユキナリの元居た世界の歴史――中世史を見ても、遠征する軍隊を維持する為の

各種物資は現地調達が基本だった様だ。流通と通信技術が発達していない時代、そして兵站、という概念そのものが確立されていなかった時代の事である。

「つまり、ある程度のところまでは複数の騎士団でまとめて移動しておいて、そこで物資や食料を補給できる中継地を作っているということか……」

そういう用途で押さえるという意味では、交易で賑わう街は都合が良いだろう。元々、流通する物資の量も多いし、人間の出入りが激しいので、大型の馬車を停めておく場所や、宿泊施設の類いも元から確保されているであろうし。

要するにハリス真教会はその街を単に占領して教化するだけではなく、地方遠征基地として使っているのだ。

「ユキ……」

ダーシャが僅かに眉を顰めて声を掛けてくる。

彼女も気付いているのだろう。それはつまり、フリートラントからそう遠くない街に、複数の宣教騎士団が駐留しており、更にその数が増える可能性も在るという事だ。

ユキナリは以前、アーロン達の宣教騎士団を制圧し、その最終兵器である守護聖人像をも破壊しているが……倍、あるいは三倍の戦力を相手にするとなると、同じ様に勝てるかどうかは甚だ怪しい。単に相手が倍、あるいは三倍強くなる、という訳ではない。数が増

えるという事は、採り得る戦術の幅も広がるという事だ。手強さで言えば、むしろ相乗倍――四倍、九倍に厄介な相手であると考えた方が良いだろう。

「……どのぐらいの規模と師団数が駐屯しているか、わかるか？」

「三個師団だ」

と答えたのは女傭兵である。街の大きさを考えればそれが妥当な数だろう」

「我々が立ち寄った時と変わらないな。まさか宣教騎士団の人間とアーロンも腕を組んで頷いている。

人数が増えれば増えるほど、当然、必要となる物資も増える。まさか宣教騎士団の人間が現地で畑仕事だの牧畜だのをするとは思えないから、駐留できる数はその街が元々持っている余力――主に食料の自給能力の範囲内に限定されるという事だ。かといって、街に入ってくる交易商人達を全て閉め出してしまうと、交易地として栄えていたアルドレイルそのものが破綻しかねない。

だがユキナリ達とってはそれは、無視し得ない脅威そのものだろう。

「ついでに言っておくと、私が着いた時点で既に、その周辺に通り討伐済みだったぞ」

ふん――と鼻息を荒くしてアーロンが言う。

彼にしてみれば自慢なのだろうが、ユキナリ達としては非常に迷惑な話である。アルドレイルの街に宣教騎士団が居座っている以上、その地の地神を斃すのは想定の範囲内としても、周辺地域の亜神や異獣まで駆除済みとなると、その三個師団は街の守護をあまり考える事無く、自由に出征出来るという事になる。

もうアルドレイルは完全に、地の宣教騎士団がフリートラントの現状を知れば――

「厄介な話だな」

ユキナリは溜息交じりに言った。

フリートラントの街は現在、『宣教騎士団が地神を斃し、教化を終えて駐屯中』という建前になっている。アーロン達がそうハリス真教会の中央に報告をしている筈だ。地神とハリス真教会の宣教騎士団は、基本的に相容れない存在なので、報告が中央に届いているという事は、宣教騎士団が勝利したという事であり、そのまま教化を進めているという事の傍証になり得る。

だが……この現状がもしばれたら。

「ウルリーケ」

「なんじゃ？」

ユキナリに名を呼ばれ、ウルリーケは嬉しそうに表情を輝かせて応じてくる。
「もしフリートラントの現状がハリス真教会に知られれば、ロストルークも一連托生だ。そして逆も同じだろう。そもそもアルドレイルに駐留している宣教騎士団の、次の目的地がロストルークの可能性もある。注意する様に伝えておいてくれるか？」
「うむ、心得た」
内容が分かっているのかいないのか、頷くウルリーケは無邪気ともいうべき笑顔である。
ともあれ……こちらから行動を起こして相手を刺激するのは避けるべきだが、警戒だけはしておくに越した事は無いだろう。
「あの、ユキナリ様――」
ふとベルタが、遠慮がちに声を掛けてくる。
「今日はこの辺で……こちらの方も……あまり長く話していては身体に障りますし……」
「ああ、そうだな」
この女傭兵に関しては、しばらく様子を見るという事で良いだろう。話に不審な部分は今の所無い様だし――何より、意識を取り戻したとはいえ顔色は悪く、まだ完全に回復したという訳ではない様だ。
今後、詳しい話を聞くにしても、彼女を休ませ、より信用を得てからの方が良いだろう。

「信用してもらうしかないがユキナリは言った。
改めて女傭兵の方を見ながら
「繰り返しになるけど、俺達にあんたを害する積もりは無い。
共存しているが、俺は俺で元々、ハリス真教会とは敵対してい
「……お前が？」
眼を細めて女傭兵が問う。
「ユキナリ、といったか。お前は一体、何者だ？」
「神様だよ。この街の」
肩を竦めてユキナリは言った。
「神だ？　しかし――」
「詳しい事はまたもう少しあんたが回復してから話す。色々こっちにも立て込んだ事情があって、長い話になるんでね。それより、名前を聞いていいか？　いつまでもあんた、では面倒くさいだろう。俺の名前は、もう知ってるよな」
「……」
しばし女は俯き、眉を顰めて黙考していたが――今更、名を名乗って不利になる事も無いだろうと判断したのか、小さく頷いて、再びユキナリに視線を向けてきた。

「……ヴェロニカ、よ」

口にしたのは名前だけだった。姓を言う積もりは無いという事らしい。

だが今はそれだけで十分だ。ユキナリは彼女に頷いてみせると、他の面々を促して部屋を出る事にした。

●

王都から遠く離れた辺境地域は、何かと不便だ。

人の暮らす街はあちらこちらに点在しており、それを街道のが現状である。この数世代……王都の王や貴族達は地方に広げようともしていない。税さえ問題無く上がってくれば良主――多くは地方都市の街長に統治を任せ、殆ど干渉すらし

辺境地域には未だに異獣や亜神といった怪物も跳梁跋扈しており、主要な街道すら絶対安全とは言い難い。どうしても交易や交流には弾みがつかず仰が、より各都市間の孤立を深める。

そのせいで、都市とは名ばかりの、寂れた街も少なくない。各地にそれぞれ残る地神信

だがその一方で――幾つかの条件が整えば、人や物の流れが集中して、それなりに発展する都市も出てくる。

アルドレイルと呼ばれるこの街は、勿論、王都には及ばないものの、辺境地としてはかなり賑やかな街である。交易地として栄え、人も物も周辺地域から集まってくる。

「まあ、悪くは無い――ですね」

アンジェラは高台から街の風景を見下ろしながらそう評したあるが、気の強そうな吊り気味の双眸と、高い身の丈、長い彼女は二十歳前の若い娘で豊満な胸元――幾つかの要素が黒髪、気品のある所作、そして誰にでも分かる。ただその流階級の出である事は一目見れば場に立っているだけでも、ある種の艶やかさが醸し出されてくるのだ。

ハリス真教会の宣教騎士団には、貴族がその経歴に箔を付ける為にと、子弟を入団させる事が多い。王都による統一戦争が終わって数世紀……対等の『敵』を喪った軍は式典用のお飾りとして形骸化しており、実戦を経験しているのは、その殆どが宣教騎士団関係者だからだ。

アンジェラ・ジンデルもまた、そうした理由で入団した者の一人である。

ただし、女性の大半はあくまで腰掛け――箔付けの為のお務めが終われば、早々に団を

辞してしまうのに対して、アンジェラはずっと宣教騎士団に居残る事を選んだ。彼女は熱心な信徒であり――有り難いハリス真教会の教えを無知蒙昧な地方の民に広めるというその偉業に、心血を注いでいた。

アルドレイルに彼女が来たのも、今回の教化遠征の一環だ。

て占領されたこの都市は、田舎臭くはあるものの、一時的に逗留して長旅に疲れた身体を癒やし、宣教騎士団の態勢を立て直すには最適だった。辺境地域のあちこちから様々な品が集まってくる為、王都とは比べるべくもないが、大抵のものは手に入る。食事にせよ他の身の回りの諸々にせよ、不都合を感じる事はあまり無かった。

アンジェラの所属する第九宣教騎士団は、より王都から離れた辺境へと向かう予定になっているが、それは後続の宣教騎士団が来るのと入れ替わりだ。それまでの一ヶ月余りは、この地に留まる事になる。

アンジェラはこの街が割と気に入っていた。

なので常にもまして熱心に――率先して巡回任務にも就いている。

宣教騎士団の最大の任務は、未だハリス真教会の教えが広まっていない辺境地の教化である。街に異変が無いか、有り難いハリス真教会の教えに逆らう不心得者が居ないか、街中を回って調べ、住

民からの密告――いや通報を受け付けるのも、仕事の内だったか
「……行きましょうか」
傍らに控えていた数名の宣教騎士達に声を掛け、アンジェラは高台を下りて街の通りを練り歩き始めた。
住民の多くは、アンジェラ達の姿を見ると眼を伏せてその場をすれば宣教騎士団に拘束されるのが分かっているので、出来るだけ目立たない様に振る舞っているのだろう。彼等の首には聖印付きの鋼輪が填め込まれている為、面と向かって刃向かってくる者は、皆無だった。
「良いですね。実に良いです――」
満足げに呟きながらアンジェラと騎士達は歩いて行く。
やがて――
「――」
アンジェラ達は、通りの真ん中に、数名の宣教騎士を従えた一人の壮年男性が立っている事に気がついた。
「団長――」
小走りに男性の前に辿り着くと、アンジェラ達は一斉に頭を垂れて一礼する。

自分達の上役――即ち第九宣教騎士団を取り仕切る団長リチャード・ベイトソンに対しては当然の作法だった。

ベイトソンは屈強な壮年の騎士だ。

四角い顔の真ん中に小さく細い眼が埋まっている――そんが、実直そうなその顔は、むエラ同様に貴族の出である筈だしろ畑仕事の方が似合いそうな印象だった。その経歴に派手を重ねてきた為、部下からの信頼も厚い。

「副団長、周辺の状況はどうか？」

そう尋ねられたアンジェラは改めて背筋を伸ばし直立不動の体勢で言った。

「はっ。特に問題は生じておりません」

「聖印の授与はどうか？」

「現在、街の住人のほぼすべてに聖印を施す事が完了しております」

「ほぼ？」

ベイトソンの声に僅かに不満げな響きが乗る。

アンジェラは慌てて言い添えた。

「所在不明になっている者が、わずかながらいるというだけで――」

「所在不明になっている者？」

「おそらく地神を崇めている蛮族の類いかと」

この地の地神を斃したのは、アンジェラ達よりも前にやってきた第三宣教騎士団で、彼等はもうこのロストルークを出発し、より辺境地へと向かっているだろう。野蛮な地神信仰に心底染まっていた者達のらすれば宣教騎士団は皆同じに見えるだろう。街の住人か中には、自分達が邪神から解放されたのだという事が分からず、むしろ『地神様の仇』とハリス真教会への敵意を剥き出しにする者も居た。

「いずれにしても、街の状況は安定しています。ハリス真教会の教えを学ぼうとする者は後を絶たず、住民の間に混乱はありません」

最初にこの地の地神を斃した第三宣教騎士団の後、王都から派遣された宣教騎士団が続々と到着し、常に三つの宣教騎士団が駐屯するに至って――多くの住人は反抗を諦めた様だった。

ただ……

「おお、団長殿！」

街の住人の何人かが、ベイトソンの姿を見て近づいてくる。

多くの住人が宣教騎士団を恐れて遠巻きにし、自らは近づこうとしないのに対し、ごく

一部の者はむしろ笑みを浮かべてすり寄ってくる。

こうした手合いは何処にでも居る。本人らは機を見るに聡いのだと自認している様だが――実際には単に、強い者に媚びへつらっているだけの人間だ。同時に相手が弱いとみるや居丈高に接して、それで均衡をとっている積もりなのが、実に醜い。

彼等は宣教騎士団が最初にやってきた時から、積極的に協力を申し出てきた人間達である。今では街のとりまとめ役を勝手に自認し、宣教騎士団の人間と同等であるかのように振る舞っている。

アンジェラは――彼等を軽蔑していた。

無論、アンジェラ達宣教騎士団の目的は、文字通り辺境の住人達の教化だ。抵抗しないどころか、積極的にこちらの教義を受け入れようとする者達は、手間が省けて好都合――むしろ好感を持ってしかるべきかもしれない。だがアンジェラの様にまた人間からすれば、その場の都合で軽々しく自分の信仰を売り払う様な人間は、唾棄すべき下衆だった。教化の混乱のどさくさで、私腹を肥やしたり、様な連中は、近くに居るだけでも、臭いと感じてしまう。

「実は――」

両手を揉み合わせる様にしながら、男の一人が上目遣いに言う。

また何か厚かましい陳情なのだろう。いちいち付き合わされるベイトソンは――岩から掘り出したような厳めしい表情を小揺るぎもさせず、男の相手をし続けていた。他の宣教騎士達もアンジェラ同様、この男の様子を見ている者が大半だった。

か、退屈そうに明後日の方角を見ている以上、アンジェラが横から割って入って相手を追い払う訳にもいかない。

だから……だろう。アンジェラ達は反応が遅れた。

話をする男の後ろから、別の男がふとベイトソンに向かってくるのを見ても懐に入っているのを見ても、アンジェラはさして危機感を覚えなかった。密告をする者が、対象の名を書いた羊皮紙を懐に入れていて、これを差し出してくる――という図は何度も見たからだろう。今回もその類いだろうとアンジェラは思いまさか、懐から刃物が出てくるとは思ってもみなかった。しかも先端が尖ったそれを――

「――!」

「団長ッ!?」

だがベイトソンも素人ではない。あるいは男の発する殺気にでも反応したのか。彼はご

つく節くれ立った手で、のど元を狙ってきた刃を咄嗟に叩いた。

「ぬっ……」

その一撃で凶器を叩き落とせれば良かったのだろうが、最も突きやすい部分から突いた。即ち、ベイトソンの腹部を深々と突き刺したのである。

「ぐうっ……」

うめきながらも——しかし膝をつく事が無かったのは流石としか言い様が無い。しかも暴漢は刃物を握りしめたまま、ベイトソンは右手で刃物を、柄を握る男の手ごと、握り込んだ。

男は咄嗟に飛び退こうとするが、手を潰さんばかりの強さで握られている為、ベイトソンから離れられない。

「狼藉者だ！　取り押さえろ！」

アンジェラの叫びと共に、宣教騎士達が慌てて飛び出す。

彼等は難なく暴漢を取り押さえた。見れば実に貧相な体つきの男である。騎士団の人間ならば誰であっても問題無く一人で制圧出来そうだった。だからこそそんな人間に出し抜かれたのが腹立たしい。

「団長を療養所にお連れしろ！」

指示を飛ばしながら暴漢を睨み付けるアンジェラ。
見窄らしい格好をした男だった。騎士団の取り締まりを逃れるもしていたのか、服は垢じみて汚れ、髭も生え放題だ。
「地神様の祟りだ！　俺が正義だ！　思い知ったか、この――」
最後まで言わせず、暴漢を取り押さえている宣教騎士達が、そのいで地面に押しつける。文字通りに地を舐めさせられて、暴漢はやはり地神信仰の人間だった様だ。
「……いいでしょう」
アンジェラは暴漢を見下ろしながら冷たく言った。
「正義を自称するなら、公正な裁判を受けさせてあげましょう！　それは男にというより、突然生じた騒ぎに眼を丸くして、遠巻きに見入っている街の住人に向けたものだった。ここでしっかりと愚かな住民共を脅しておかなければ、第二第三の暴漢が発生しかねない。
「貴様は、偉大なる第九宣教騎士団の団長であるリチャード・ベイトソン殿を刺殺しようとした。聖騎士に対する殺害未遂。すなわち我らが神に対する叛逆である！　万死に値すると判断する！」

「……」

野次馬達からざわめきが漏れる。

一方的な宣告に彼等は驚き怯えている様だった。

「な、何が公正な裁判――」

「安心なさい」

地に顔を押しつけられたまま、くぐもった声でそう抗議してくる暴漢に、アンジェラは薄く笑いながら言った。

「これは裁判です。貴様を弁護する者もきちんと居ますよ。――アンジェラは自分の脇に居た宣教騎士の一人に声を掛けた。

「貴方は今、彼の友人ですか？　判決に異議はありますか？」

「は、異議は在りません」

「ならばそこの貴方はどうですか？　貴方も友人になる予定ですね」

「は、私も異存在りません」

宣教騎士達は暴漢の方を見もせずにそう答えていた。

「そ、そんな、そんな馬鹿な裁判があるものかっ！」

男は強引に頭を上げてそう叫ぶが、アンジェラは取り合う積もりなど毛頭無い。

そして――

「貴方。そこの貴方達ですよ。待ちなさい」

アンジェラは眼で宣教騎士達に指示を出し、最初にベイトソンに喋りかけた男達を拘束させた。彼等は暴漢が制圧されたとみるや否や、笑顔のまま、後じさって距離を置こうとしていたが――

「貴方達も共犯ですね」

「へっ？　な、なんで――」

「貴方達が団長に話し掛け、強引に隙を作った。この者と共犯です」

眼を丸くして硬直する男達に、アンジェラは冷たくそう言い渡した。

「い、言いがかりだ、何を証拠に……」

「このならず者と目配せをしましたね。私が目撃しました」

とアンジェラが言うと、他の宣教騎士達も口々に『私も見た』

始める。団長たるベイトソンが手当ての為にこの場を離れた今、副団長であるアンジェラの言う事こそが、彼等にとっては絶対だった。アンジェラが鳥を指さして『あれは魚だ』と言えば全員がその通りとばかりに頷くだろう。

「証人多数。共犯であるとして有罪決定です」

「ま、待っ――」

「ハリス真教会教化遠征軍第九宣教騎士団副団長、アンジェラ・この者達に刑を言い渡します――全員、死刑」

そう宣告するのは、実に爽快だった。

鬱陶しかった連中を、これを機会に一掃できる。

「刑の執行は明朝。広場に断頭台を設置し、公開処刑とする！」

「ま、待って、待って、そんな――」

「連れて行きなさい」

そう宣教騎士に命じて――辺りを見回す。

呆然とその『裁判』の様子を見守っていた者達は、慌てて眼を伏せ、顔を伏せ、アンジェラ達の注意を引かぬ様にと、その場で身を縮こめていた。

悪くない。これでよからぬ事を考える者も減るだろう。

一罰百戒。教育とはこうでなくてはならない。

「では、警邏を続けましょう」

アンジェラは満足げにそう宣教騎士達に告げると、肩で風を切る様にして再び通りを歩き始めた。

ユキナリ達がフリートラントから神殿に戻ったのは、既に日が暮れた後だった。

いつも通りに街の様子を確認し、幾つかの提案をして帰ってくるだけの積もりが……女傭兵ヴェロニカの乱入やら何やらですっかり遅くなってしまった。本来ならば日が暮れた後に街の外に出るのは危険極まりないのだが、地神代行たるユキナリや、イグドゥーラの眷属たるウルリーケが居る一行に不安は無いし、そうそう襲ってくる獣も居ないだろう。

ともあれ――

「すっかり一日仕事になっちまったな……」

ユキナリは呟きながら、部屋で床の上に直接、周辺の地図を広げてその脇に座り込んでいた。考えなければならない事が幾つも在る。具体的な『図』を見ていた方が、頭の中で考えを巡らせているよりもずっと遠かに纏まりやすかった。

アルドレイル。

ユキナリの記憶通り、以前、フリートラントに着く前に一度、ダーシャと一緒に立ち寄って居る。街道の途上にそのまま築かれたかの様な街であり、辺境地域の幾つかの都市と

比較的、行き来がし易い位置にある。

フリートラントからも街道を使えば徒歩で四、五日といった所か。

微妙な距離である。馬車を使えば二日かそこらでたどり着ける可能性が高い。無視出来る程に遠くはないが、すぐに何か出来る程には近くもない。この街が教化遠征軍の中継基地化されているのだとして――その脅威がどの程度のものなのかが、非常に判別し辛い。

また……ロストルークについても気を配っておく必要がある。

ロストルークはフリートラントよりさらに奥まった地域にある為、宣教騎士団が訪れるとすればフリートラントの方が先だろうが……その一方で公式にはフリートラントはアーロン達が制している事になっている。宣教騎士団が『教化済み』のフリートラントを通り過ぎてロストルークを目指す可能性は充分にあった。

ウルリーケも話を聞いていた筈だから、改めて警告しておく必要は無いだろうが……ロストルークは密交易の共犯者であり、いざ、宣教騎士団と事を構える様になった場合は、いわば同盟相手として、どう動くべきかを考えておかねばならない。

「ユキナリ、少しいいかの？」

顔を上げると、地図を挟んだ向こう側にウルリーケがしゃがみ込んでいた。

「ん？　ああ、なんか用……？」

と、言いかけて。
「あのな。ウルリーケ」
「うん？」
「しゃがむな」
「何故じゃ？」
「……見えそうだから」
「……」
束の間、ウルリーケは首を傾げて考えていたが。
「おお。欲情か。欲情するのか」
何故か植物型地神イグドゥーラの眷属は嬉しそうに問うてきた。
「してもよいのじゃぞ？」
「しません」
「いいから隠せって」
ユキナリは明後日の方を見て言った。
少女の裸を見た程度で取り乱しはしないが、着衣の裾から太ももの間が見えたりするのは、何か非常に気まずい。特にウルリーケの場合、裾は長いのだが、燕尾服の様に一番長

いのは背面の方で、前面は結構、太ももの辺りまで見えていたりする。

これでしゃがまれると、もう、どうしようもなく丸見え状態である。

実を言うとウルリーケは下半身にまとっているが、何故かこれが太ももの内側だけ下着を着けている——というか、スッキングの様な下着を着けているのである。

い靴下が一体化した様なものやがまれると、普段は見えない素肌が露わになるのである。

が露出するという意匠で、しケが幼い容姿という事もあって、背徳感があったりする。

これが非常に——ウルリー

「で——話って？」

「うむ。昼の話じゃがな？我等なりに考えがあったので、先ず、お主に言っておこうと思ってな」

「……聞こう」

ユキナリはとりあえず居住まいを正してそう言った。

ここから先はウルリーケでなくイグドゥーラの——植物型地神の自我を構成する、多数の人間の共有意識の意見だと理解したからだ。ある意味で、それはユキナリの知る本来の——神のイメージに最も近い。

「交易の話じゃが。フリートとロストルークでは少し距離が離れているであろう？単に行き来するだけならともかく、毎日の様に物を運ぶには、少し遠い」

「……」

てっきり宣教騎士団が攻めて――だと思っていたユキナリは、少し意表を突かれた様な気がした。

「まあ、その通りだけど――」

苗や種など、少量の物資をこちらで増やすような物とは違い、護衛の手間も含め、交易の労力は相当なものになる。

それでも充分に双方に利があると判断したから、ユキナリは量に運ばなければならない場合は限定されようが、護衛や馬車を使わぬ方法ならば、負担が減るのではないかと思ってな」

「護衛や馬車を使わない？　そんな方法――」

「以前、お主がロストルークからフリートラントに送ってやった方法があるじゃろ？」

「送ってやったって……」

言いかけて――ようやくユキナリはイグドゥーラの提案の輪郭を掴んだ。

以前、ロストルークに交易を申し込みに出向いた際、ユキナリが居ないフリートラントを亜神が襲ってきた事があった。

街を守る為に急いで帰ろうとしたユキナリだが、そう簡単に戻れる距離ではない。そん

な時、ウルリーケの母体である地神イグドゥーラが手を貸してくれたのだ。

「あれはしかし、送ったっていうより……」

あれを『輸送』と呼ぶのは、乱暴に過ぎるとユキナリは思う。

イグドゥーラがユキナリを――そしてダーシャをフリートラントに送り届けたその方法とは、巨大樹の硬く、しかししなやかな木と幹に加え、強靱で弾力性のある蔓を用いて、ユキナリ達を『射出』する事だった。

いわば巨大なパチンコである。

勿論、この場合、安全に移動する為には移動先で減速し着陸する為の手段が必要になってくる。ユキナリは〈御遣い〉の力を使う場合に――その能力を十二分に発揮する為の姿になった場合に、その背に翼が生じる。本来は飛ぶ為のものではないが、姿勢制御に使う事は可能だった為、これで何とか、砲弾の如く地面に激突する事無く、フリートラントに戻る事が出来た。

だがこれが自身で姿勢制御出来ない様な荷物だった場合……当然、地面に激突するだけだ。中身が何であれ、辺り一帯に飛散して回収するだけでも大変な手間だし、何より危険極まりない。

ユキナリとしてはそう思ったのだが――

「大きな池か何かを作って、そこに落とせばよいのではないか？　荷物はばらけぬ様に、ほれ、お主が作ったあの『殻』の様なものを用いれば」

「なるほどな……」

ウルリーケが言う『殻』とは、ユキナリがイグドゥーラと戦った際、身を守る為に造り上げた半球体状の鋼鉄の防御板だ。勿論、あれを球体状にする事も可能なので、その中に穀物なり何なりを詰めて射出――池なり湖なりに落ちた時点で回収すれば、とりあえず問題は生じないだろう。充分に射出の精度が在るならば、水でなくても、巨大な網を作ってこれで受け止めるという方法もとれる。

ウルリーケの提案は、充分に魅力的なものだった……が。

「長距離となるとなあ……」

その精度こそが問題なのだ。

銃こそ用いる訳ではないが、それはつまり『狙撃』に類する行為だ。

環境というものは、常に変動し、一定していない。気温や風向きは、一日の間にも文字通り刻々と変化するし、季節によっても変わる。狙った場所に『弾』を落とすのは至難の業だろう。

受け止める為の池なりはできるだけ大きな物を用意するとしても……微調整を行

う為には、今よりももっと精巧な地図を作り、気温や風を読むための観測装置が必要となる。ほんの僅かに角度がずれただけでも、数キロ先では数百メートルの誤差になる。

ましてーー

「そういうのって空飛ぶ亜神とか異獣に襲われたりしないのかな？」

「さて。前例の無い事じゃからなあ」

とウルリーケも首を傾げている。

確かにそれは彼女が知らなくても当然だろう。

だが場合によっては、その種の『遙か頭上の敵』に対する備えも必要になってくるだろう。以前遭遇した空飛ぶ亜神も、ユキナリの〈デュランダル〉やダーシャの〈レッチリ〉では射程が足りず、一度は逃がしてしまっている。どちらも使用するのが拳銃弾である為に、遠距離では精度が全く出ないのだ。

今よりも遙かに射程の長い、銃と弾薬が必要になるかもしれない。

それについては、空飛ぶ亜神と出会った直後から、考えてきた事ではあったのだが、忙しさにかまけて後回しになっていたのだ。

また……

（実際に、アルドレイルの宣教騎士団と戦う事になった場合……）

やはり長射程の武器は在った方が何かと有利だろう。
「狙撃銃……作らないとな……」
「そげきじゅう？」
小鳥の様な仕草で首を傾げるウルリーケ。
こちらの住人である彼女には馴染みが無い単語なのだろう。
飛翔型の武器といえば弓矢が精々で、火薬式の銃砲というものもそもそもこちらの世界では、全く存在しない。少なくともユキナリは自分以外に銃を持っている人間を見た事が無かった。
「いや、細かく説明するのは難しいから、実物を作ったときに教える」
苦笑してそう言うユキナリ。
「ウルリーケの提案もいいと思う。ありがとう」
そう言ってユキナリはウルリーケの頭を撫でる。
いつもはダーシャに対してしている事で――ついその癖が出たのだ。
ウルリーケは一瞬、きょとんとした表情で頭を撫でられていたが、ふっと猫の様に眼を細めて笑った。
これがまた――激烈に可愛らしい。
「まあ、実現の方向に向けて色々考えてみる」

一瞬、胸の高鳴りを感じ、脳裏で『相手は植物、相手は植物』と唱えるユキナリ。
そんな彼の内心を知ってか知らずか、ウルリーケは嬉しそうに頷きながら言った。
「そうか。心得た。ユキナリは友じゃからな。助力は惜しまんよ」

●

ウルリーケとの相談を終えて部屋に戻る。
そこでユキナリは、寝台に腰掛けて彼を待つダーシャを見る事になった。
「ユキ……検診」
「ああ、分かった」
ダーシャの『眼』は生来のものではない。
生まれつきの白内障で視力が殆ど無かった彼女は、ユキナリの作った人工水晶を眼球内に入れる事で、常人同様に見える眼を手に入れた。
だがユキナリのこの『治療』はかつて、自分の世界に居た頃の、姉の白内障手術に際して医者から説明を受けた知識を元にしているだけで……ユキナリ自身がその種の専門教育を受けた訳ではない。

ましてや完全な無菌室で施術をした訳でもない。ある程度は消毒滅菌に気を遣ったとはいえ、やはり素人には限界がある。故に、定期的に異常が無いか、特に炎症の類いを起こしていないか、検診している訳だが――

「眼鏡、外すぞ」

ダーシャの隣に腰を下ろして彼女の顔に手を伸ばすユキナリ。

だがダーシャはそっとユキナリの手を握って、これを下ろしてきた。

「ダーシャ？　どうした？」

「今日は、私が診る、番」

下ろしたユキナリの手を握ったままダーシャが訥々とした口調で言った。

「お前が？」

「ユキの、身体」

言って――ダーシャはユキナリの手を離し彼の胸に触れてくる。

ユキナリの身体は、厳密に言えば人間のそれではない。

錬金術によって造り上げられた人造人間のそれだ。かつてハリス真教会が布教時に『奇跡』を演出し、その威により民衆を従わせる為に造った『生ける錬金術機関』であり、〈御遣い〉もしくは〈天使〉と呼ばれる存在だ。

彼のその身体を造ったのは一人、イルジナ・ウルバンである。彼女は勝手に自我を持つ〈御遣い〉を――ユキナリを造ったという事で、教会に蒐清されてしまった為、ユキナリの身体を完全に診る者は、もう居ない。

だがダーシャはそのイルジナの妹だ。

物心ついた頃からイルジナの助手をしていた為、錬金術の知識は比較的豊富である。眼が見えなかった為に書物を読む様な事は無かったが、姉の傍で彼女の話をずっと聞き続けていた為、彼女に準じた『物知り』である。

もっとも、前述の通り、教会は錬金術師とその家族を軟禁しているので――表向き教会は異端として錬金術師を排斥している――ダーシャは『外の世界』というものを実際に知ったのはユキナリと出会った後で、知識だけの頭でっかちという事の知識の大半は実体験の裏打ちが無かったりもするのだが。

ともあれ――

「別におかしな所は」

「……」

ユキナリの胸に手を添えたまま、ダーシャは眼鏡の縁越しの上目遣いでこちらを不満そうに見上げてくる。

「あー……分かった」
ユキナリは肩を竦める。
ダーシャは普段、ユキナリの言う事をよく聞く素直な少女だが、時折、妙に頑固な所があったりする。特に彼女の得意分野――錬金術関連では、イルジナ亡き後、彼女がユキナリの先生であった様な部分も在り、『先輩』として振る舞いたがる事があるのだ。
こういう時は素直に従っておいた方が良い。今まで彼女と旅してきた経験上、ユキナリはそれがよく分かっていた。ダーシャが拗ねると長引くのだ。
「上着、脱いで」
「はいはい」
「はい、は一回」
ユキナリが上着を脱ぐと、ダーシャはそのまま彼の胸に顔を寄せてきた。
「……って。おい？」
「動かない、で」
「いやあの、検診じゃないのか？」
「検診」
そう言ってユキナリの胸に頬ずりするかの様に横顔を寄せるダーシャ。

それが『聴診』と『触診』なのだとユキナリが気付いたのは数秒してからだ。

ダーシャは、眼が見えなかった期間が長かった為、それ以外の感覚――特に聴覚や触覚が非常に発達している。また視覚そのものは現在、何の問題もにある種の不安を覚えるのか――聴覚や触覚、それに嗅覚といしようとする傾向が強い。

「眼を閉じて、横に、なった他の感覚でこれを補完て」

「あ……ああ……」

理屈は分かったが、こんな風に『検診』されるのは初めてだしかない。ユキナリとしては戸惑う。だがダーシャが『錬金術師の妹』として振る舞っている時は、逆らわない方が面倒が無いと分かっているので、躊躇を覚えつつもユキナリは寝台に横になった。

（触診と聴診、なんだよな……？）

元の世界で医者に触診をされた時の事を思い出して、力を抜いた。

く息を吸い込んで身体から細い指。

最初に感じたのは冷たくでていく。最初はくすぐったいともそれがユキナリの胸を撫でていく。まるで愛撫の様だがとした指の感触が気持ちよくなってきた。たまに強く指先で押して

きたり、軽く叩いてきたりもするので、触診なのは間違いなかろう。
同時にダーシャはユキナリの胸に耳を押し当てながら、じっとその鼓動を聴いている。
彼女の銀色の髪や息遣いがまたくすぐったく、思わず声が漏れそうになった。
「……」
妙に気恥ずかしい。
こんな様子を他の者に見られたら、何と言われるやら。
もっともウルリーケは早々に眠った様だし、ベルタはヴェロニカの看護役としてフリートの街に残っているので、この場を見に来る様な者は今、神殿には居ないが。
薄眼を開けて見ると、更にダーシャはユキナリの胸に顔を寄せつつ、鼻を少しひくつかせている。匂いをたしかめているのだろう。そういえば嗅覚の鋭い犬は、飼い主の体調不良を体臭から察したりする事も在るというが……
「……ユキ」
「あ、はい」
慌てて眼を閉じてユキナリは応じる。
「最近、ちょっと……頑張りすぎ」
「別にそんな事無いと思うけどな」

「無理、しないで」
「大丈夫だよ」
「私が、大丈夫じゃ、ない。
「……」
ユキナリは言葉に詰まっている様だ。
良くも悪くも見透かされ、神の真似事をしているのは、突き詰めればダーシャの為だ。
ユキナリがこの地――フリートラントに留まり、
恩人であるイルジナがいまわの際に『妹を頼む』と言った。
彼女を守る為に延々と逃亡生活を続けていた。
だがずっと教会の施設の中で幽閉生活を送っていたダーシャに、旅の生活はかなり負担になっていた。だからこそ、ユキナリはダーシャの為にも、定住を決意したのだ。
そしてそれはダーシャも気付いている。
自分のせいでユキナリが無理に神の真似事をしているのが――それでいつも頭を悩ませているのが、ダーシャは見ていて辛い、という事であるらしい。
「ユキ、疲れてる」

ユキナリの上に覆い被さる様な姿勢のままダーシャは言った。

「そうかな」

「以前と、鼓動の調子も、身体の匂いも、少し違う」

「いや、鼓動は……」

お前がそういう事をするからだ……とは、言えない。

以前、というのはダーシャはあの時もよくダーシャは事を言っているのだろう。そういえばユキナリの胸に耳を当てていたし、体臭をかいでいた様にも思う。勿論、服越しでだが。

「……悩んでる？」

言外に『悩みがあるなら打ち明けて』と促されているのだろう。

本当に心配してくれているのだ。イルジナにダーシャの事を頼まれて以来、ユキナリはひたすら自分が彼女を守り、その身を案じてきた積もりになっていたが、ダーシャはダーシャでユキナリの事を普段から細かく気に掛けてくれていたらしい。

いや。そんな事は分かっていたが、ここ最近はそれを意識しというか余裕が無いのだろう。

確かに少し疲れている――

「今まで、俺は目が届く範囲だけを守ろうとしていた」

苦笑してユキナリは言った。
「宣教騎士団が襲いかかってくればこれを返り討ちにして。フェアリートラントに腰を落ち着けてからは街の住人を害する亜神を退けて。目に見える場所、自分の手の届く場所だけを守ればいい、単純にそう考えていた」
「……」
ダーシャが胸の上で身じろぎする感覚がある。
ユキナリは彼女の背中に掌を置いて続けた。
「ぶっちゃけ、ダーシャだけ守れればそれでいい、後は知ったよ、俺は。一度は死んだ身だし、こっちには姉ちゃんも――家族も居ないし、何をして良いかも分からなかったから、本当、ただそれだけが出来ればっるかなって思ってた」
「ユキ……」
「でもそういう訳にはいかなくて色々思い知らされてさ」
誰かを守る、誰かを安心して暮らせるようにする、その為にはその暮らしを支える周囲の環境そのものを守らねばならない。そして元来、不安定な環境というものを確実に維持する為には、突発的な事態、不測の事態にも対応出来る様な余裕を確保せねばならず……

その為には、更に規模の大きな環境について気を配らねばならない。

また……

「ダーシャには悪いけどさ」

「……？」

「なんだかんだで、俺、フリートラントの皆の事も、大事に思えてきてさ」

本来はダーシャを守る為に街の住人達の事が、ダーシャ程ではないにしても気に掛かる様になってきた。ベルタやフィオナといった近しい者達は勿論、彼女等を通して触れてきた数多くの住人達……彼等の多くは、ユキナリを神と慕い、尊敬の眼差しと笑顔を向けてきてくれる。情が湧かない筈が無かった。

「でもそうなると、より大きな『環境』でしかなかった筈の、フリートラントを守る為に、その範囲を守らなくちゃならないロストルークという街との交易を開始し、その結果としてロストルークの地神イグドゥラや、その眷属たるウルリーケ達とも個人的な交流を持つ事になった。ウルリーケがしばユキナリの事を『友』と呼ぶ様に、彼女等は既にどちらにとっても単なる交易相手ではない。

ユキナリにとって一番大事なのは誰かと聞かれれば、それは変わらずダーシャだ。

だが、そもそもユキナリにとって大事なのは、かつては彼女一人だけで、だから順番など無かった。ただ彼女の事だけを考え、彼女の事だけを見ていれば良かったのだ。

大事なものがどんどん増えていく。

それが嬉しい反面……重い。

「地神の代わりを務めるには、広い範囲に目を行き届かせなければならない。街の人達も俺にその役割を期待しているだけの今までとは違い、できる範囲のことをやればよかっただけの今までとは違い、神様をやるには、ここまでしなくちゃならない……そう考えると、正直、俺は神様っての概念をまず『胡散臭い』と捉える傾向が強い。それは人間から思考力を奪い、一方的に金銭や時間を搾取する為の、仕掛けに過ぎない、位に思っていた。

ユキナリは『前世』で宗教に傾倒し、家庭をろくに顧みなかった母親が居た為、神というを少し甘く見てたっていうか。

だが……

「生け贄のいい悪いはともかくとしても、土地と連結して自我がでる訳だろ。同じ事がやれるのは凄いよな。こんだけの役目を自然に果たし「……ユキ」

ダーシャはふと――珍しく、地神ってのは凄いよな。こんだけの役目を自然に果たしユキナリの言葉を遮る様に言った。

「薄れるなんて嫌だけどさ」

彼女の方を見ると、ダーシャはユキナリの身体の上に覆い被さった姿勢のまま——しかし少しだけ身を起こして、ユキナリの顔を見つめていた。

「やっぱり、頑張り過ぎ」

「……そうかな」

「一人で何でも、やろうと、しすぎ」

「……」

言われてユキナリは眼を瞬(しばた)かせた。

「ユキが、私を、守ってくれる、だから……私も、ユキを、守りたい」

「……ダーシャ」

「錬金術は、世の理(ことわり)を読み解いて、人間なりの方法で理を再現する、技術。ユキが、神ではなくても、神と同じ事は、出来る様に、なる、いつか、必ず」

確信の滲(にじ)む声でダーシャはそう言った。

「私も、手伝える」

「……ありがとうな」

そう言ってユキナリはダーシャの頭を撫でる。

銀の髪の少女はまるで飼い主に甘える猫の様に眼(め)を細めて、再びその頬でユキナリの胸

に触れてきた。

夜――ベルタは神殿には戻らず、フリートラントに留まっていた。

本来ならばユキナリに捧げられた巫女として、彼に付き従うのが彼女の務めである訳だが、フィオナからの要請が在り、これにユキナリが応じた為、神殿には帰らず、シリングス邸に残る事になった。

ベルタに求められたのは、ヴェロニカの看護である。

ヴェロニカは結局、そのまま、しばらく逗留する事になった。気の強い彼女は、弱みを見せまいと、平然たる様子をとり繕っている様だが……実際には衰弱が激しい。しばらくは彼女の面倒を見る者が必要ろくに眠らずアルドレイルからフリートラントまで逃げてきた上、傷を負っていた事から、現在フリートラントでは、ユキナリの提案によって幾つかの主に農業やそれに関連する改革が実行中である。そちらに人手をとられている為、突然やってきたよそ者の面倒を見る余裕が無い。

そういう訳でベルタがヴェロニカの『担当』を任された訳だが……

「……」

とりあえずヴェロニカの傷の包帯を取り替え、食事を運び、そこで、やる事が無くなってしまった。

元々、ベルタは教育というものをろくに受けていない。他人から見られる——その程度の知識と経験しか、身についていないのだ。

勿論、傷の手当ても傷口を清潔にして、こまめに包帯や当て布を取り替える、位の事しか知らない。

「えっと……」

戸惑いながら、ヴェロニカの方を窺う。

以前の生活では主に年下の少女達の相手をする事が多かったので、こういう大人の女性を前にすると、そもそも何から話をすべきなのか——とりあえず何から話題にすれば良いのかすら、分からない。

ましてヴェロニカは傭兵だ。

ベルタにしてみればとりあえず名前を知っているだけ、という程度の接点の無い職業であり、漠然とだが『怖い人達』という印象が強い。そして実際、ヴェロニカは美しい顔

をしているものの、気難しげな表情を浮かべたままで、迂闊に話し掛ける事すら躊躇われるのだ。

客間に、ひどく居心地の悪い沈黙が満ちた。

だからといってヴェロニカが寝る様子も無いので、別室に立ち去って良いのかどうかも分からない。良くも悪くもベルタは生真面目なので、『つきっきりで面倒をみてやってくれ』と言われた以上、適度にサボったり手を抜いたりする事が出来ないのである。

だが――

「お前……」

さすがに沈黙にも厭いたのか、ふとヴェロニカが声を掛けてくる。

ベルタは慌てて――だが内心、助かったと思いながらこれに応じた。

「あ、は、はい！　何かご用でしょうか？」

「名前を、教えてくれるか？」

「――あ」

そう言われて初めて、ベルタは自分が名乗る事すらしていなかったと気付いた。

「す、すみません。私、ベルタといいます！」

「ベルタ、か」

ヴェロニカはその名を舌の上で確かめる様に一度呟き、それからその鋭い眼で改めて、ベルタを値踏みする様に見つめてきた。

「……悪いな」

「……え？」

一瞬、何を謝られているのか分からなかった。

「お前は……あなたは、あのユキナリという青年の付き人に私の世話を押しつけられた。とばっちりだと思ってな」

「わ、私は、付き人ではなくて……ユキナリ様に捧げられた巫女です」

「巫女？」

ヴェロニカは顔をしかめてそう呟く。

辺境に生きる者ならば、その一語が、大抵の場合に地神と結合した存在であるという事も。その地神というのが、獣が何らかの理由で知恵を持ち、土地と

「あのユキナリというのは、神官か何かなのだろう？　それなのあると知っているだろう。

「いえ、地神様です」

「地神？　彼が――人間がか？」

「はい。ユキナリ様は、よく御自分の事を『地神の代理』なんです」
この街にとっては、私にとっては、とても尊い御方で、神様なんです」
ヴェロニカが今ひとつ納得がいかない様子だったので、ベルタは自分が地神の生け贄に捧げられてから、ユキナリ様に捧げられた巫女なんと出会い、彼がフリートラントの神の役を引き受けるまでの顛末を話した。とりあえず自分でも出来る話という事で、ベルタは特に聞かれてもいない細かな事まで、思いつく限りちんとお務めも出来ていながら、喋った。
「……ですから、その、私はユキナリ様に捧げられた巫女なんくて……」
「お務め？　彼は人喰いの獣ではないだろう？」
「はい。ですからその、この身を捧げるという事で、その」
言ってベルタは赤面する。勿論、食料として――自分に捧げられた『モノ』としては扱わず、一人の人間として扱ってくれるから、せめて身体を性的な意味で役得意な事がある訳でもないにはいかないし、特に何かが、ユキナリは手を出そうとはしてくれない。
結果……ベルタは巫女としての自分を全う出来ていないという不安を抱えたまま、今に

至っている。

気がつけばそんな事まで、ベルタはヴェロニカに喋ってしまっていた。

どうも気まずい空気から逃れようとする余り、必要の無い事まで話してしまった様だが、それに気付いても今更、撤回は出来まい。

ヴェロニカにしてみれば、そんな風にベルタは恐れたのだが——鬱陶しい愚痴を聞かされた様に感じたのではないか。

「……そうだな」

それまでより少し口調を和らげた感じで、ヴェロニカは言った。

「一度定めた自分の在り方を変えるのは、難しいな……とても。あの、ヴェロニカ……さん？」

「何かを言う積もりは無い様で、再び寝台で横になると、会話眼を瞬かせるベルタ。寝返りを打った。もう眠る——という意味か。ヴェロニカの背中を見つめながらそんな風にベルタは思う。

だがヴェロニカはそれ以上を打ちきるかの様に、無言で

「あの……えっと、おやすみなさいませ」

そう告げて一礼すると、ベルタは足音を殺す様にして、客間を出た。

第二章　乱雲さりて

ジャスティン・チェンバーは地下に通じる階段を一人静かに下りていった。

彼はハリス真教会における最高位の聖職者――つまりは教皇である。本来ならば何処に行くにも付き従う者達が居るのだが。

深夜、一人で地下に……表向きは存在しない筈の施設に赴くのでも本当に限られている。それはハリス真教会の――そしてその教皇という役職の、代々意図的に隠されてきた一面であった。

「……ふむ」

地下施設の入り口――分厚い鉄製の扉を開く。

途端、それまでとは明らかに雰囲気の異なる景観がジャスティンの前に広がった。

装飾の類いは絶無、代わりに壁には――壁そのものが見えない程にびっしりと棚が設けられ、そこには様々な道具や器具が置かれている。硝子製のもの、金属製のもの、樹脂製のもの、そして何で出来ているかすら見ただけでは判別のつかないものまで。ジャスティ

ンには名前どころか使い方すら分からないものばかりだ。
いずれにせよ宗教施設の――大聖堂の地下にあるとは思えない異様な雰囲気である。
天井を見れば照明器具としてぶら下げられているランプの他にも細いものもあり、途中で分岐したり、合流したり、あるいは丸い容器や四角い器具に繋がっているものもあり、これまた何がどうなっているのかさっぱり分からない。
そしてその奥に――この地下の主が、居た。
「ようこそ、我が研究室に」
そう言って一礼するのは長身の女だ。
二十歳をいくつか過ぎているだろうか。情熱的な赤毛を結って左肩に垂らすようにしている。黒く丈の長い、そして見せつけるかの様に胸元の大きく開いた衣装を身につけておる、教会の関係者とはとても思えない姿をしていた。あるいは娼婦の類いと間違える者も居るかもしれない。少なくとも――その手を見ない限り、彼女を錬金術師だと一目で見抜く人間は殆ど居ないだろう。
彼女の手は肘の辺りまで達する長い白手袋に覆われ、その甲には複雑な図案が――各種の記号と文字を組み合わせた紋様が描かれている。錬金術師達が好んで使う錬成陣だ。実

際にはその陣そのものを使うのでなく、それは一種の設計図であると同時に、物差しの様な計測具であるという話だがこれまたジャスティンにはよく分からない。

ヤロスラーヴァ・ベナークというのが彼女の名前だ。

「何か良いものを見せて貰えるという話ですが」

ジャスティンはそう尋ねる。

「はい。こちらへ」

と艶然たる笑みを浮かべてヤロスラーヴァは奥を示す。

そこには更に一枚、こちらは木製だが扉がついていた。

「さて猊下。お心構えはよろしいですか？」

悪戯っぽく笑いながらそう尋ねてくるヤロスラーヴァ。

「心構え？」

「ええ。少し驚かれるかとも思いますので」

日頃から何かと思わせぶりな言動を好む彼女だが、今日は勿体の付け方がいつもと違う様に感じられた。

「貴女にはいつも驚かされっぱなしですよ。これ以上何を驚けと？」

ジャスティンは苦笑を浮かべてそう言った。

「……ではどうぞ御覧ください」

ヤロスラーヴァは扉を開いて部屋の中へと入るようジャスティンを促す。

中には――中央に大きな水槽が一つ置かれていた。血の様に赤黒い、不透明な液体で満たされているところを見ると、これは聖油槽の一種なのであろうか。縦に細長く、まるで壁に立てかけられた棺桶の様な大きさと形の容器であった。

「全くもって、お待たせいたしました」

さらりと告げてヤロスラーヴァは天井から垂れ下がっている鎖を引いた。

ほこり、と泡が一つ、聖油槽に生じる。

次の瞬間、聖油が緩やかに渦を巻きながらその水位を下げていく。どうやら聖油を排出しているらしい。聖油が減るに従い、その不透明さの向こうに隠されていたものが姿を現してきた。

「これが……？」

確かにジャスティンの声には驚きが滲んでいた。

彼はヤロスラーヴァに新しい、十四体目の〈御遣い〉を造る様に命じた。だが完成にはそれなりに時間が掛かると考えていたのだ。元々〈御遣い〉を造ったのは先代教皇が子飼いにしていた錬金術師の一族だったが、その末裔たるイルジナ・ウルバンが『叛逆』

の罪で処刑されてからは、その技術の大半が喪われてしまっていた。

イルジナの一族が代々残してきた記録を読み解けば、必ずしも同様の〈御遣い〉を造る事は可能になるだろうと思ってはいたが、この短期間で実現したとなると、ジャスティンの想像以上にそれは簡単な事であったらしい。それともこれはジャロスラーヴァが並み外れて優れているだけの事か。

「これが〈御遣い〉、なのですか……？」

赤黒い液体を幾筋もまといつかせる白い身体。

聖油槽の底に座り込み、側面に背中を預けている状態だ。

見た限りそれはひどく華奢で、しかも緩やかに流れ落ちる様な曲線でその輪郭は成立していた。ひどく艶めかしい。胸の膨らみを見るまでもなく、それが女性の身体だという事は分かった。

人造人間たる〈御遣い〉に女性型は無い。無かった。今までは。

人という存在の純粋な形を突き詰めていけば、男性の形になるというのがハリス真教会の教えだった。

世界が生まれた直後。人はたった一人の男しか存在しなかった。人それ故に争う事も憎しみ怒る事も無く、ただ神の寵児として完結した不老不死の存在だった。男がそのままで

あったなら、世界は退屈だが安定したものになっていた事だろう。

だが男は寂しさと退屈さに負けて、神のやり方を真似、自らの肉体の一部を分け与えて伴侶となる女を造ったと言われている。その結果、世界には嫉妬や憤怒が生まれ、人は互いに争う様になったのだと。己と似て非なる存在と出会う事で、人間は比較というものを覚え、純真無垢ではいられなくなったのだという。

だからこそハリス真教会は『原罪を持ち込んだ原因』として女性を男性より一段下の存在とみる。当然ながら尊き〈御遣い〉も全て男性型に統一されていたのだ。

「女性型にした意味は在るのですか？」

「勿論です」

ヤロスラーヴァは得意げに頷いてみせた。

「女性型を選んだ理由は二つ。一つは、件の〈蒼い御遣い〉に対する対策として。ハリス真教会のことを警戒しているのは全く明らかですから、いかにも敵であるという男性の姿をしていた方が相手を油断させやすい」

元々この〈御遣い〉は男性型であるも〈蒼鋼の冒涜者〉〈蒼い御遣い〉等と呼ばれる、暴走した十三体目の〈御遣い〉を暗殺する目的で造られた。〈蒼鋼の冒涜者〉も、警戒はしにくいだろう。ると考えている可能性が高く、だからこそ女性が近づいてきても、

「もう一つの理由とは？」

「今回、〈蒼い御遣い〉に対抗するため、核となる魂から人格を消去しないままにしておき自立的に行動するという前提がありました」

教会が保有する人造人間としての〈御遣い〉は、あくまで布教用に奇跡を垂れ流してみせる存在、いわば看板であり、そこに自律的に行動する為の自我は必要無い。大抵はこれを操作する役目の者が一緒に行動し、民衆の反応を窺いつつ、その奇跡の様な能力で彼等を驚かせるのだ。

だが〈蒼鋼の冒涜者〉には自我がある。

それが〈蒼鋼の冒涜者〉の最大の脅威であり、イルジナ・ウルバンが処刑される原因であった。

〈蒼鋼の冒涜者〉それ自体が飛び抜けて優秀という訳ではなく、性能としては他と互角と言っても過言ではない。いざ同類と戦う事になったとしても、自分で考え動く事の出来ない人形など、〈蒼鋼の冒涜者〉の速さにはついていけないのだ。

状況を把握し、戦術を選び、行動に移す。

これを自ら出来るか出来ないかは、闘争の現場においては致命的な差となり得る。

勿論……宣教騎士団からいくつもの部隊を派遣すれば、如何に人造人間といえど、物量で圧倒し斃す事は可能だろう。だがそれではあまりにも大掛かりになりすぎる。ハリス真教会内の不祥事を表に晒す事にもなりかねなかった。

教会の体面を考えれば、何としてでも秘密裏に〈蒼鋼の冒涜者〉を処分しなければならない。だからこそ〈蒼鋼の冒涜者〉と総合的に同等の能力を持った暗殺者が必要なのだ。

具体的には〈御遣い〉を造る際に芯として用いた『魂』……その表面の汚れとも言うべき人格や記憶を洗浄して消すのではなく、そのまま残して完成させる。

その為に――

「今回使用した魂が、前世では女性だったのです。これを無理矢理男性型の肉体に封じ込めてしまえば、無用の混乱を生じさせかねません。全く、それは無駄な賭です。性能が十二分に発揮できない可能性が在りますし、混乱した挙げ句、暴走し、こちらまでハリス真教会の敵となってしまえば、目も当てられません、全く、それでは意味が無いどころか、有害ですらある訳です」

「……なるほど、道理です」

ジャスティンは眼を細めて聖油槽の底に座る裸身の少女を見つめる。

「それで、もう動くのですか？」

「全く、問題ありません。動きます」
ヤロスラーヴァは挑発的な微笑みを見せると、聖油槽の硝子を叩いた。
「起きなさい。起きて、お父様にご挨拶なさい」
「お父様……？」
疑問を抱くジャスティンの視線の先で、十四番目の〈御遣い〉は眼を開いた。
力なく硝子面に預けられていた身体の背筋が伸び、底に手をつくと淀みの無い動きで立ち上がった。続けて金色の長い髪から、聖油の赤い雫を垂らしながら、〈御遣い〉は硝子面に歩み寄り、両の掌をそこに貼り付けてくる。
「おとう、さま……？」
〈御遣い〉は小首を傾げてジャスティンを見つめてきた。
紅い瞳が、困惑の表情を浮かべる教皇の顔を映す。
「……お父様とは、どういうことですか？」
「猊下は人造人間の材料が何か、ご存じですか？」
愉しげにヤロスラーヴァが問い返してきた。
「材料……？　さて？　残念ながら私はその方面に明るくないのですよ」
勿論、錬金術の精髄たる人造人間の製法や材料など、門外漢のジャスティンが知る筈も

無い。聖油槽に浸かっていた事を思えば、聖油もその材料の一種なのだという事は想像がつくが。

「当然ですね。全く、当然です……ではお答えしましょう。人の精液を用います」

「……それは」

「人の精液を蒸留器に入れて密閉し腐敗させる。すると透明で人の形をしたモノが現れるのです。これに対して毎日人間の血液を与えていくと身体が出来上がっていく……実際にはそれだけという訳にはいきませんが、基本は、全く、このようなものです」

ヤロスラーヴァはそう言って。

「私がその精液をどこから調達したか、お答えいたしましょうか？」

「……おとうさま」

目の前の教皇と錬金術師の会話など、まるで理解している様子も無く、生まれたばかりの人造人間は、血の様に紅い瞳でジャスティンを見つめ続けていた。

結局――ベルタはシリング邸に四日後も留まっていた。
人手不足は相変わらず、しかもヴェロニカが未だ完全にフリーではないらしく、ベルタ以外にはろくに会話もしようとしない意見も在ったが、だからた訳ではないらしく、ベルタが暴れ出した時にどうしようもない、とらといって手負いの状態でアーロン達宣教騎士二人を相手に戦ったヴェロニカの身の回りの世話める程の戦力を警備に充てる余裕も無く……結果、ベルタがヴをし続けている。
ヴェロニカの世話を任されている事について、ベルタ自身は不満を感じていない。
特に職能も特技も無い自分に、仕事が任されるのは――出来る事が在るのは嬉しい位だった。ただ何日もユキナリと離れて生活をせねばならないという一点だけが、不満というか、心細い気持ちになった。
「あの……」
新しい包帯と、湯を入れた桶とタオルを携え客間を訪れるとたヴェロニカが体を起こす所だった。
どうもヴェロニカはベルタが部屋に来るのが少し前から分かっていた様だった。微かな足音を聞き分けているのか、それとも、いわゆる気配というものが彼女には読めるのかは

分からないが、ベルタは彼女が無防備に眠っている姿を見たじていて、彼女が起きているのは何となく分かった。あくまっているという印象だ。

「包帯の取り替えと……お身体を拭いたり……その……よろおずおずとそう尋ねるベルタが、相変わらずヴェロニカは既にこれも四度目になる訳だ手負いの獣の様な雰囲気を放っていて、迂闊に触るとその瞬間に噛み付かれそうな気がしだがこれはベルタの勘違いであったのだ。

「……手間を掛ける」

ヴェロニカはそう詫びてきた様だ。

「じゃあ……」

「いや、大丈夫だ、自分で脱ぐ」

片手を挙げてベルタを押し止め、ヴェロニカは自ら寝間着を脱いでいく。女同士なので恥ずかしがる様子は全く無いが、怪我のせいか動きには未だぎこちない所が在った。

「先ず、古い包帯を解きますね……」

血と汗で汚れた包帯を外していく。

医師ではないベルタに出来る事と言えばこの程度だが、と多少は手慣れてくる。注意深く、特に傷に直接触らない様に気をつけながら、ベルタはヴェロニカの引き締まった身体に触れた。

自分の身体とは全く違う、とベルタは思う。

ベルタも勿論、太っているという訳ではないが、ヴェロニカの様な筋肉はあまりついていない。ベルタの肌は柔らかく、指で突けばある程度まで指先が沈み込む様な感じだが、ヴェロニカの肌は弾力に富んでいて、指先をはっきりと押し返してくる。しなやかに鍛えられた……何処か獣を想わせる身体だ。

その肌には幾つもの傷跡が残っている。新しいものも在れば旧いものも在る。大きいものも在れば小さいものも在る。彼女がどんな人生を歩んできたのか、その傷が言葉も無く物語っている様だった。

それに比べれば自分は――恵まれていたとは言わないが、実に安穏とした生き方をしてきた様に想う。そもそも『戦う』という発想が無い。誰かと競い合う事も無い。自分からは何かを積極的にする事も無く、言われるがままに生きてきた。

ヴェロニカから見れば、自分はひどく醜く哀れな存在に見えるのかもしれない……そんな風にすら思った。

「傷は、だいたい塞がったな」
ヴェロニカが、包帯の下に在った傷をひどく醒めた眼で見つめながらそう断じる。
「そうですね」
ベルタは古い包帯を巻いて袋に入れながら頷いた。
傷口は特に膿んでいる様子も無く、腫れも今日になってようやく引いた。ヴェロニカの言葉通り、次の包帯には恐らく血の跡はつかないだろう。内臓を傷つけている様子も無かったし、この分では完治もそう先の事ではないかもしれない。
しかし……
「……元々、それほどの深手ではなかったのだから、血が止まれば充分」
「充分……？」
まるでこれ以上は治らないと言っているかの様で、ベルタはその後、ヴェロニカは大人しく身体を拭かれ、傷口に包帯を巻かれながら、ふと思い出したかの様に言った。
「世話になった」
「あ、いえ……別に大した事は」
「アルドレイルには、私の仲間が捕らえられている」

唐突にそんな言葉がヴェロニカの唇から零れ落ちた。
「え、あ、傭兵の仲間の方、ですか？」
「そうだ。雇い主もな。契約が終わるまで彼等も仲間だ」
ヴェロニカはそう言って――ベルタが包帯を巻き終わるのを待って、寝台からすっくと立ち上がった。
「あの、どちらに？」
「仲間を取り戻しに行く」
何の気負いも無くそうヴェロニカが言った為、ベルタはその意味を理解するのにしばしの間を必要とした。
「え？　あの――」
「世話になった。感謝している。ついでに私の武具の在る場所を教えてくれ」
「……」
ベルタは咄嗟に言葉が出てこなかった。
何度か喘ぐ様に口をぱくぱくと開閉し――
「き、傷口がくっついたって言っても……そんな、無理したらすぐにまた……！」
自分が微妙にずれた事を言っているという自覚は在った。

ヴェロニカが行こうとしているのはアルドレイルだ。
宣教騎士団が中継基地として利用している街。恐らく駐留するだろう。
上、そしてあの恐るべき兵器――守護聖人像も三体以上存在するだろう。
たった一人で挑んで無事で済む筈が無い。傷が開くとか開かないとか、それ以前の問題である。たとえヴェロニカが万全の体調だったとしても、間違いなく殺される。
しかし――
「……もう沢山だ」
ヴェロニカはベルタを見つめて――言った。
「誰かを見捨てて逃げるのは、誰かを見捨てて、誰かを見捨てて逃げた事があるという事か。今回のアルドレイルから逃げてきた事とはもっと別の、随分と遠くを見ているかの様な眼差しをヴェロニカはしていた。
「でも……でも……」
ベルタは上手く言葉が出てこない。
此処でヴェロニカを行かせてはならない。だが自分にはこの女傭兵の意思を変えさせる事も、強引に止める事も出来るだけの、無力な小

娘に過ぎない。もっと自分の頭が良ければ、気の利いた言葉の一つや二つを口にして、少しは効果の在る説得が出来るのかもしれないが。そう思うとひどくもどかしい。

どうすれば良いのか。

ベルタが狼狽えている――と。

「ベルタ、ヴェロニカの怪我の様子はどうだ？」

扉を叩く音と共にそんな問いかけが投げ込まれる。

それが自分の仕えるべき主の声だとベルタが気付いた時――ベルタやヴェロニカの返事も待たずに扉は開かれた。

姿を現したのは、やはりユキナリである。

彼は――

「……」

そのまま、そこで固まった。

一瞬その理由が分からなかったベルタだが、改めてヴェロニカの方を見て、理解した。

ヴェロニカは未だ服を着ていない。下着は股間を覆う一枚だけ、上半身は勿論、太ももから下も一糸まとわぬ姿である。汗をかいた身体を拭いて綺麗にする為だった。

「……」

ヴェロニカはヴェロニカでいきなりユキナリと半裸——いやってもみなかったのか、眼を丸くして固まっている。その形のれている、といった感じだった。

そして——

「あ、い、いや、ご、ごめん！」

慌ててユキナリはその場で半回転してベルタとヴェロニカに彼の耳が赤いのにベルタが『奉仕現場に入り込んだ時は、動揺していなかった彼が、明らかに慌

「……」

羨ましい……などと、少しずれた事をベルタは考えていた。これが大人の色気というものなのだろうか。

「ユキ？」

ユキナリの背後からはダーシャとウルリーケも姿を現した。二人はユキナリの脇から部屋の中を覗き込み、ようやく我にエロニカに気付いた様だった。

「……ユキ」

ほとんど全裸で対面するとは思良い胸を両腕で隠す事も忘しようとユキナリの入浴てている。

背中を向けた。

返って自分の胸元を隠すヴ

眼鏡の奥で眼を細めて彼の名を呼ぶダーシャ。

一方――

「おお。もう傷はだいぶん治ったか」

だがウルリーケは、少しずれた事を言ってくる。

この少女は、植物型地神の眷属――つまりはその一部であるにも関わらず、今も全裸に近いヴェロニカを見てキナリも見て、それでも傷の治りに関してしか見えていないかれからずれている事が多い。

「あ、あの、あの、これは……違う、違うんです、その……」

ベルタは慌ててユキナリを弁護しようとするのだが、適当な言葉が思い浮かばない。

「……胸？」

とダーシャが恨めしげな表情でそう問う。

言われて見れば、確かにヴェロニカの胸はダーシャやウルリーケよりも豊かである。乳房の下から臍に至る線が充分に引き締まっているので、胸や尻がより強調されている様な印象だった。

「違うー　誤解だー　ただの事故だよー」

我に返ったユキナリは慌ててそう言うが。

「……将来性」

ダーシャは聞いている様子も無く、むしろ何かを確かめるかの様に自分の胸元を触っている。ベルタが知る限りユキナリがダーシャに手を出している事なのかもしれない。

キナリは大人の女性が好きという事なのかもしれない。

（胸なら……）

充分にあると思うのだが。ただ胸が大きければ良いという訳でもないのか。

そんな事をベルタが考えていると――

「……」

ヴェロニカが溜息をつく。

彼女は何か気が緩んだかの様に、苦笑めいた表情を浮かべて、ナリ達のやりとりを前にして、胸に抱えていた悲壮な決意が、もしれない。

今すぐに飛び出していく、という様子ではない。

ベルタは少しだけ安堵の溜息をついた。

借りていた寝間着を畳んで寝台の上に置き、ヴェロニカは自分の戦装束に着替えた。

「……」

血で汚れていた戦装束が洗ってあったのは驚かないが、端々れ目まで修繕してあったのは正直言って意外だった。どうやらい。御世辞にも上手い縫製とは言えなかったが、丁寧に直してた。そういえば当初、無言で差し向かいという状況に耐えかねた様だったが――

「あの……」

「――短剣を」

「……はい」

手を差し出すと、ベルタは素直に鞘に入った短剣を手渡してヴェロニカがアルドレイルに戻る件については今も反対している様だが、服を隠したり武具を渡さないという様な、姑息な手で引き留める積もりは無いらしい。他人の物を取り上げるという事そのものに、抵抗があるといった感じだった。恐らくは善良な娘なのだろう。

「すまないが、水を一杯貰えるか」
「あ、は、はい」
ヴェロニカが頼むとベルタは頷いて、ついでに使用済みの包帯を入れた籠を手に部屋を出て行った。身支度が終われば又引き止めに掛かる――そう見越して、口実を作り彼女を遠ざけたのである。
呆れた事に……衣装棚の扉を開いてみると、長柄戦斧以外の武具や荷物は全てそこに納められていた。ヴェロニカが強引に逃げ出すという事を考えなかったのだろうか。あるいは体力的に無理があると踏んで油断していたのか。それとも単純に――ヴェロニカを信用していたのか。ベルタの様子を見ているとこれが一番当てはまりそうな気がした。
「……」
何故か――後ろ髪を引かれる様な想いを覚えつつ、ヴェロニカは客間を出た。
向かうのは応接間である。
養生に専念していた間は部屋を出た事が無かったが、この手の建物――領主や権力者の屋敷の造りは概ね共通しているので、どの辺りに何の部屋があるのかは分かる。
身体は勿論、未だ完治してはいない。
だが少なくとも歩き回るのには不都合は無い程度に回復した。ベルタの言葉通り、跳ん

だり走ったりすれば、傷口が開きそうだったが、気にしてはいられなかった。

「……すまないが、ちょっと良いか？」

応接間に足を踏み入れてヴェロニカはそう声を掛ける。

中ではユキナリ、ダーシャ、そして屋敷の主らしいフィオナが何かの相談をしている最中だった様だ。三人は揃ってヴェロニカの方に視線を向けてくる。フィオナはヴェロニカが戦装束を帯びている事に驚いた様だが、ユキナリとダーシャは表情を変えない。驚いていないのか、それとも、ある程度は察していたのか。

「話があるのだが」

「――こちらを」

フィオナはそう言って脇にある空席の一つを示した。

「込み入ったお話――なんでしょうね。先にこちらの話に区切りをつけてもよろしい？」

「ああ」

頷きながらヴェロニカはフィオナの隣の席に腰を下ろした。

「あー……とりあえず、さっきは、すまなかった」

ユキナリが頬を人差し指で掻きながらそう謝ってくる。

「気にしていない。だが謝罪は受けよう」

ヴェロニカは言った。
傭兵稼業は男の世界だ。そして各地を転々とする商売だ。着替えるにしても、いちいちヴェロニカだけ別室や天幕を用意するというのもあまり現実的ではない。部下達はそれでもヴェロニカを未だ特別扱いしようとしていたが。彼等の気遣いは有り難いのだが、正直、心苦しいものを感じていたのも事実だ。
とにかくあの程度の事をいちいち気にする程、ヴェロニカは初心ではない。
「ではユキナリ、話を続きを」
とフィオナが促す。
「ああ。さっき話した通り、ウルリーケからの提案は実行しようと思っている。それから……今後のことを考えれば、遠距離の敵に対して何とかできる武器が必要だ」
ユキナリはそう言って、机の上に広げた図を示す。
どうやら地図と――それから何かを描いた簡単な絵の様なのだが。ヴェロニカにはそれが投石器に見えた。ただし一緒に添え書きされている人の図が、同じ縮尺で描かれたものだとすれば、その投石器は攻城兵器並みに巨大なものという事になるが。
一体この連中は何の相談をしているのか。
「遠距離というけれど、ユキナリやダーシャの『銃』でも充分ではないのですか？」

「いや、多分、勘違いされちゃってるんだろうが――」

ユキナリは気まずそうに顔をしかめて言った。

「『銃』は、射程距離無限の万能兵器って訳じゃないんだよ。弓矢に比べると確かにその射程距離は大きいが、それでも一定距離を離れれば急激に威力は落ちるし、何より精度が落ちて当たらなくなる」

言ってユキナリは彼の椅子の脇に立てかけられていた長剣――いや長剣状の武器を示して見せた。

ヴェロニカは眼を細めてそれを見る。ジュウ、というのがあの武器の名前らしい。あれは非常に強力な武器だ。ダーシャが持っていたのも同種のものだろう。あの轟音を発する武器でヴェロニカは持っていた長剣をはじき飛ばされた訳だが……先程、身支度を整える際に見ると、それは中程で綺麗に折れていた。

どちらかといえば安物の剣ではあったが、そう簡単に折れる様なものでもない。少なくとも何度もヴェロニカはあの剣で斬り結んだ経験が在る。つまり、あの武器の一撃は剣士の打ち込みより何倍も強力という事になる。

射出型の武器の様だが、弓矢や弩と異なり、上下左右に場所をとらないので携帯して動き易い上、剣の部分で斬り結んでいる最中にも使えるらしい。

もしあれが手に入れば、仲間を――部下を救い出すのに役立つ筈だった。

「そう。確かに〈デュランダル〉をお借りした者の話でも、小さな的に命中させるのはとても難しいと――」

「ああ。だから、敢えて持ち運びやすさは犠牲になるけど、より遠い距離を、より正確に狙う、狙いやすい、そんな『銃』が必要になる。高い精度を保つための長くて太い銃身、長い射程を叩き出す為の火薬量の多い『弾薬』、それから遠距離を狙う上で必要な『遠視鏡』――いや、遠眼鏡って言った方が良いか、それらを組み合わせた『狙撃銃』――が」

「……」

ヴェロニカは眉を顰める。

武器の話をしているというのは勿論、分かるのだが、初耳の単語がやたら出てくるので、戸惑ってしまう。このユキナリという青年は武器工房の職人か何かだろうか。辺境地で独自に発達した、異形の武器を見かける事はよくあるが――剣が折られた事といい、個人が携行出来る武器としては、破格の威力だと言える。

場合によっては、戦場における兵の戦い方を、一変させてしまう程に。

だが、ユキナリ達はその『ジュウ』ですら足りない――という話をしている様だ。更に

強力な武器を造る算段をしている様なのだが……

「それで、私への相談というのは？」

とフィオナが尋ねる。

「『狙撃銃』は何よりもまず精度だ。そうなると当然、精度を確認する為と、それから射手の――使う人間の練度を高める為の試し撃ちが必要なんだがな。その為の場所に心当たりが無いかって話。山の中で撃って、もし偶然通りかかった人に当たってもまずいしな」

「場所……ですか」

「弓矢でも届かない位の距離が在って、撃つ場所と的の間に障害物が無くて、その周りに普段は人が近づかない――そういう場所だな。街中では無理だろうから、街の周辺で」

「……以前、地神の儀式で使っていた物見台はいかがでしょう？」

首を傾げてフィオナはそう提案してきた。

「神殿との間の距離は相当なものです。元々神殿での儀式の進行を確認する為の場所ですから、勿論、的を狙うにあたって間に障害物は在りません」

「ああ、なるほどな。それは盲点だった」

ユキナリは感心した様子で頷いている。

「神殿周りなら気軽に散歩する奴も居ないだろうし……俺達が気をつければいいか」

「ええ。それでも不安なら、日時を指定して、住人達に近寄らない様、指示を出しておく事もできるかと思います」
「わかった。ならそれで」
満足げにユキナリはそう言った。
「……」
その様子を眺めながら――ヴェロニカは、改めてあのユキナリの持つ『ジュウ』という武器が気になった。
離れた場所からでも一方的に相手を攻撃でき、かつ、剣をへし折る程に強力。
恐らく板金鎧ですらも、あれは易々と貫いてしまうだろう。
ドレイルに戻る事が出来れば、仲間の救出が上手くいく可能性は格段に上がる。
何とかしてあれを手に入れる事は出来ないだろうか。勿論、強引に奪うという事も考えたが、なんだかんだで此処の連中に世話になったのは確かであるし、強奪する事そのものも教わらねばならないだろうし、交渉して譲って貰うのが一番、確実で、早い。
「あ、あのっ！」
ヴェロニカがそんな事を考えていると、何やら慌てた様子でベルタが応接間に飛び込ん

できた。

「お話し中にすみません、ヴェロニカさんが居なく――」

とそこまで言って、彼女は椅子に座るヴェロニカの姿に気付いた様だった。長々と溜息をついてその場に座り込んでしまう。頼まれた水を持って戻ったら、客間にヴェロニカの姿が無かった事で、慌てたのだろう。

「何をそんなに慌ててるんだろう？」

とユキナリが尋ねる。

「そ、それは、あの、ユキナリ様、フィオナ様、ヴェロニカさんを止めてください！」

ベルタは床に座り込んだまそう訴えた。

「未だ傷も完全に治りきった訳でもないのに、フリートラントを出て、アルドレイルに戻るって……仲間を助けるんだって仰って」

「ああ、なるほど」

ユキナリは視線をヴェロニカの方に向けて頷いた。

「言っちゃ悪いが無茶だ。ベルタが正しいよ。仲間を助けたいってのは分かるけれど、アルドレイルには宣教騎士団が二つ三つ駐屯してるんだろう？　あんた一人で突っかかっていってもどうなるものでもないだろ。無駄死にだ」

無駄死に。ユキナリはさして深い考えをもって言った言葉でもないのだろうが、それはヴェロニカの胸に殊の外、重く響いた。

「あんたがフリートラントに来て四日、いや今日で五日目か。仲間は、宣教騎士団が処刑する積もりならもうとっくに殺されているだろうし、そうでないなら、この後も捕虜としておく可能性が高い。どうない理由にはならない――違うか？」

「それは……」

ヴェロニカは言葉に詰まった。

ユキナリの言う事は筋が通っている。確かに殺すならすぐに殺しているだろうし、現時点で生きているのなら、これからまだしばらくは生かされたままである可能性が高い。

ハリス真教会の宣教騎士団は、ヴェロニカから見れば冷酷だが、残虐ではない――というより、大義名分をやたらに重んじる傾向が在る。それが必要無いのに捕虜を殺したりはしないも辞さない連中だが、意味もとあれば女子供の大量殺戮戦うなら、少しでも勝率の高い方法であるべきだ。

ならば――

「わかった。もうしばらく世話になる」

「……？」

ユキナリは少し意外そうな表情を浮かべた。

ベルタに請われて説得はしたものの、ヴェロニカがそう簡単に引き下がるとも思っていなかったのだろう。実際、「ジュウ」の事が無ければ、いかにユキナリの説得が正しい理屈に基づいていたとしても、ヴェロニカは構わずアルドレイルに向かっただろう。

「その代わり、といっては何だが。迷惑をかけついでにもう一つ頼みが在る」

「……頼み？」

「私にその、ジュウという武器を譲って貰えないか。出来れば先程から話の出ている、『すないぱーらいふる』というものも一緒に」

より強力で遠くまで届く武器が在るというのなら、そちらも是非とも欲しい。

勿論、ヴェロニカにそれらの武器を買い取るだけの持ち合わせは無い。事実上、タダでくれ、と頼んでいるのだ。厚かましい事この上なく、断られる事は覚悟の上での頼みだったが――

「……いいだろう」

意外にあっさりとユキナリは頷いた。

アンジェラ達が宣教騎士団の詰め所として使っているのはアルドレイル街長の屋敷だ。
本来の住人である街長達は別邸に追いやり、騎士団の主要な面々で街一番の大きな屋敷を占拠していた。
隊の機密を守る為、街長とその家族を含め、街の人間は立ち入り禁止――という事に表向きはなっているが、実際は、嫌らしく媚びへつらいすり寄ってくる連中が目障りな為、アンジェラが接収を団長に進言したのである。
交易で賑わう街の長に相応しく、石造りを基本とした頑丈な建物は、宣教騎士達の姿とよく馴染んだ。彼等が出入りするだけで何処かの城塞めいた厳めしい雰囲気になる。
街長の書斎は団長の執務室に。応接室は各騎士団の団長・副団長達が集まる会議室に。
使う者が代わるだけで雰囲気は一変する。
良い進言をしたものだとアンジェラは満足していた。
そして――
「報告いたします！」
アンジェラが待機していた執務室に、宣教騎士の一人がやってきた。

現在、団長であるベイトソンが、元街長の寝室で療養中の為、副団長のアンジェラが第九宣教騎士団の采配を任されている。団長の代役を務めるのは光栄な事だが、様々な指示を逐次出さねばならない為、常にこの執務室に待機せねばならなくなった。

アンジェラとしてはまた街の巡回警邏に出たいのだが、渋々この場に留まっているのだ。単にアンジェラに伺いを立てねばならない案件が多いという事も在るが、ベイトソンが刺された事で、神経を尖らせている者も多いのだろう。

「件の傭兵でありますが、どうやら一名だけ逃げ延びた者がいるようです」

「傭兵？　ああ……あの」

眉を顰めて呟いて、それからようやくアンジェラは思い出した。

アンジェラ達第九宣教騎士団がこのアルドレイルにやってきてすぐ、王国の許可もハリス真教会の認可も無しに交易をしていた商人達と、その護衛役の傭兵達を捕らえた。

彼等は貯蔵庫として使われていたこの街長の屋敷の地下室に閉じ込められ、宣教騎士達による尋問が行われていたのだが――

「一名だけ……しかしあの状況で？」

アンジェラは眉を顰めて呟く。

「よほど幸運だったか、あるいは臆病者だったのでしょうか」

仲間を見捨てて真っ先に逃げたのか――とも思ったが、そのだとすれば、情報が出てくるのが少々、遅い。今頃になって情傭兵達がその逃げた仲間を庇って尋問に耐えていたという事は、

「無傷ではない様なのですが」

「それでも尚、無事に逃げ延びたというのなら、尚更、大したものですね。褒めてあげるべきでしょう。何処かの街に辿り着く前に、獣の餌にでもなっていそうですが」

「は。その可能性は充分に」

直立不動でそう答える宣教騎士。

「しかし気になります。卑しい傭兵風情が尋問に耐えて庇う？傭兵なぞ、彼等自身、お互いに消耗品でしょう。何人もの仲間がすとなると……」

それは傭兵に見えて傭兵ではないのかもしれない。

単なる敗残者なら、わざわざ追う必要も無いが――

「そうですね。追いましょう。逃げた相手が一人なら五人か六人も居れば充分。この辺り終えている様ですし、騎士団全員で動くのも大袈裟でしの亜神や異獣はあらかた駆除しう。人選は任せます。馬と武装を用意してください。指揮は私が執ります」

「副団長、自らですか？」

「ええ。勿論、もう死んでいるかもしれないですが、死体は確認しておくべきです。団長がご療養中は第九宣教騎士団を出発させる訳にはいきませんし、暇潰しとまでは言いませんが、後顧の憂いを絶つのは、悪い事ではない筈です」

本来、第九宣教騎士団はこの地で補給の後、更に辺境の地へ教化遠征に向かう予定だったのだが……団長の負傷という不測の事態に見舞われて足止めされている状態である。

前述の通り、アンジェラは団長代理としてこの執務室に待機している事が望ましいが、正直、この状態に飽きてきた所だ。

「さて、何処に行ったか、ですが」

比較的近いのは――三日四日でたどり着ける距離となると、メイスフィールド、フリートラント、エンレンディラ辺りか。頭の中に大まかな地図を描いてアンジェラは考える。

「そういえば、フリートラントの方には第六騎士団が行っていたのでしたか」

同期入団の宣教騎士――アーロン・ランズダウンの顔を思い出しながら、アンジェラはそう呟いた。

ユキナリは実のところ……そう数多くの銃に精通している訳ではない。

〈デュランダル〉と〈レッチリ〉に関しては、基となった銃――ウィンチェスターM92と、スタームルガー・スーパーブラックホークのモデルガンを『前世』で所有しており、頻繁に分解と組み立てを繰り返していたので、部品の一つまで形状と機能を覚えていた。

この二種の銃の機構――レバーアクション・カービンやシングルアクション・リボルバーは構造も簡単で、部品点数も比較的、少ない。元々どちらも十九世紀に基本形が造られた銃なので、現代の精密機械の様なミクロン単位での精度が求められる訳でもない。だからこそユキナリが記憶を辿って試作を何度かしただけで、実用に耐えるものを造り出す事が出来たのだ。

だが実は、ユキナリは狙撃銃のモデルガンを所有してはいなかった。

大まかな知識はあるのだが、その構造を部品の一つ一つの形状に至るまで把握している訳ではない。雑誌で分解図を見た程度では、さすがに銃を丸ごと一挺、『設計』する事には無理が在った。

となると……

当然ながら、自分の知識内で可能な銃種を、狙撃銃として転用するしかない。

レバーアクションも、リボルバーも、実のところ、狙撃銃には向かない代物だ。

筒状の弾倉に縦に並べて弾薬を込めるというその構造上、先端の尖った高精度ライフル弾を装填出来ない――レバーアクション。

弾倉が薬室を兼ねていて、これが回転してしまう為、どうしても精度に限界が生じるリボルバー。

これ以外の銃で、ユキナリがかつてモデルガンを所有していて、構造を知悉していた銃となると――

「さて、上手くいけばいいけどな」

物見台の上に立って、ユキナリは呟いた。

彼の手には今、改めて試作された狙撃銃が握られている。だがくの人間が『狙撃銃』と言われて思い浮かべるものと、それは全長い銃身は勿論同じなのだが、機関部の形状と形式が違う。

何より――その銃身は、縦に二本、並んでいた。

「〈デリンジャー〉と狙撃銃じゃ、別物どころか真逆だしな」

形式としては上下二連――という事になるのだろう。

二本並べた銃身にそれぞれ一発ずつ弾を込め、ラチェットで上と下を交互に撃発する撃針を用いて、二発までは連続で撃てる。それ以上は、空の薬莢を排出し、新しい弾薬を装填しなければならない。

元々は〈レミントン・ダブル・デリンジャー〉と呼ばれる小型の、主にブーツやポケットに隠し持つ形式の銃が採用している方式である。ユキナリはこの銃のモデルガンも所有していた。

非常に単純な機構で信頼性が高く、銃身と薬室は一体化しているので、精度も比較的高く造りやすい。

いっそ単発式にしなかったのは、狙撃に失敗した際に、連発式なら立て続けに撃つ事で、何とか目的を達成する事も出来るかも――と思ったからだ。

散弾銃にはこの様な上下二連形式の銃も存在するが、狙撃銃としては、ユキナリが知る限りこの形式のものは存在しない。ボルトアクションという定番の形式が存在するので、試作する必要すら無いのだろう。

銘は〈デールリンガー〉――〈Derringer〉とした。

元々〈デリンジャー〉と呼ばれる銃の多くは、商標権の関係で本来の人名たる『デリンジャー』の綴りに『r』を一つ足した〈Derringer〉と表記される。その〈デリンジャー〉

の魔改造とも言うべき狙撃銃という事で、更に一つ『r』を足した感じだ。

ともあれ……

「……」

ユキナリの背後には、ダーシャと、そして狙撃銃に強い興味を示したヴェロニカ、それに付き添いのベルタが居る。ウルリーケもついてくると当初は言っていたのだが、彼女には別に頼みたい用事が在ったので、別行動となった。

物見台は、前述の通り、元は地神の儀式を見守る為だけのものである。此処で暮らす様な事は無いし、そもそも使われる事そのものが数年に一回だった為、最低限の雨風が避けられる程度の粗末な小屋が、高めに組んだ櫓の上に在るだけの代物だ。

「それじゃいくぞ」

ユキナリは、予め手配して運び込んでおいて貰った土嚢の上に、〈デールリンガー〉の銃身を載せる。今回は試作という事で、二脚を用意していない。安定した射撃の為には、膝立ちの姿勢を取り、光学照準器を覗き込む。

こちらの仕上がりは上々だった。神殿周辺の様子がよく見える。

打ち合わせ通り――ウルリーケの姿も見えた。

神殿の近くにある、開けた広場状の場所。その傍にある木の陰から顔を出し、こちらを見ている。開けた広場の中央には、妙なものが立っていた。

等身大の――人形だ。

それっぽい形になるよう大雑把に枝を払っただけの適当な丸太である。

ウルリーケが別行動なのは、この標的人形の設置と回収、そして着弾の確認を頼んであるからだ。

「ダーシャ、合図、頼む」

「……ん」

ダーシャが〈レッチリ〉を空に向けて一発撃った。

これが開始の合図だ。

〈レッチリ〉の銃声が聞こえたら、物陰から出るなとウルリーケには伝えてある。逆に二発続けて撃てば、一時中止、の合図である。

「……」

ユキナリは光学照準器の中に描かれた十字線を人形に合わせる。

息を止めて――第一射。

轟音。

〈レッチリ〉のそれとは桁違いに大きく鋭い銃声が、辺りに響いた。

〈デュランダル〉や〈レッチリ〉の使用する弾薬は44マグナム――拳銃用の弾薬としてはかなり強力だが、さすがにライフルに使われるものは、火薬量が随分と違う。

だが――

「……外れ」

ユキナリは呟く。

超音速で撃ち出される弾丸の軌道を見切るのは如何にユキナリの眼でも不可能だが、標的の右側で土煙が舞うのが見えた

「うーん……」

ユキナリは唸った。

頭や心臓の位置といった極小さな場所への狙いが外れたという事である。

捉える事すらできなかった、という訳ではなく、人間大の枠を第二射――も外れた。

念のため同じ狙いで撃ってみたが、やはり狙いの右側に着弾したようである。

着弾点が散らばらない所を見ると、銃そのものの精度は悪くない様だ。

後は風や湿度の影響も考えられる。だがいずれにせよ命中できなければ意味が無い。何十発か撃ち込んでみて、照準を調整、更に風やら何やらを読む経験を身につけなければならないだろう。

「ダーシャ、お前もやってみるか？」

それまで大人しく見ていたダーシャを振り返って訊ねる。戦闘に出ることができないダーシャにこそ狙撃銃は必要となるだろう。

「結構難しいぞ」

「……任せ、て」

そう言うダーシャの表情はそこはかとなく得意げである。ユキナリ以外にはいつもの無表情にしか見えないだろうが。

ユキナリに合わせていた作業台はダーシャには少し高すぎるので。なので近くにあった椅子に彼女を座らせた上で、構えさせた。

「……」

何度か、構えては外しては繰り返して、しっくりくる形を探る。

満足いったところでダーシャは光学照準器を覗き込み、狙いを定め、引き金を絞った。

第一射。

ユキナリは予備の光学照準器を取り出し、これを覗いて着弾点を見る。
人形は変わらず五体満足の状態で立っている。どうやら外れた様だ。
近距離であれば、振り上げたヴェロニカの剣に速射で命中させるダーシャでも、さすがに長距離狙撃、しかも初めての銃となると勝手が違うのだろう。当たり前の話だ。
狙いをつけ、第二射。
やはりこれも外れた。
「……む」
ダーシャはレバーを引いてストッパーを解除――銃を斜めに傾けて、銃床を折り、薬室を開放、中の薬莢を取り出すと新たな弾丸を装填する。銃床を元に戻してダーシャは再び〈デールリンガー〉を構えた。
「ん……」
やはり微妙に扱いにくいと感じるのか、眼鏡の下で眉間に縦皺を刻むダーシャ。
本来ユキナリの『前世』の世界において、中折れ式の上下二連――この型の狙撃銃が存在しないのは、この為である。
銃床を下に向けて折る事で薬室を開放し、装填、排莢をするこの機構は、どうしても照準器から眼を離さねばならなくなる。またその際にどうしても銃本体が大きく動くので、

銃口も動いて照準がぶれる。その度に改めて照準器を覗き込み、撃たねばならない。

〈レッチリ〉の様に二脚を付ければ安定はするが、やはりそうなると装填と排莢がしにくくなる。この上下二連方式の銃や、〈デュランダル〉の様なレバーアクション形式に、狙撃銃が殆ど存在しないのは、『操作する上で、どうしても銃の下に空間が必要になり、二脚を用いた伏せ撃ちに適さない』からだ。

ちなみに……ダーシャは銃を傾けて銃床を折る事で、装填・排莢の際に銃口の向きが変わってしまうのを極力防いでいるが、〈レッチリ〉に慣れた彼女にしてみれば、これも面倒な操作に感じるのだろう。

〈レッチリ〉とは仕組みが全く違うのだが、組み立てているユキナリの横でずっと彼女はこの〈デールリンガー〉を見ていたので、操作法はいちいち教えなくても理解している。

ともあれ――

「……」

第三射――外れ。

「うーん。やっぱり難しいか」

今日のところは感触を掴むだけで充分だろう。感想を聞いてみようかと一歩近づいたユ

キナリの目の前で、ダーシャは無言のままもう一度、発砲。そして外す。

排莢。

装填。

撃つ——外す。

即座に次弾を撃つ——外す。

排莢。

装填。

撃つ——外す。

即座に次弾を撃つ——外す。

……

「あ、あの、ダーシャさん……？」

まるで停止装置が壊れた機械のように、ダーシャは同じ動作を延々と繰り返す。

しかも無言だ。勿論、元々口数は少ない少女なのだが、今は何か彼女の背中から陽炎の様なものが立ちのぼっているようにも見えて——これはちょっと怖い。

「……思ったより、難し、いてから、ようやく銃から身を離しダーシャはそう評した。

結局、三十発ばかりを撃っ

普段より三割増しくらい、憮然とした表情である。これもまあユキナリ以外には見分けがつかないだろうが。

どうやらご立腹の様だったが、あれだけ撃って一発も命中しないことが腹立たしいのだろう。元々生真面目で、その反面やると決めたことをきっちりとやり抜かないと気が済まない性格である。

まして……狙撃は、眼が見えるようになった事で、改めて身についた技術だ。ダーシャにとっては眼が見えるようになった事の証――象徴でもあったのかもしれない。自分が狙撃に長じているという事には、彼女なりのこだわりがあったのだろう。

「まあ、試作品だから」

とユキナリはダーシャを宥めつつ、ふと、『前世』で読んだ本の内容を思い出していた。

優秀な狙撃手は、まず第一射目を外さない。

だが人間であれば絶対はない。だからもし外したとしたら、標的が人質をとって立て籠もっている籠城犯の場合なども、一発目に素早く第二射を撃ち命中させなければならない。標的が隠れてしまわない内れずに二発目を撃ち込む事が肝要――なのだそうだ。

いずれにせよ、外した事で動揺したり、いちいち機嫌を悪くしたりする人間に、狙撃手

は向いていない。いちいち指摘すると更にダーシャの機嫌が悪くなるのは分かっているので、勿論口に出しはしないが。

「私も、良いか？」

それまで大人しく待っていたヴェロニカが口を開く。興味を持っていた様子だったから、ユキナリとダーシャが試射を終えるのを待っていたのだろう。

「ああ、構わないよ」

そう言ってユキナリは〈デールリンガー〉を手渡した。

「扱い方は……」

今まで銃に触れた事がないだろうヴェロニカの為、簡単に扱い方を教えてやる。

だが、最初から試射に参加するつもりで二人の様子を見ていたのだろう。一通り説明しただけでヴェロニカは扱い方を理解した様だった。最初に装填、撃鉄起こし、射撃、そして排莢――と一連の動作を弾薬無しでやらせてみたが、全く問題が無い。

相当な呑み込みの速さである。

だが――

「……む」

やはり外れた。

二発目、そして再装填を経て三発目、四発目……最終的に十発ばかり撃ったが、どれも標的をかすりもしなかった。

「弓なら得意なのだが……おかしいな」

と眉を顰めて悔しげに呟くヴェロニカ。

武芸全般に自信が在ったらしく、ダーシャ程ではないが、全く命中させられない事に納得がいかない様子である。弓と銃は全く違う代物なので、ユキナリとしては、別に不自然でも何でも無いと思うのだが。

結局、三人試して命中はなし。結果としては芳しくない。ただ……合計で五十発以上撃ってみたが、不発は無く、射撃そのものに何か不都合は生じていない。作動の確実性という意味では充分に合格だろう。広い範囲に散っている訳でもない。着弾の様子を見てもそれ程、こうなると……もう精度というよりは、撃つ者の技術や適性の方を考えるべきかもしれなかった。

「練習あるのみ……かな？」

そう呟いて撤収準備に入ろうとしたその時。

「お前もやってみるか？」

と――いきなりヴェロニカがそう言って〈デールリンガー〉を差し出した。
相手は、驚いた事にベルタである。
「へっ!?　わ、私、ですか!?」
まさか自分に話が来るとは思っていなかったベルタは目を白黒させていたが……
「あ、あの、ユキナリ様？」
と、救いを求める様にユキナリの方を見てきた。
「まあ、やるだけやってみるのもいいんじゃないかな」
ユキナリは苦笑しながらそう答える。
弾はあと数発残っていた。わざわざとっておく意味は無い。
ナリが能力で造れば良いだけの事だ。
「ユ、ユキナリ様が、そう仰るのでしたら……」
そう言って、おっかなびっくり、といった感じにヴェロニカから〈デールリンガー〉を受け取るベルタ。思ったより重かったのか、ふらつく彼女をユキナリは後ろから肩を掴んで支えた。
「大丈夫か？」
「あ、はい、なんとか……ありがとうございます」

そう言って赤面するベルタをダーシャ同様、椅子に座らせ、簡単な使い方を説明して――構えさせる。当然その動きはダーシャに比べてぎこちなかった。

「それじゃ、撃ってみて」

そう告げて――待つ。

実を言えば、ユキナリとしては、別の意味でベルタの試射に興味を持っていた。

戦いにおいて、ユキナリが前面に出る事が多いのであれば、ではなく、他の人間に託すことになるだろう。

アーロン達の中から、また誰かを選んで持たせるという事も考えられるが、もし他の宣教騎士団と戦闘になった場合は、さすがにアーロン達を戦力として当てにするのは難しいだろう。改めて〈デュランダル〉を取り上げておく必要すら、あるかもしれない。

ならば街の人間から狙撃手を見繕わねばならない。

この場合――ダーシャの様に既に銃器を扱い慣れている人間ではなく、ヴェロニカの様に武芸に通じている訳でもない人間、が対象になる。武器類に全く慣れていないベルタに試してもらえれば、今後、そうした『素人』相手に使いやすく改良していく上で、役に立つ意見をくれるのではないか。そんな期待をしていたのだ……が。

――銃声が轟く。

「うん、撃てたな。じゃあまた狙撃銃は、どんな感触だったか、その辺りから聞いていこ生まれて初めて触って撃っうとしたユキナリの目の前でベルタは眼を瞬かせて――言った。

「あ、当たりました」

「はあっ!?」

驚いて、ユキナリが光学照準器を取り出し神殿の方を見る。人形は……頭部にあたる部分に風穴があいていた。

「……信じられな、い」

ダーシャは自分の〈レッチリ〉に搭載されている光学照準器で結果を確認する。彼女もまた同じものを確認出来たのか、『うっ……』と短く呻くのが聞こえた。

「え、えっと、あの」

ベルタはおどおどした様子でユキナリやダーシャの顔色を窺っている。何か自分がまずい事をしでかしたのではないかと不安になったのだろう。

「ベルタ、もう一度だ。やってみてくれ」

まさかとは思いながらもユキナリは促す。

「え、あ、はい。あの、いいんでしょうか？」

ベルタは確認しながらもう一度、〈デールリンガー〉の照準器を覗き込む。

そして――射撃。

今度は外れた様だ。一発目は単なる偶然だったのか、あるいは二発目はユキナリが驚かせてしまったから、動揺でもしたのか。

だが……

「あ、外れてしまいました」

と、むしろほっとした様子でベルタが言う。

ダーシャのように悔しがったりはしない。冷静というより、無欲というか――喜怒哀楽の波が小さいのかもしれなかった。

しかしユキナリは改めて照準器で着弾点を確認する。

「……」

確かに外れた。外れた点は殆どずれてはいない様だ。しかも一発目の着弾で少し人形は揺れている。命中は桁違いに難しくなっている筈だった。

「……大したもんだな」

ユキナリはそう評した。

もし最初と同じ大きさの藁人形を用いていれば、命中していたかもしれない。

「あ、ありがとう、ございます」

ベルタは今ひとつ、自分がやったことの意味はわかっていない様だったが――少しはにかむ様な表情を浮かべてそう言った。ユキナリに褒められたのが嬉しいらしい。

（案外……）

ふとユキナリは思う。

狙撃とは忍耐を問われる作業だという。

石の様に動かず、待って、絶対に外さない一瞬を待ち続ける。

動いて斬り込み、相手の構えを崩して隙を作り出すような、戦う相手は敵というよりは――自分自身。

で正反対だ。また乱戦の最中に動く目標を狙う様な近距離での射撃とも異なる。

（ベルタには才能があったりするのか？）

そう考えつつ、改めて自分に捧げられた巫女の少女を眺めるベルタは、不思議そうに土嚢の上の〈デールリンガー〉をたかだ、見つめていた。

〈デールリンガー〉の試射を終えたユキナリ達は、一旦フリートラントに立ち寄り結果をフィオナに報告し、食事を振る舞われた後――神殿に帰ってきた。

神殿で待っていたウルリーケに礼を言った後、ユキナリは早速いつもの広間に陣取って〈デールリンガー〉の分解整備を始めた。

元々参考にした銃とほぼ同じ使い方をしている〈デュランダル〉や〈レッチリ〉と異なり、小型拳銃である〈デリンジャー〉を狙撃ライフルに拡大するなどという出鱈目な使い方をしているので、耐久性その他の面で問題が生じるかもしれない。これを点検確認する為の作業だった。

今日使った〈デールリンガー〉のみならず、予備に造っておいた部品も並べて変形や欠損が無いかを確認していく。問題が無ければ試射と射手の練習の効率を上げる為、三挺ばかり〈デールリンガー〉を組み立てておく積もりだった。

「……特に問題は無い様に思えるが……けど」

広げた布の上に並べられた〈デールリンガー〉の部品。

その大きさに比して点数は意外に少ない。一番大きいのは銃身で、その次が銃床、続いて機関部の筐体（フレーム）、そして銃把のパネルといった所か。光学照準器を別にすれば全部で三十も無いし、三分の一がネジやバネの類いである。

「後々試射しやすい様にレールでも付けるか……？」

そんな事を呟きながら、ユキナリは三挺の〈デールリンガー〉を組み立てていく。

その様子を――すぐ傍（かたわ）らで興味深そうに見つめるヴェロニカの姿が在った。

彼女はベルタと一緒（いっしょ）に神殿にやってきた。自分が居ない事で、神殿の掃除（そうじ）と炊事（すいじ）と洗濯（せんたく）といった仕事が滞（とどこお）っているのではないか、と心配したベルタが一旦、神殿に戻（もど）る事を提案してきたのだが……その際に、ヴェロニカも一緒に行くと言い出したのだ。銃の事もだが、それよりも何よりも彼女は、ユキナリという『神様モドキ』に興味を持ったらしかった。

「……で」

二挺目の〈デールリンガー〉の組み立てに入りながら、ユキナリは水を向けてみた。

「何か、話があるんじゃ無いのか？」

「狙撃銃、だったか」

ヴェロニカは改めてユキナリの向かいに腰（こし）を下ろしながら言った。

「〈デールリンガー〉……試しに造ってみたから、使い勝手が分からない、などと言って

いたが。するとお前の普段持ち歩いている、〈デュランダル〉と勝手が良いのか？」

「まあ……そう、かな」

ユキナリは少し考えてから頷いた。

実を言えば〈レッチリ〉、そして〈デールリ〉、〈デュランダル〉の場合、最も武器として扱い易いのは間違いなく〈デュランダル〉である分、簡単に見えるかもしれないが……拳銃というのは小銃や騎兵用小銃に比べて、標的に当てるのが難しい。小さい分だけ照準作業が安定しないのだ。昔の軍隊では拳銃はあくまで士官の護身用、戦闘で使う銃の基本は小銃、という場合も多かったのは、この為だ。

ダーシャが〈レッチリ〉を使っているのも、元々は護身用として彼女の鞄に無理なく入る銃を、と考えてユキナリが与えただけで、彼女があんなに使いこなす様になるとは、造ったユキナリも想像していなかった。

「ならば〈デュランダル〉を譲って欲しい。出来ればその……一緒に、出来るだけ数多く」

「……アルドレイルに戻るつもりだって？」

「弾」だったか？　それも

ユキナリは手元に視線を注いだままそう問うた。
「そうだ」
「仲間を助ける為に？」
「そうだ」
淀みなく答えていくヴェロニカ。
ユキナリは少し間を置いてから――更にこう問うた。
「……もし仲間がもうとっくに処刑されていたら？」
「仇を討つ」
やはりヴェロニカの答えに一瞬の逡巡も無い。
「その為にも私には武器が必要だ。剣は折られてしまったしな」
「……それを言われるとこっちも断りづらいが」
と苦笑するユキナリ。ヴェロニカの剣を折ったのはダーシャだが、彼女の行動は基本的に保護者であるユキナリの責任――と考える事も出来る。
「お前も、止めるか？」
「……どうだろうな」
ユキナリは顔をしかめて言った。

復讐など無意味だ、と諭しに掛かるのは簡単だが、ユキナリの立場には無い。イルジナを殺された際、怒りに駆り立てられ手に暴れ回ったからだ。結果的に何人を殺したのか、数えていからない。もしイルジナに『ダーシャを頼む』と言われていなに留まって、教会関係者を殺し続けていただろう。

「復讐……仇討ち……まあ、むしろ自分に言い聞かせる様にユキナリは言う。復讐で得られるのは、あくまで自分の満足だけだ。それが何よりも大事だとするのであれば、復讐は充分に意味が、物質的に得られるものは何も無い。本当に何も。時間と労ものだろう。少なくともユキナリはそう思う。今だからこそ、「その為に自分が死んでも構わないとまで思い詰めるのは、何己満足の為に死ぬのは、さすがに無駄っぽいというか」

「自己満足？」

眉を顰めてヴェロニカは言った。

「自己満足だけでそんな真似をする程、私は酔狂ではないぞ」

「いや、しかし仇討ちとか自己満足以外に何も無いだろ？　何処かから報酬が出る訳じゃなし、殺された連中が喜ぶ訳でもなし……実利が無いっていうか」

「実利が無いと？　ふむ……」

ヴェロニカは興味深そうに――〈デールリンガー〉からユキナリに視線を移した。

「ユキナリ、お前はどんな国でどんな風に育ってきたのだ？」

「何だよ、いきなり？」

ユキナリも手を止めてヴェロニカの方を見る。

「いや。怒らないで聞いて欲しいのだが。お前は、きっと育ちが良いのだろうと思ってな。あるいは余程よく治められた、平和な国なり街なりに居たのかと……」

「……？」

「ごく当然の理屈だぞ」

ユキナリの顔を覗き込む様にしてヴェロニカは言った。

「戦わずに屈すれば、相手はこちらを舐めてつけあがる。暴挙に相応の報いが無ければ更に増長する。人間とはそういうものだ。復讐は次の悲劇を防ぐ為の威嚇としては十二分に利があるぞ。自分達に手を出すと痛い目に遭うぞ、という脅しを出すと相手も次からは戦う事を躊躇する」

「それは……」

「戦わずに平和なのが良いのを厭うていては、平和などそもそも手に入らない」

「……」

「――ああ」

ふとヴェロニカが表情を緩め苦笑する。

「傭兵が何を偉そうにと思われるかもしれんが。私も、生まれた時から傭兵だった訳ではないからな。今まで生きた経験に基づく、私なりに手に入れた結論だ」

「……ヴェロニカ。あんたの方こそ、実は育ちが良かったりしないか？」

「何故そう思う？」

「結構、教育受けた人間の考え方だろ、それは。話に明確な論理性がある。それに使う言葉も、言い回しも、ちょっと難しめのものがちらほら交じる」

ユキナリは組み立て終えた二挺目の〈デールリンガー〉を空打ちしてきちんと動くのを確かめながら言った。

「……確かに、悪くはなかった、のだろう。何年も前に、私の実家は、父と共に滅んでしまったが。父は強かったが、優しい方でな。だから、舐められた」

「……」
「だが……」
ふと何かを懐かしむ様な表情がヴェロニカの顔を過る。
「私から見ればお前は平和ボケの世間知らずに見えるが、そうそのものは、嬉しいのだ。父よりももっと早くに他界してしまった方だったものでな」
「それは……」
ユキナリは適当な言葉を探してみたが、見つからなかった。
「……苦労してきたんだな、あんた」
「お陰様で、それなりにしぶとく生きる力が身についたが」
そう言って、ヴェロニカは笑った。

●

ベルタとヴェロニカは、そのまま神殿に泊まる事になった。
ユキナリが〈デールリンガー〉について一通りの作業を終えると、外は完全に日が落ち

ていて、フリートラントに戻るのは危険だったからである。山道は足を引っかける障害物も多く、曇り空で月明かりが無い様な日は、手持ちのランプでは足下がどうにも心許ない。

ベルタは数日振りに自分の部屋に戻って、自分のものとは別に寝床を用意した。

元々神殿は客を迎える様には出来ておらず、予備の部屋は在るものの、そこは今、ウルリーケが居る。ヴェロニカも個室にはこだわらないという事で、ベルタにあてがわれた部屋に一緒に泊まる事になったのだ。

寝台を今から用意するのは無理という事で、シーツと毛布を重ねて作った一時しのぎの寝床を作る。床に直接敷くのは木の板を敷いておいた。

「……悪いな」

丁度——寝床が出来上がった所でヴェロニカが部屋にやってきた。

彼女は部屋の中を一瞥すると、何の躊躇も無く出来たばかりの寝床の脇に荷物を置いて、身体に着けていた防具も外すと、そのまま彼女はさっさとその寝床に入ってしまった。

「あ、あの……」

ベルタが困惑していると、木の板を敷き、毛布を重ねたといっても、神殿の中の在りものを集めただけ……急拵え

の代物で。寝心地が良い筈もない。こちらはベルタが自分で使う積もりだったのだが――

「なにか？」

ヴェロニカが怪訝な表情を浮かべて問うてくる。

「あ、いえ、どうせならこっちの寝台で……」

「いや、いい。野宿の類いには慣れている。身体を伸ばして横になれるなら充分だ。毛布もある。居候の身でこれ以上の贅沢は望まんよ」

「はあ……」

苦笑を浮かべてそう言われては、ベルタとしてもそれ以上、仕方なく自分の寝台に潜り込むと、一言、ヴェロニカに断ってランプの灯りを消した。

途端、部屋の中を濃密な闇が満たす。

顔の傍に持ってきた自分の手すら見えない様な――濃密な黒。

いので、自然と耳の方が敏感になる。自分の息遣いと、鼓動と、それから、すぐ近くに居るヴェロニカの息遣い、そして寝返りをうつ際の衣擦れの、音。眼で何も見る事が出来な

「……」

今日に限ってはどうにも寝付けない。

闇の中で眼を閉じて眠りに就くのはいつもの事だし、誰かと同じ部屋で眠るというのも、孤児院時代には当たり前だったのだが――

「……眠れないのか？」

ふとヴェロニカの声が闇の向こうから漂ってくる。

さっさと寝てしまったのかとも思ったが、未だ起きていたらしい。

「あ、はい」

「……一つ、尋ねても良いかな？」

唐突にそんな事を言ってくるヴェロニカ。

「え、ええ、私に答えられることなら……」

「あのユキナリという青年が好きなのか？」

「はい」

即答するベルタ。

だがヴェロニカはむしろそれが気に入らなかったらしい。

「いや。そうではなくて」

「え……？」

「敬意を抱いているとか、仲間としての連帯感とか、そういうものとは別だ。端的に言え

ば男である彼を、女であるお前が、慕っているのか、という問題なのだが」

「……」

ベルタは言葉に詰まる。

意味がよく分からない。

「私はユキナリ様に捧げられた巫女で――」

「そうだったな。そしてそれにも拘わらずユキナリはお前に手を出さない――そう言ってしまうと、お前個人に興味が無いという訳でもない様だが、そうなのか、あるいは、あのダーシャという娘に義理立てしているのか」

「……それは」

「あるいはダーシャに義理立て――いや遠慮しているのは、お前自身か？」

「……」

今まであまり意識した事が無かったが、そうなのだろうか。

「お前がユキナリを慕っているのは、それが巫女の役目だからか？　それならば――それだけならば、むしろ問題は無いのだがな。ユキナリがお前を求めてこない以上、義務や恩返しで彼に抱かれる必要は無い」

「そ……そうなんでしょうか……？」

「だが女として彼を慕っているのであれば、それでは満たされないだろうな」

「……」

「このままで良いと思うのか、それとも良くないのか。いつまでもダーシャに遠慮していてはユキナリの気持ちを得る事は出来ないが、それで良いのか。聞こえは悪いが、何かを得ようと思えば、戦って奪い取る事が必要な場合も在る。勿論、これはダーシャを排除しろという意味ではなく、お前の、気持ちの問題だが」

「よく……分かりません……ごめんなさい……」

そう咄嗟に答えてしまった自分が居る事に、ベルタは気付いていた。

だがヴェロニカの言葉に頷いている自分が居る事に、ベルタは気付いていた。

義務でもなく、恩返しでもなく、純然とユキナリの寵愛を得たいとベルタ自身が思うのならば、ただ待っているだけではいけないという事だろう。

だが……そもそもしがらみが全く絡まない、純然たる自分の気持ちというものが、ベルタにはよく分からない。

物心ついた頃から、いつか結ばれて、子を産んで、育てて……そんな未来は自分には来ないと教え込まれて育った。

自分は地神に捧げられるのだと——街の他の少女達と異なり、男性といつか恋をして、

にしてきたのだ。

なのに、唐突に『お前は誰かをお前の欲望の対象として好きになっても良いのだ』と言われると戸惑ってしまう。自分から何かを求める事が許されてこなかったベルタには、それはひどく悪い事の様にすら思えてしまうのだ。

しかし……

（ユキナリ様――）

ユキナリは優しい。本当に優しい。

彼がベルタを助けなければ。彼が神の立場に立たなければ。

それでも、ベルタは彼に身を捧げたいと思っただろうか。

成り行きではなく、必然の結果として、彼の傍に居たいと思っただろうか。

多分――思っただろう。その感じる。

ならばこれはベルタの、彼に対する恋であり、愛であるのだ。

ったとしても、その自覚が在った瞬間からそれは恋や愛になり得る。

積極的に、自分から、彼を求めても良いのだ。

とはいえ……どうやって？

自分には何が出来る？

フィオナの様に頭が良いという訳ではない。ダーシャの様な知識も無ければ、ユキナリ

と過ごしてきた日々の積み重ねも無い。ウルリーケの様に絶対的な力を持っている訳でもない。彼女等を押し退ける積もりは無いとしても、このままならばベルタは他の少女達の中で存在が埋もれてしまう。

「何もせずにじっとしていればうまく回るというのは勘違いだ。身を以てそれを知ったときには手遅れという場合も、在る」

ベルタの内心を見透かしたかの様にそんな言葉を重ねてくるヴェロニカ。

彼女の口調は重く、それでいて――何処か遠くを見遣りながら口にしているかの様な、虚ろな響きが在った。恐らくはヴェロニカ自身の経験に基づく言葉なのだろう。そしてきっと彼女はその事を引きずっていて――何もしなかった、出来なかった自分を後悔しているのだ。

「……もう沢山だ。誰かを見捨てて逃げるのは」

ふとそんなヴェロニカの言葉が脳裏を過る。

「……少々、御節介が過ぎたか」

少し口調に苦笑じみた響きを滲ませて、ヴェロニカがそう言ってきた。

「色々世話になって、感謝している。礼と言うにはささやかに過ぎるかもしれないが、何かの助けになればと思う。不愉快だったならば、流れ者の戯言と聞き流してくれ」

「いえ、そんな事は……」

「今度こそ本当に、おやすみだ」

「はい、おやすみなさい……」

そう言って再びベルタは眼を閉じる。

夜と、瞼と、二重に己を包む闇の中で、彼女は、ヴェロニカの『御節介』について、何度も繰り返し考え続けていた。

●

朝――このところ目覚めはいつも最悪だ。

自分が生まれ育った屋敷のそれとは、比べものにならない位にみすぼらしい部屋に居る自分を確認せねばならない。宣教騎士団に入ってからの宿舎と比べてさえ段違いである。

すきま風は入ってくるわ、夜は暗いわ、寝台は軋むわ、毛布は薄いわ。家屋というより倉庫の中だ。実際――元々は倉庫だった建物だそうだが。雨風がとりあえずいくらかでもし

のげるだけ野宿よりはましといった程度でしかなかった。

どうしようもない。本当にどうしようもない程に惨めである。

これだけは以前と変わらないシャツを――教化遠征の際に着替えとして多めに馬車に積んであった――身につける。と、ようやく人心地がついた。

「……」

頭の中で今日の仕事について考える。

ロストルークへの物資の輸送が行われる際にはこれに護衛として同行する。それ以外の日は基本的にフリートランの周辺を見回り、治安維持に努める。これが基本だ。前者はともかく後者は元々想定されていた仕事なので異論は無いが……街の連中の自分達を見る眼に、畏怖や敬意が無いのが不満と言えば不満か。

しかも日によっては野良仕事に駆り出される事すら在る。実を言えばこれが最も堪えた。

宣教騎士団で身体を鍛えてはあるが、戦闘と農作業では根本的に身体の使い方が異なるので、身体が予想外の疲れ方をする。慣れない作業で節々が痛むのは勿論、しかも少しでも手間取っていると遠慮無く街の住人は怒鳴ってくる。貴族に生まれたるなど、此処に来てから初めて経験した。

「私は騎士だというのに！」

そう不満をこぼしても誰も取り合ってくれない。精々が仲間内で愚痴を言い合う位だが、宣教騎士の中でも貴族出身者は少ないので、現状に節操なく順応している者もおり……真に不平不満を共有出来る者は殆ど居なかった。

とはいえ……

人間の身体というのは恐ろしいもので、不本意極まりない生活でも、日々を暮らしていく内に順応しつつあるのが自分でも分かった。たまに孤児院の少女達がやってきて労いの言葉を掛けてくれるのが、さやかな……しかし目下最大の楽しみである。一年前の自分が見たらこの落ちぶれ振りを何というだろうか。

そんな事を考えながら、小屋を出て、通りを歩く。

すると――

「精が出るわね、アーロン」

声をかけられた。

彼が――アーロン・ランズダウンが振り返った視線の先には、フィオナ・シリングスが、お手伝いらしい女を一人従えて立っていた。

「こんな朝早くから巡回？」

「……む」

フィオナとは、王都の学院に居た頃からの知り合いだ。

学院にいた頃から、頭が良い代わりに、妙に気が強くて生意このフリートラントで再会してからは、その尊大さに磨きが掛当にどうしようもない女だった。

「最近はこの街の為に働くのにも慣れてきた？　孤児院の子達行っている様だけど、変な事は教えてないでしょうね？」

とフィオナがアーロンの顔を覗き込んで尋ねてくる。彼女にりだったのかもしれないが、アーロンはそこに揶揄するかの様た。

「げ、下品な女だな！　どうしようもなく下品な女だ！」

「何怒ってるのよ。今の会話の何処に品性に関わる言葉が？」

だがアーロンの怒りを余裕の態でフィオナは受け流している

「労った積もりなのだけど」

「あの様な幼子に手を出す趣味など持ち合わせていない！」

「手を？　――何言ってるの。私は教会の聖典を暗唱させたり、偏った考え方を詰め込ん

だりしてないでしょうねって話をしてたのだけれど。下品なのはどっちよ」

「くっ……？」

確かに勘違いしたのはアーロンで言い返す隙は無い。

だがフィオナの歳に似合わぬ悠然とした態度が、どうにも気に喰わない。自分の現状と相まって馬鹿にされている様に感じてしまうのだ。

「ね、労っているというのなら、言葉ではなく、まず態度で示せー！　まずはあのボロ小屋を何とかしろー！」

「豪邸でも建てろっていうの？」

苦笑を浮かべてフィオナは言う。

「一体何様の積もり？　オッムの方はまだ眠っているの？　寝言は寝て言うものよ」

「……」

黙り込むアーロン。

昔からそうだった。この少女は頭の回転が速くて妙に弁が立つ。過去に何度か口喧嘩をした事があるが、勝てた例が無かった。

「ほら、さっさとお行きなさい。せっかくの早起きが無駄になってしまうわよ」

「……ふん」

これ以上関わっても、不愉快さが膨れ上がるだけだ。多少は不本意でも、さっさと仕事に出掛けるに限る――とアーロンが歩き出すと、フィオナの声が背後から追いかけてきた。

「でも、感謝しているのは本当のことよ。今日の仕事が終わったら甘い物でも用意させておくから、楽しみにしてなさい」

「……」

勝手に緩みそうになる頬を意識して引き締める。フィオナなど、宣教騎士として――というのだが、念の為。

甘い物一つで手懐けられる単純に飼い慣らされたりはしないのだ、とアーロンは自分に言い聞かせた。

飴と鞭を使い分けている積もりかもしれないが、宣教騎士より大人としての沽券に関わる。フィオナにしてみれば

そう。自分は宣教騎士アーロン・ランズダウン。

結果として今は、このフリートラントで下働きの様に使われる訳ではない――背信者になった訳ではないのだ。

リス真教会の教えに背いていない事は、概ね、当初の予定と変わってアーロン達がしている事は、

実際、このフリートラントで屯する騎士団として、街を守る。

いない……筈だ。この地に駐

支配していた地神は先にユキナリによって斃されていた為、宣教騎士団の目的の半分は既に果たされているも同然だった。多分。きっと。

強いて問題を挙げるとすれば、守護聖人像をユキナリに破壊された事だが――

「仕方ない。あれは仕方の無い事だ」

自分に言い聞かせる様にアーロンは呟く。

自分達が遠征してきた先に、まさか、〈蒼い御遣い〉が居るとは思わなかった。元々〈御遣い〉は布教の戦闘能力が守護聖人像を凌駕するという事も、想定外だった。守護聖人像を〈御遣い〉と戦わせるという発想自体がアーロン達には無かった。際に奇跡を示してみせる為の道具で、戦闘に使われるものではない。守護聖人像を〈御遣いの相手に――どうしようもない。

とにかく、不測の事態であっても勝てそうにない相手に立ち向かうなど、馬鹿の所行である。だから自分は賢く振る舞っている。自分自身を守り、一士団の本来の使命を、少しでも果たせる様に――表面的にでも善の選択である。

これが現状で取り得る最連中に従ってみせている。

アーロンは自らにそう言い聞かせた。

そして――

「――た。……い、聞いているのですか!?」

「……!?」

突然声を掛けられて――我に返る。

慌てて周りを見回すと、そこはもう街の外だった。

昼間は幾つかの街門が開けられていて、比較的出入りしやすくなっている。考え事をしながら歩いていたアーロンは、そのまま宣教騎士の仲間達と合流する事無く、街を出てしまったらしい。門衛達も、アーロン達がユキナリに頼まれて警備の巡回をしているのは知っているから、見かけても止めなかったのだろう。

ともあれ――

「アーロン・ランズダウン?」

改めて名を呼ばれる。

目の前に居たのは――一人の女騎士だった。板金鎧無しの軽装だが、各所に宣教騎士団を示す意匠を縫い込んだ服を着ている。年齢は二十歳前後といったところか。未だ若いのに三人の騎士を従えている――

(そういえばこの女の年齢を聞いた事が無かったな)

頭の片隅でそんな事を考えるアーロン。
宣教騎士団には有力貴族の子弟も入団する事が多いため、若い女が高めの役職に据えられる事も珍しくなかった。というかアーロンも年齢の割に高い地位に居るのは、貴族の子弟であるからだ。
「お、おお、久しいな、アンジェラ・ジンデル」
自分は宣教騎士だ。
そう己に言い聞かせながらアーロンは慌てて姿勢を正し、その時期に宣教騎士団に入団した為に「箔付け」の為の入団とは思えない位に熱心なハリス真教会の信徒で、女だてらに同期入団者達を取り仕切っていた様な印象がある。
そういえば第九宣教騎士団の女騎士に応じた。
「そこの街は、フリートランド辺りに配属されたと噂に聞いていますね？」
アーロンの背後――そびえる街の壁を見ながらアンジェラはそう問うてきた。
「第六宣教騎士団が駐留している」
「お――おお。無論だ」
アーロンは内心の動揺を押し隠して頷いた。

「教化の進捗状況は如何ですか？」
「順調だ。我々に落ち度は無い」
「……？」
まるで言い訳をするかの様なアーロンの物言いに、一瞬、怪訝そうな表情をアンジェラは浮かべたが……それ以上は追及してこなかった。どうやら王都の教会本部から、アーロン達の、第六宣教騎士団の様子を調べに来た訳ではない様だが……
「なるほど。ならばフリートラントの街を案内していただけますね？」
「うむ、任せておけええええええ？」
「どうしました？」
「い、いや、何でも、何でもない」
思わず裏返った声を出してしまったが、慌てて表情を引き締めてそう言う。
「何故、またその様な事を……？」
「表面的に教化に従っていても、反抗分子を内部に抱えている街は意外に多いものです」
何処か自嘲じみた口調でアンジェラは言った。
「我々は人を捜しているのですが。前述の通り、辺境地の愚民にはこちらに非協力的な者も多いので、先に確認しておきたかっただけです。失礼をお許しくださいな」

「そ、そうか。気にせずともいいぞ」
背中を冷や汗が滑り落ちていくのを感じながら、アーロンは何とか宣教騎士としての態度を取り繕ってそう答えた。
屋敷の中が……にわかに騒がしくなった。
執務室でその日の仕事に励んでいたフィオナは、眉を顰めて顔を上げる。
「何……？」
治水工事や、新たに開墾した畑からどのぐらいの作物が獲れるか……ユキナリやウルリーケと相談して作った計算式に従い、予想を立てていたのだが、屋敷の中で騒がれると細かな計算に集中できない。
溜息を漏らしてペンを置き、立ち上がると――それを待っていたかの様に、ノックも無いまま執務室の扉が開かれた。
「な、何ですか!?　誰!?」
驚いてそう問うフィオナ。

相手は――宣教騎士団の衣装を身に纏った女だった。
鎧は軽装のものしか帯びておらず、アーロン達の様な男性騎士のものとは意匠が異なるが。王都に居た頃にフィオナは宣教騎士団の女性用衣装を見た事がある。
アーロン達の宣教騎士団に女性は居なかった様に思うが――
「貴女がこの街の長ですか？」
言葉こそ丁寧だが口調は尊大そのものだった。
ある意味この街にやってきた当初のアーロンとよく似ている。辺境の蛮族、とばかりに
フィオナやこの街の住人を下に見ているのは明らかだった。
「随分とお若いですね」
自分の事を棚に上げて女騎士は言った。
「どなたか知りませんが、失礼にも程がありますよ」
不躾に質問してくる輩を、笑顔でもてなしてやる義理は無い。
束の間、呆気にとられていたフィオナだが、相手の横柄な態度に顔をしかめてそう言った。宣教騎士だろうが教皇だろうが、ノックも無しに女性の部屋にいきなり踏み込んできた筈。引き渡しなさい」
「この街に傭兵が一人逃げ込んでだが女騎士は名乗りさえせず、ただ用件を突きつけてきた。

「傭兵……何の事でしょう？　ヴェロニカの事だろう。
この女騎士の言う傭兵とは、今、街の中に彼女は居ないのだが――果たして本当の事宣教騎士団に引き渡そうにいたアルドレイルに駐留するかどうか。それにこの連中は恐らくヴェロニカの言ってを言ったとしても、相手が信じるかどうか。それにこの連中は恐らくヴェロニカの言って
という事は――宣教騎士団の人間だ。
「心当たりが無いと？」
「在りませんね。もし在ったとしても、ノックの一つも知らない不作法な輩に教える義理はありませんが」
「おや。これは失礼？」
女騎士は肩を竦めて言った。思いの外、ノックの習慣を知っているとは思いませんでした。
「この様な辺境の蛮族が、教化は楽だった様ですね？」
肩越しに背後を振り返ってそう言う女騎士。
彼女の後を追う様にして、息を切らした状態のアーロンが顔を出したのは、次の瞬間であった。

「ジンデル……！」

そう女騎士に呼び掛けながら、アーロンはフィオナの刺す様な視線に気付いて、ぎょっと表情を強張らせる。

『何事なのよっ!?』

と、思い切り睨み付けてやる。

すると――女騎士の後ろで、口をぱくぱくと喘ぐ様に開閉しながら、アーロンは激しく頭を振ってきた。

『違う、違うのだ！　どうしようもなく違うのだ！』

とでも言いたいのだろう。多分。

その後、更に彼は訳がわからない身振り手振りで必死に何かを伝えようとしていたが、そんなもの、事前の打ち合わせも無いのに、読み取れる筈も無い。

「そうですか。まあ、傭兵は途中で野垂れ死んだのかもしれませんね。遺体を食い散らかす獣にも田舎は事欠きませんし」

女騎士は自分一人でそんな事を呟きながら頷いている。

どうもアーロン達が王都の教会本部に報告した嘘がばれて、別の宣教騎士団が派遣されてきた訳ではない様だが。

しかし――

「それはともかく、貴女達は何故聖印を着けていないのでしょう？」
僅かながらも気が緩んで出来たその隙にねじ込むかの様に女騎士はそう尋ねてきた。
「聖印ですか？」
尚も女騎士の後ろで愉快な踊りをしている――本人は身振り手振りの積もりなのだろうが――アーロンを睨みながらフィオナは大急ぎで適当な言い訳を組み立てていた。
「この街では、実は宣教騎士団の皆様がいらっしゃる前から、教会の熱心な信徒が多かったのです」
「あら。そうなのですか？」
「ええ。私はそちらのアーロン・ランズダウン卿とは王都の学院で共に机を並べて学んだ仲。学院を卒業した際には私も宣教騎士団への入団を勧めていただいたのですが、父の容態が思わしくないという知らせを受けとっておりましたもので、急いでこちらに戻ってきたのです」
「そ、そうなのだ、全くどうしようもない位にそうなのだ」
しどろもどろといった感じでそう言い添えてくるアーロンを睨み付けてから、フィオナは更に適当な嘘を重ねる。
『あんたは黙ってなさい』と、住民達も興味を持ちまして。私は聖職者の資格を持っ
「私がハリス真教会の話をすると、

ておりませんから、洗礼は出来ませんでしたが、教会の教えはしろ正式な聖職者の方をお招きすべきかどうか、という話までらのランズダウン卿らがいらしたのです」

「なるほど、そうでしたの」

「ええ。ただ、この地に根付いていた地神は、狡猾な奴で。ラ背後から襲い、その装備の大半を壊してしまい……聖印授与の儀式を行う絡繰りも、壊されてしまったのですよ」

自分でもぺらぺらと口から滑り出る出鱈目に半ば呆れつつも取り繕ってそう告げていく。りばめておく事だ。聖印授与の儀式を行う機械が壊されたのはしたのはユキナリだったが。この種の大嘘をつく時のコツは、小さな事実をあちこちにち

「その後、地神は宣教騎士団の方々によって討伐されましたが実質的には信徒であるので、無理に聖印授与の儀式を急ぐ事も品の取り寄せは後回しにし、地神によって荒らされていた我が卿らは力を貸してくださって……街の人間の大半が既に「納得いたしました」無いと、絡繰りの修理や部街の復興に、ランズダウン

女騎士は大きく頷いた。

「あくまで私達の任務は逃げた傭兵の討伐。ここにいないのなら引き上げましょう」

そうして女騎士は――失礼なことに、未だに名乗る事すらしていない――は、大人しく踵を返し、そのまま立ち去りかけて。

「ランズダウン卿、街の外まで送ってもらえませんか？」

そうアーロンに声を掛ける。

「は、え、とお、ああ、了解した」

答えるアーロン。

引きつり気味の笑顔でそう告げると、アーロンは何度も頷きつつ、女騎士を促して執務室を出て行った。

彼はこちらの様子を窺う様に眼を向けてきたが――

（さっさとそのやこしいのを連れて出て行きなさい！）

言葉は無く、ただ視線でそう告げると、アーロンは何度も頷きつつ、女騎士を促して執務室を出て行った。

二人の足音が遠ざかっていくのを、フィオナは息を潜めてしばらく聞いていたが。

「はぁあああああ……」

それが完全に聞こえなくなった所で、ようやく長い溜息を漏らす。

「なんだったのよ……」

女騎士の失礼極まりな態度や、アーロンの間抜けな対応っぷりに、ふつふつと怒りが湧いてきたのは、それからしばらく経っての事であった。

●

シリングス邸を出た後はお互いに無言だった。

屋敷の外で待機していた三人の宣教騎士と合流し、アンジェラは彼等と頷き合うとそのまま街門の所まで真っ直ぐに向かう。その表情は穏やかな微笑を浮かべてはいたが、彼女がいつもこの表情である事を——たとえ激怒していようとも——知っているアーロンは、はっきり言えば生きた心地がしなかった。

ここで自分達の不始末が露呈すれば、屈辱に耐えてきた意味が丸ごと失われる。

「ランズダウン卿。御見送り感謝いたします」

街門を出た所で立ち止まり、アンジェラはアーロンの方を振り返ってそう言ってきた。

何とか誤魔化せたか……そう考えて内心、安堵の吐息をつくアーロン。

「ところで最後に幾つかお伺いしたい事があります」

「なにかな？」

極力平静を装いつつアーロンは言った。
「他の宣教騎士の方々はどちらに？」
「それは……今の時間は、近隣地域の巡回警備を」
「それにしても街に入ってから一度も他の宣教騎士の姿を見ませんでした。まさか全員が巡回警備に出ているという訳でもないのでしょう？」
「……」
そのままさかだ。
元々アーロン達第六宣教騎士団の面々は、最初のユキナリ達との戦闘で、半数が重傷を負っており、未だ療養中である。そして残る半数の内、ユキナリ達の提案を頑としてのまずに、拘束されたままの者が数名。アーロンを含め更にその残りの宣教騎士達は、全員が今日は巡回警備に出る予定だった。恐らく、彼等はアーロンが傾げつつも、巡回警備に出ているだろう。
彼等と鉢合わせしないようにと、シリングス邸の移動経路にも気を配っていたので、アンジェラ達が他の宣教騎士に会わなかったのも当然である。
「それに、守護聖人像は？　あれを運搬する馬車は？　……あれだけのものが通れるのは街の主要道のみ。でも影も形も見えない」

「……」

今度こそアーロンは言葉に詰まった。

守護聖人像は駐屯先の都市では、一番、人目につくべき場所に直立する事になる。まさしく街全体に『睨みを利かせる』為だ。これが見当たらないというのは、確かに宣教騎士ならばおかしいと思うだろう。

「ひょっとして、故障でもしましたか？」

「そ……そうなのだ、地神との戦闘で……一部損壊を……」

そういえばフィオナが、アーロン達は地神に奇襲を受けた為出鱈目を告げていたが。それに合わせておけばこの場は切り抜けられるかもしれない。

守護聖人像を丸ごと破壊された、となると面目が立たないが、一部の破損ならば守護聖人像の運用における想定の範囲内だ。剣ですら使っていれば刃こぼれを起こし、打ち直しを必要とする。兵器というものは、常に破損や損耗を受けるものであるからだ。

「ですがその場合、補修部品を宣教騎士団本部に求めねばならないのでは？」

「それは……ど、どうしようもなく……複雑怪奇な事情があって……だな……」

「……事情。事情ですか」

アンジェラは微笑を浮かべたままアーロンを見つめている。

「つまり、だな……」

アーロンはしかし、それ以上、気の利いた言い訳を思いつけなかった。

脂汗を垂らしながら黙り込む彼を、どう思ったか――

「……なるほど？　まあ、いいでしょう」

アンジェラはそれ以上の追及をしなかった。

その代わり、彼女は微笑のまま――言う。

「これを貴方に渡しておきましょう。貴方が変わらぬ信仰を我等が神に捧げているものと信じて」

彼女が差し出してきたのは、小さな革袋だった。

ユキナリは――逡巡していた。

「よし。それじゃ次」

頬に当たるそよ風を感じつつ、彼は伏せ撃ちの体勢をとる二人にそう命じた。

場所は先日に引き続き、物見台の上である。面子もユキナリの他にベルタ、ダーシャ、そしてヴェロニカと同じだ。標的を用意してぶら下げているのもウルリーケである。

〈デールリンガー〉が機能としても精度としても概ね問題無いと分かったので、ユキナリは銃の改良ではなく狙撃手の育成の方に重点を置く事にした。というより〈デールリンガー〉は構造が簡単すぎて、改良の余地が殆ど無かったのである。

「……ん」

「撃ちます……」

銃声が連続する。

今――並んで〈デールリンガー〉を使用しているのはダーシャとベルタである。

既に二人はそれぞれ百発以上の弾を消費して、照準器を調整し、射撃の感覚を掴もうとしている。ちなみに当初はヴェロニカも一緒に撃っていたのだが、どうにも性に合わない様で、早々に諦めてしまった。

遥か彼方、肉眼では点にしか見えない様な標的を狙い、呼吸を落ち着け、そして静かに――そっと、銃がぶれない様に引き金を絞る。

これが見た目以上に神経を使う作業だった。

「んー……」

改めて狙撃の練習に使えるようにと作った簡易式の双眼鏡を覗き込みながら、ユキナリは眉を顰めた。

ダーシャは失中。ベルタは命中。

やはりベルタの方がよく当てる。

銃の取り扱いそのものは、むしろダーシャの方が手慣れている。ダーシャの方が遙かに安定して上手い。例えば装填、射撃、排莢、という一連の動作はダーシャの方が手慣れている。むしろベルタはたまに弾薬を箱から取り出して装填する際、手を滑らせて落としてしまう事も在った。基本的に銃を構えて眼は前に向けたまま、指の感触だけで次の弾を掴んで持ってくる事になるので、慣れていない者にはやはり難しいのだろう。

ただ、〈レッチリ〉に慣れているダーシャにとって、この〈デールリンガー〉は戸惑う部分がやはり多いらしく、それが苛立ちの様なものになって、無いので、〈デールリンガー〉にも戸惑いは感じていない様だ。

（というか……）

一方……ベルタはといえば、そもそも慣れや癖が生じる程、銃に触れた事も撃った事も

ふとユキナリは思う。

今回の狙撃練習――実を言えば参加させてくれと言い出したのはベルタなのである。どうもヴェロニカに何か言われたらしいのだが、詳しい事は分からない。とにかく彼女にしては妙に積極的だった。

いや。むしろ先程から見ている限り、彼女の狙撃に臨むその様子は、何か思い詰めている様な雰囲気すら在る。

（まるで、これしかないって感じで……）

ダーシャには〈レッチリ〉が在るし、錬金術関係の知識もある。

ヴェロニカは当然ながらアーロン達をも圧倒する武術の腕がある。

彼女等は他に『戦う』為の手段や知識を持っている。だがベルタはその手の技能を全く

持ち合わせていない。勿論、そういう風に育てられてきたのだからそれは当然で、戦士でも傭兵でもない彼女にとって、恥ずべき事でも何でもないのだろうが、『これしかない』と言われ、しかしベルタ自身はそう思っていないらしい。

元からの相性も在ったのだろうが、〈デールリンガー〉での狙撃に早々と馴染みつつあった。

撃つ瞬間は息を止めて。

引き金は指だけを使い、真っ直ぐ後ろに向けて引き絞るという想いが集中力に転化されているからこそ、彼女は〈デールリンガー〉での狙撃に早々と馴染みつつあった。

ユキナリが教えた基本を愚直なまでに守って、引き金を引くベルタ。

彼女の上達振りは、正直言って、驚異的だ。

だが――彼女には一点、狙撃手として致命的な弱点があった。

「――お」

ユキナリは双眼鏡の視界の端に動く物を見つけた。

「ベルタ、標的の少し右の方。見えるか？　野兎が居る」

「え？　あ、はい。本当ですね」

ユキナリに言われ、ベルタは僅かに〈デールリンガー〉を右に向ける。向けると言ってもユキナリも傍目には動いたようになど見えない程、小さな変化だったが。恐らく彼女も照準器の円

い視界の中で野兎の姿を確認した事だろう。
「……アレ、夕食にするか。ベルタ、撃ってみて」
「えっ!?」
ユキナリに言われ、ベルタは驚いた様に声を上げる。
だが殊更に異を唱えると言う訳ではなく、彼女は二度か三度、眼を瞬かせてユキナリの方を見てから――改めて〈デールリンガー〉の引き金に指を掛けた。
その全身が、強い緊張を帯びているのが、ユキナリの眼からも見てもはっきりと分かる。
同時に……〈デールリンガー〉が細かく震えるのも見えた。
「……」
ベルタが息を止める。
だが――撃たない。
いや。撃てないのだろう。結局、野兎が近くの草むらに飛び込んで姿を消すまで、ベルタは引き金を引く事が出来なかった。
「あ、あの……申し訳ありません……」
ベルタは〈デールリンガー〉から手を離すと、その場に土下座するかの様な勢いで頭を下げてきた。

「ユキナリ様のご命令でしたの……本当に……申し訳ありません……」
「だから、そういうのはいいから。悪くないから！　怒ってないから！」
「ユキ……」
隣のダーシャが眼鏡の奥の眼を半眼状態にしてユキナリの方を睨んでくる。
「で、ですがユキナリ様――」
「いいから土下座は無し。命令を戻す。」
「あ、は、はい……」
ベルタは頷いて、姿勢を元に彼女の致命的な問題点。
狙撃手として、あるいは戦う人間として、明らかな欠陥。
それはベルタが――『優しすぎる』という事である。
単に狙撃が、木で作った的に弾を当てる、競技に過ぎないなら、優秀な選手になれたかもしれない。だがユキナリが〈ヴァルキュリアデールリンガー〉の射手に求めるのは、戦う為の射撃である。場合によっては命ある人間を標的として引き金を引かねばならない。
だがそれがベルタに出来るかどうか。
ベルタにそれをやらせて良いのかどうか。

戦士としては欠点だとしても、人としてそれは欠点ではない。むしろ真っ当な証拠、美徳とも言うべき点だろう。だが、人前になるという事は、それを捨てるという事に他ならない。

だからこそユキナリは、遊巡狙撃手として一人前になるべく、本当にベルタに〈デールリンガー〉を持たせて良いものかどうか――と。

●

シリングス邸の応接室。

突然のアンジェラ・ジンデルの訪問の後――フィオナとアーロンは、狙撃の練習から戻ってきたユキナリ、ダーシャ、ベルタ、そしてヴェロニカを加えて今後について相談する事になった。

「ハリス真教会の教化遠征軍、その副団長と名乗る騎士がやってきました。ヴェロニカ、貴女のことを捜している様子でした」

「……」

フィオナにそう告げられてヴェロニカはほんの僅かだけ眉を
「貴女の事はとりあえず誤魔化しておきました。正直言って、
何とも言えませんが……」
アーロンによると、アンジェラ・ジンデルはアルドレイルに
副団長である、との事だった。アルドレイルには他に二つの宣
態らしい。
「……結局、お前達はそこの宣教騎士とはどういう関係なのだ
とヴェロニカはアーロンを睨み据えながら問う。
よく考えればその辺りの詳しい事情を未だヴェロニカには話していなかった――そう思
い出してユキナリが片手を挙げた。
「それについては俺が。まあ、ぶっちゃけた話……俺がこいつ
を撃破したんだよ。で、こいつらは面子丸潰れで教会本部に報
してても下手に『宣教騎士団の最終兵器を撃破しました』なんて宣伝したら教化済
し寄せてきかねないんで、表向きは『宣教騎士団により教化済
てるんだ、この街は」
「……最終兵器というのは、あの守護聖人像か？」

表情に驚きを滲ませてヴェロニカは問うてくる。

「まあ、そうだな」

「あれを、お前が？　地神すらも葬り去る代物だぞ？」

「この地の地神、も……ユキが艶した」

ほそりとダーシャが言う。

「……俺はちょっとした隠し芸が在ってさ。まあそれを使って、奇襲気味に」

ユキナリはそう言って肩を竦める。

実を言えば物質変換の能力はヴェロニカの前では使っていない。それに〈御遣い〉の能力を十二分に発揮する為の『身体』――あの黒い装甲と羽を備えた姿には、ヴェロニカが来てから未だ一度も『変身』していない。

今更隠し立てする意味は無いだろうが、その辺の事情を話し始めると長くなる。今はむしろアルドレイルの宣教騎士団の脅威をどう捉えるかについて話し合わねばならない。

しかし――

「詳しい事はさておくとしても、ではユキナリ、お前は一人で宣教騎士団と戦えるという事なのか？」

身を乗り出してヴェロニカがそう尋ねてくる。

彼女が何を考えているかは聞かなくとも概ねユキナリには分かった。
「結果としてはそうなるかもしれない。けれど、アーロン達とやった訳じゃない。ダーシャの支援も在った。一つの宣教騎士団が――多分、無理だ」
かもしれないが、二つ以上は。
ユキナリは言って首を振る。
「ヴェロニカの期待には応えられそうにないな」
ヴェロニカはアルドレイルに囚われている仲間の傭兵を助けたい。
人で彼の地に舞い戻り宣教騎士団を相手に戦っても、勝つどころか、生き残る事すら難しい事も理解している。だからこそ助っ人としてユキナリを――と考えている筈だ。
「だが、あの〈デールリンガー〉という武器を使って、予め宣教騎士団の戦力を削っておけば……」
「あれがどれだけでかい音するか、知ってるだろ」
ユキナリは肩を竦めて言った。
「十人位までなら、相手が動揺している内に何とか狙撃で削れるで終わりだよ。相手が建物の中に立て籠もってしまったら、さすがに狙撃は難しい。音をある程度まで殺す仕掛けも作れない事は無いけど、そうすると今度は射程が縮んだり、威

力が落ちたり、精度が落ちたり……」

何より最も〈デールリンガー〉を使いこなしているベルタが、どうかも怪しい。手足に限ってという事なら、大丈夫かもしれないが、当然、人体の末端部となると的としては小さい上に、よく動くので、狙撃の難度そのものが上がる。

「貴女はここを出て、アルドレイルに引き返そうとしているのですよね？」

そう確認するフィオナは、首を傾げて何かを考えている様子だった。

「……そうだが」

「では私から提案を。貴女をこの街で雇います」

「……なに？」

怪訝そうな表情で問うヴェロニカ。

フィオナは真っ直ぐ彼女の顔を見返しながら続けた。

「貴女はこの街に留まってください。仲間を取り戻しに行く事を諦めろ、復讐をするな、むしろ貴女にとっても都合が良い話かと」

「意味が分からない」

とヴェロニカは首を振る。

「正直、この街の現状について、あのアンジェラ・ジンデルという宣教騎士を、騙しきれ

たとは思えません。恐らくこの街が教化されていないのは、彼レイルの宣教騎士団の知る所となるでしょう」

そうなれば恐らく……面子にかけてもアルドレイルの宣教騎り出してくるだろう。それも確実を期して二個、あるいは三個つまりは以前、ユキナリがアーロン達と戦った時の、二倍、彼等はやってくる。それも遠くない内に、必ず。

「当然、相手が聞く耳を持たなければ、こちらで迎撃する事に

「……そういう事か」

全てを聞かずともヴェロニカはフィオナの提案の中身を察し仲間を助けるにしろ、復讐するにしろ、宣教騎士団がフリーが削がれた後ならば、よりヴェロニカにも勝算が出てくるだろう。

しかし……

「私の都合――か」

皮肉な色がヴェロニカの笑みを掠める。

彼女はフィオナの提案の更にその奥、下心も読み取っているフリートラントはユキナリという強力な存在が居る一方で、

【戦える者】の数は少ない。

ユキナリが〈デュランダル〉を渡して使い方を教えてはいるが、昨日まで鋤や鍬を握っていた者達が、いきなり銃を渡されただけで練達の戦士に変わるという訳ではない。

技術というより心構えの問題だ。

人間が人間を殺す、という激情の結果や、その場の勢いが要る。武道においては一人も殺した状態を『一段』と呼び、それ以前と以後を区別する事が多いが、それ程までに『最初の一殺』は難しい。

だが逆に言えば、越えるのが一番難しいのはそこなのだ。

新兵を叱咤鼓舞し、彼等を追い立て、その難関を越えさせるリートラントの戦力増強は早く為す事が出来るだろう。

そうした役目に、恐らくヴェロニカは適任だ。

彼女の存在は単に強い戦士が一人増えるというだけではなく、より多くの戦士の誕生を促す事になる。

ただ……

「いいだろう」

ヴェロニカはふと表情を緩んだアルドレイルに潜入し、仲間を助け出すという「お前達が戦っている間に、警戒の緩んだそう言った。

手も在るかもしれないが……」

そう。ヴェロニカの都合というのならば、そういう考え方もそれを理解した上で、フリートラントの為に、仲間の救出はナは要請しているのである。

「卑怯なー　どうしようもなく卑怯な女め！」

アーロンが腹を立てた様子で椅子から腰を浮かすが、ヴェロ「安心しろ。今回はそちらの提案に乗る。私は傭兵――金で命を売り買いする身だ。ならば命を助けて貰った事への対価もまた支払うべきだろう。フリついて、異論は無い。出来るだけフリートラントを善戦させた削ぐ事が出来る、という点はその通りだろうしな」

「ありがとう」

とユキナリは苦笑して言った。

単に雇う雇われるという関係で言えば、ヴェロニカとその仲で、彼等もまたアルドレイルに囚われている筈だ。ヴェロニカ彼等の救出を優先してフィオナの提案を蹴るという考え方もあそれをヴェロニカが選ばなかったのは、フリートラントに対

てくれているという事だろう。

「私からも感謝を。それから、アーロン」

「……何だ」

アーロンは不機嫌そうに腕を組んで言った。

「我々も、道理を無視して技術と知識と経験を持っている他の者と一緒に、貴様達の側にえというのか？」

アーロン達は戦いに関して、ヴェロニカには及ばないのかもしれないが、彼等は街の住人と比べる限り、間違いなく『玄人』だった。フィオナが彼等にも防衛戦に参加してくれと要請するのは当然の事だろう。

しかし……

「いえ、悪いけれど、あなた達には再び武装解除した上で、フィオナは溜息と共に、そう告げた。牢屋に入ってもらいます」

不機嫌だった。

どうしようもなく不機嫌だった。

「……」

剣と鎧を取り上げられたアーロンは、シリングス邸の隣に建てられた倉庫へと連行されていた。

そこには、既に他の宣教騎士が数名、閉じ込められていた。

倉庫の奥には木材と太縄で作られた即席の『牢屋』――いや『檻』が在る。

警備や商隊の護衛として協力してきた者達である。協力を拒否して反抗を続けている者や、重傷で療養中の者は、元々別の場所に閉じ込められている。

「なんで今更……」

「結局、これか……」

宣教騎士達はブツブツと文句を垂れ流している。当然と言えば当然であろう。

元々はハリス真教会の使徒として、この街で、無知蒙昧な辺境の民を教化するという栄光ある任に就く筈だったのに、武装解除され、虜囚となり、屈辱的な扱いを受けてきた。

そして、そんな状況にも耐え続けた結果――最近は少し待遇も改善され、現状を受け入れて前向きに考えよう、という者も出てきた。

なのにフリートラントの連中の都合で、元の虜囚扱いに逆戻りだ。

これで不満を抱かない者がいたら、そいつは被虐趣味の変態だと断言していいだろう。

しかも、アーロン達を連行したのは……事もあろうにヴェロニカだった。

ふらっとこの街を訪れたばかりの、どこの馬の骨ともわからない傭兵で——そもそもこの街に厄介事を運んできた張本人だ。ユキナリに連行されるのであれば、まだ仕方が無いのだから、と自分を宥める事も出来たが、ヴェロニカが相手であちらの方が圧倒的に強ちばかりが膨れ上がっていく。

はむしろ腹立たしい気持

しかし……

「……あの街長代行は、善い人だな」

ふと——アーロンの腰を持って半歩後ろを歩くヴェロニカがそう言った。

勿論、アーロンの位置からは振り返らなければ彼女がどんな表情をしているかわからない。何を思ってヴェロニカがフィオナをそう評したのかは気になったが、振り返れば何か負ける様な気がしてアーロンは頑なに前を向いたまま歩き続けた。

その様子をどう思ったか——

「お前の事を疑うという以前に……そもそもお前達が敵に回る可能性が在ると分かっているなら、閉じ込めるなんてまどろっこしい事をするのではなく、即座に殺しておくべきだろう。百歩譲って命は助けるにしても、手足をへし折って戦えなくしておく位は当然の処

置だ。少なくとも私ならそうする」

「……」

冷徹な言葉に、アーロンはただ絶句するしかない。

だがその一方で彼の中にはヴェロニカの言葉を正しいと認める気持ちも在った。

「それどころか……人質として使うことすらしない」

確かにアーロン達に関しては、そう使う方法も在る。アンジェラや彼女の上役達に人質が通じるかどうかは分からなかったが。『高貴なる宣教騎士は、生きて虜囚の辱めを受けたりはしない』とばかりに、構わず攻撃してくる可能性も在った。

ともあれ――

「要するに、敵に回られたら困るが、かつての自分達の仲間を相手に戦わすこともしたくはない、と」

「……」

「敵に回るなと強制するのも簡単だろう。宣教騎士を何人か人質に取ればいい。いや。半数以上は未だ療養中なのだ。言葉の端にでも『逆らえば彼等を殺す』とにおわせておけばいい。なのにわざわざこんな『牢屋』を作って閉じ込めるという事は……」

ヴェロニカが何を言いたいのか――フィオナに気を遣って言葉を濁していたが、概ねアーロンにも分かった。

「……入れ」

そう言ってヴェロニカはアーロンを『牢屋』の中に促す。

彼が中に入って、仲間の宣教騎士達の傍に座ると、ヴェロニカは柵状の扉を閉め、これだけは金属製の鍵を掛けた。

倉庫の壁を利用し、木材と太縄を用いてそこに作り付けがに素手の人間に壊せる様なものではない。中は広めで、特に圧迫感は抱かなかったが、檻の様なその構造を見ていると、獣扱いされている様で、情けない気分になってくる。

「……」

ヴェロニカが立ち去り、倉庫の鍵もまた閉められたのを確認すると――アーロンはふと、履いていた長靴を脱いで、その中からあるものを取り出した。

平べったい――折りたたみ式の刃物である。

いや。単なる刃物ではない。折りたたまれているのは刃だけでなく、釘抜きの様な形状のもの、鋸の様なものも、一緒に折りたたまれている。いずれも薄いのであまり頑丈とは言えないだろうが、元々はこうして隠し持つ為のものであろうから、本来の刃物や道具に

比べて耐久性が劣るのは仕方在るまい。
勿論、武器として使える様な代物ではない。
だが縄を切ったり、釘を抜いたり、といった作業には使えるだろう。
これがアンジェラから渡された革袋の中身だった。
フィオナの推測通り――アンジェラには全て見抜かれてしまっていた。『教化』に失敗した事も、虎の子の守護聖人像を失った事も、そして武器を取り上げられて、雑用係の様に使われていた事さえも。
故にこの街を去る際、アンジェラは一つ、アーロンに命令を下した。
「もし、無能の汚名をそそぐ積もりがあるのなら、私の命令に従いなさいな」
近々、アンジェラ達はこの街を急襲する事になる。その際、ほぼ確実にアーロン達はどこかに閉じ込められているだろう。ヴェロニカが言った様に、殺される可能性や、手足を折られている可能性も在るが、その場合は仕方が無いとして――そうでない場合は、拘束場所から抜け出し、可能であるならば武器を取り戻してアンジェラ達と挟撃を行う。武器が取り戻せなくとも、フリートの内部から掻き回して混乱させる程度の事は出来る

筈だ。掌の中に握り込む事が出来る程度のちゃちな刃物でも、質にし、ユキナリを脅す事は出来るだろう。

そうすればほぼ間違いなく、アンジェラ達は勝てる。

フィオナの懸念は、的外れでも何でもなかったという事である。

「……」

アーロンは掌の上の工具を眺めて――短い溜息をついた。

アーロン達を拘束した後…戻ってきたヴェロニカと共にユキナリ達は今後の方針についてシリングス邸で打ち合わせる事になった。

「前にも言ったが――私が知る限り、アルドレイルには宣教騎士団が三個、駐屯していた。拠点化した街の重要性を考えれば、全ての騎士団が街を留守にするとは思えないから、恐らく二個の宣教騎士団が攻めてくると考えれば良いだろう」

ヴェロニカは机の上に広げられたフリートラント近隣の地図を見ながらそう言った。

「恐らくそれぞれの騎士団が散開してフリートラントを包囲、もしくは要路を押さえた上

での挟撃……ユキナリ、お前は桁外れに強い様だけれど、全くめられれば、街を守り切るのは不可能だ」

「……だろうな」

ユキナリとしてもそれは認めざるを得ない。

個人としての強さは、それがどれ程強大であったとしても、は敗北せざるを得ない。四方八方から攻められればとても対応しきれなむ訳ではない。何かを守る側であれば、それに――

「本当……何が愉しくてあの連中はこんな事やってんだかな」

ユキナリは溜息を一つ挟んで、忌々しげに呟く。

「神様を信じたければ勝手にすればいいさ。自分達で拝んでるじゃ済まずに『お前達も信じろ』と強制してくる」

「……」

ヴェロニカが眉を顰めてユキナリを見る。

何を今更――とでも言いたげだった。

「俺個人は確かにハリス真教会に恨みを抱いているさ。だがこの街は別に、他の街を攻め落とそうとか支配領域を広げようとか、そんな野望を抱いているわけじゃない。どうして

放っておいてくれないんだ」
「それが正しい事だと信じているからだろう」
とヴェロニカは呟く様に言った。
「正しいからには万人が認めねばならない。真実は常に一つだから」
「真実なんて人の数だけあるけどな」
とユキナリは言う。
「もっともな意見だと思うが、それは、彼等の教えを否定する事になる。神は真実の化身であり正義の具現だ。彼等の神は世界中にたった一つで、それ以外は全て邪教の悪魔だから、真実も正義も一つだけで、それ以外は認めない」
「……」
ユキナリが眼を細めてヴェロニカを見る。
「人は誰しも安心したい。間違っていない、自分は正しいと、信じていたい。だから自分達の思想や信条に相反するものは存在を認めない。可能であれば除けようと考える」
「……だろうな」
「……人と人とが対立し、和解が望めない場合、より強い者が仲介するのでもない限り、結局は力による解決を図るしかなくなる。そして大抵の場合に、敗北した側は全てを失う。

だから常に力を誇示し続け、未だ見ぬ『敵』に備える。彼等には彼等なりの理屈があるのだろう。認めるかどうかは知らないが」

「身も蓋も無いな……まあ理屈は分かる」

「道義的な善悪はこの際、関係が無い。ただ自分の主義信条を守りたいのであれば、力を付けざるを得ない。望む望まぬにかかわらず。しかしそれはまた、他の者の眼には脅威と映り、その者達が武器を持つ事の理由にもなる――」

その意味で……ユキナリ真教会にとって自分達の教義そのものを脅かしかねない敵である。地方で大人しくしていようが何だろうが、彼がある日突然、教会に向かって牙を剥いてこない、という保証は何処にも無い。

「つまり力を持っただけで、否応なくそういった力学に巻き込まれるってことか……」

ユキナリが元々教会に追われる身であったかどうかはこの際、関係が無い。

大きな力を持った上で、独立した存在でありたいと考えている者は、教会にとっては脅威以外の何物でもないのだろうし、他人の自由や主義信条の為に蹂躙されたくなければ、力を持っておくに越した事は無い。少なくとも対立している相手と同じぐらいの力を持っておかなければ、呑み込まれるだけだ」

だからフリートラントにも彼が動かせる『戦力』を確保する必要がある。

しかしそれはつまり、ベルタ、フィオナといった、フリートラントの住人に『戦争』をさせるという事に他ならない。

「趣味じゃないな、正直……」

長々と溜息をついて項垂れるユキナリ。

散々、イルジナの仇討ちとしてハリス真教会の人間を殺しておきながら、後は放って置いてくれというのは虫が良すぎる願いかもしれない。だが今の彼は積極的に誰かを殺しに出掛けたい訳ではないのだ。自分の身の回りの人々を守れればそれで、良い。

しかし……

「趣味であろうとなかろうと、さもなくば、いつか誰かに呑み込まれる」

ヴェロニカはにべもなくそう言った。

「……それが親と、自分の故郷を失った私の実感よ」

ふとヴェロニカの口調に、年相応の……若い娘らしい感傷的な響きが滲む。

それに対してユキナリは異を唱える事は出来なかった。

彼もまた前世では何度となく自分の無力を思い知らされてきたからだ。ヴェロニカの過去に何が在ったのかは知らないが、彼女もまた、そうした過去を抱えたまま、今を生きて

いるのだろう。

「話をしたいのなら、まず勝って相手を地に這わせてから。さもなくば相手はこちらの言う事など聞く耳は持たない――そう思っておいた方がいい」

ヴェロニカは淡々とした口調でそう言った。

アルドレイルの街は――緊張に包まれていた。

三個駐留する宣教騎士団、その内の二つが、出陣の準備を整えていたからだ。

為の出立ではない。あくまで出陣だ。それはつまり、彼等が『敵』を定めて動き始めたという事を意味する。そして宣教騎士団が二つも連携をとって動くとなると、そこには必ず大量の死傷者が発生する筈だった。

街の広場には三体の守護聖人像が周囲を睥睨するかの様に立ち並び、その内の二体が出陣に備えて整備を受けている。その様子をアルドレイルの住人達は、一種、怯えと諦めの交じった視線で見つめては、眼を伏せて通り過ぎるのだった。

そして――

「第八騎士団は街道からまっすぐフリートラントの正面を突いて守護聖人像の威容を背に、アンジェラ・ジンデルは居並ぶ第九団長は未だお身体の傷が治りきっていない為、現場に出ての指揮ラ・ジンデルが執らせていただきます。何か、異論は？」

そう告げた。

「我々第九騎士団は山を迂回する道で接近し、挟撃の態勢を整え攻め込む予定です」

「……」

第九宣教騎士団の宣教騎士達は黙ったままである。アンジェラは、不肖、このアンジェ

く者は居るが、首を横に振る者は居なかった。元々アンジェラは彼等を見回しても、頷トラントの現状について報せを持ってきたのも彼女である。現状では、彼女以外に適任の者は居ないし――第六宣教騎士団の尻拭副団長であるし、フリーて騎士団を指揮したいと考える様な酔狂者も居なかった。に対する理解という意味

「では更に此処から細かい指示を。まず一番隊はこちら――」

満足げに一つ頷くと、それから机の上に広げた地図の一点を指第九宣教騎士団を構成する各部隊に、指示を出し始めた。さしつつ、アンジェラは

フリートラントの街は表向き――平穏を保っていた。

少なくともベルタの眼から見れば、いつもの街と変わらないと住人の間に不安が広がると判断あまりに大袈裟に身構える可能性については言及しつつもイルの宣教騎士団が攻めてくる可能性についてはは言及しつつも生活する様にと命じていた。

この為、農作業や、畑の開墾など、以前から行われていた仕る状態である。宣教騎士団を上手く撃退出来たとしても、農作業を放り出して収穫量が半減してしまえば、餓死者が出る可能性も在るからだ。

ただ……ユキナリが指示をされていた。

事前の準備としては、一部の者達――元々街の治安を守っていた青年団の有志達――に改めてヴェロニカを紹介し、彼等を幾つかの部隊に分けた上で銃と、そして戦闘になった際の連絡手段や部隊単位での移動など、実戦を想定した幾つかの訓練を開始していたが、前述の通り、通常の生活を続けながら、しかも住民に不安を与えないように――という事

で、あまり大々的には行われていない。
ユキナリはユキナリで〈御遣い〉の力を使って〈デールリンガー〉や〈デュランダル〉の弾薬を生産したり、宣教騎士団の守護聖人像が来る事を想定した幾つかの仕掛けを作っていた様だった。
そして――
「……」
ベルタは、このところ、毎日の様に物見台に通い詰め、狙撃の練習を続けていた。
ただし傍にユキナリとダーシャの姿は無い。前述の通り街の周囲に設置する仕掛けの製作で二人は忙しいのだ。ヴェロニカも青年団の訓練に忙殺されていて街の中に居る。なので念の為にとウルリーケが護衛についてきてくれていた。
引き金を――引く。
命中。更に引き金を引く。命中。
機関部を開いて空薬莢を排出、左手で掴んでおいた新しい弾を装填し、また機関部を閉じる。そしてまた引き金を引く。更にもう一度。
延々とこの繰り返しである。
「……」

自分でも随分と上達したと思う。

恐らく〈デールリンガー〉を扱えば、ベルタはフリートラントで最も上手いだろう。オルタが使っているのはユキナリが最初に造った一本で、これが一番、手には馴染む。ちなみにベナリに言わせると後から造った〈デールリンガー〉と違いは何も無い、筈なのだが。

射撃。射撃。銃を傾けて排莢。装填。銃を戻す。

射撃。射撃。銃を傾けて排莢。装填。銃を戻す。

射撃。射撃。銃を傾けて排莢。装填。銃を戻す。

……

既に的は相当小さなものになっているのだが、それでもベルタはきちんと銃弾を命中させる事が出来た。無心に、まるで自分が〈デールリンガー〉の一部になったかの様に銃に併せて引き金を『引かせて貰う』そんな感覚でベルタは狙撃をこなしているのだが、それが良かったのかもしれない。

「……」

ベルタに軍事の難しい事は分からない。

だがヴェロニカが言うには、相手が大軍でフリートラントに押し寄せてくる場合、二つ

の方向が考えられるという。恐らく宣教騎士団は守護聖人像を持ち出してくるであろうから、それらを運搬する大型馬車が通れる道を来るのが基本である筈だ――と。

勿論、宣教騎士団は散開して街を包囲する様に布陣するかもしれないが、それは恐らくある程度まで街に近づいてからだろう。わざわざ遙か遠くから大きく隊列を横に広げ、道の無い場所を苦労して歩いてくる意味は無い。

そして恐らく攻めてくる宣教騎士団は二つ。

つまり基本的にフリートラントが警戒すべきは、二方向同時という事になる。

ユキナリ達が最初にフリートラントに来た際に、神殿に立ち寄った事からも分かる通り……二方向の一つはユキナリ達の神殿のある方角だ。つまりこの物見台も訓練に通っている為、ベルタは非常に都合が良い。既に何日も訓練して、どの様に風が吹くのかも感覚的に理解している。この物見台から狙撃するのは相当な命中率を叩き出すだろう。

しかし……

「――あ」

光学照準器を覗き込むベルタの口から声が漏れる。

集中が途切れ、〈デールリンガー〉を握る手が震える。大きく揺れる視界の中に、野兎

が一匹映っていた。

あの時の野兎かどうかは分からない。

だがベルタは意識して照準をその野兎に合わせて、引き金を引こうとした。

しかし、撃てない。撃とうとすると無意味に手に力が入って銃が震えてしまう。無心など何処かに吹っ飛んでしまうのだ。

「無理……」

照準器から眼を外してベルタは呻いた。

情けない。

折角、ユキナリの役に立てる機会だというのに。他の誰よりもベルタが、ベルタだけが上手くこなせる——彼女の特技を、才能を、ユキナリが見いだしてくれたというのに。

彼の恩義に報い、自分という存在の価値を、もっとユキナリに認めて貰える、そんな機会であるというのに。

自分は、野兎一匹撃つ事が出来ない。

獣を相手にしてすらこれなのだ。相手が人間の場合、殺す事など自分にはとても出来そうになかった。

情けなかった。何をするにも自分は中途半端だ。自分からは何も出来ない。

「私って……本当に……」
「――どうじゃ、修練は順調か？」
声をかけられて、ベルタは弾かれた様に振り返る。
「ウルリーケ……様？」
その名を呼ぶ声には困惑が滲んでいた。
目の前に居る少女はウルリーケだ。それは間違いない。だがウルリーケの雰囲気が、どことなく、硬い。
ベルタの困惑にウルリーケの方でも気がついた様だ。
「怖いか？」
は何か別人の様にすら見える。
「あ、はい……。すみません、ごめんなさい」
素直に謝ると、ウルリーケは笑みを浮かべて首を振った。
「気にせずとも良い。少しウルリーケの人格を後ろに下げた」
とウルリーケは言った。
いや。この物言いはつまり、目の前に居るのはウルリーケの身体でも、喋っているのは恐らく――植物型地神イグドゥラだ。普段、ウルリーケは『ユキナリ達と付き合いやすい』という理由で、彼女本来の人格を前面に出し、それに合わせた言動になっているが、

今はイグドゥーラ本来の意識が前面に出ているのだろう。
「……殺せぬか」
「え……あ」
どうやらウルリーケには見透かされていたらしい。
「あ、えっと、申し訳ありません……」
「無理も無い事じゃ」
とウルリーケは、むしろ慈しむ様な表情でベルタを見て言った。
「お主は心優しき娘。ユキナリも、それは分かっていよう。おどとは思ってもおらんよ」
「それは……」
結局は期待されていないという事か。
それとも――
「むしろお主にそういう事をさせて良いのかと、迷っている節すら在る。じゃが甘い事を言っていられる余裕も無い。仕方なくといった所じゃろうよ」
そこまで言って、ふとウルリーケは無表情になる。
「お主の分まで我が戦えれば、問題無かろうがのう」

「ウルリーケ様……いえイグドゥーラ様？　でもこれはフリートラントの……」
「恐らく、フリートラントが落とされれば次はロストルークの番になる」
静かな口調でウルリーケは言った。
「そもそも、最初から彼奴等の狙いはロストルークじゃったのかもしれん。表向き、フリートラントは宣教騎士団に占領されていることになっておったからの」
アルドレイルに三個も宣教騎士団が居るのは、彼の地を支配するのにそれだけの戦力が必要だったという訳ではなく、より遠方の都市に向けて二個の宣教騎士団を派遣する為だろう。アルドレイルは中継基地として使われていて、二個の宣教騎士団は、いわば遠征途中に立ち寄っているだけである。
それら宣教騎士団の遠征目的地がロストルークであっても不思議は無い。
「ヴェロニカが言っていたことは、理想ではないが真実ではあるな」
「え……？」
「だから我は我で抵抗するぞ――それだけの話じゃ」
言って――ウルリーケは視線で物見台の下を示した。ベルタントの住人かとも思ったが、つの間にかそこに十数人分の人影が集まっていた。フリーを凝らしてみても、一人として見覚えのある顔はない。

それどころか、彼等の頭部には、ウルリーケと同様の『角』――いや『枝』が生えているのが見えた。

「ウルリーケと同様、我がイグドゥーラがそう言った。眷属じゃよ」

ウルリーケの向こうに居「この街を守りに来て下さったのですか……？」

そうだとしたら心強い味方は居ない。これ程、

地神イグドゥーラは、かつてフリートラントを治めていた地神よりもずっと強大な力を有していると――ベルタはユキナリから聞かされていた。フリートラントの地神を苦も無く斃したユキナリが、苦戦を強いられた位だという。条件が悪ければ、自分は負けていたかもしれない――とまでユキナリは言った。

つまりその力は、ユキナリと同等かそれ以上……という事になる。

その様な地神がその手足とも言うべき眷属を何体も派遣してくれたのだ。

しかし――

「じゃが期待には添えぬかもしれん」

ウルリーケは眉を顰めてそう言った。

「我は本来、動く事の出来ぬ樹木の精よ。眷属達を使って離れた所にも力を及ぼす事は出

来ようが、どうしても本体から離れれば離れる程、力は弱まる。中継用に我が『子』を――ロストルークから離れればもおるが、宣教騎士団の襲来には間に合いそうにない」

「でも……じゃあ……」

わざわざ不利な条件でもウルリーケは――いやイグドゥーラは戦おうというのか。

襲われるのがフリートランでであるならば、敢えてこれを見捨て、戦力を温存してロストルークを守る、そういう選択肢もイグドゥーラには在った筈である。

「決まっておろう。此処で戦わなければ失ってしまうからじゃ」

イグドゥーラはフリートラントの方角を振り返って言った。

「我が友、ユキナリをな」

「……！」

「ユキナリがこの地の地神であるにせよ、教会の裏切り者であるにせよ、宣教騎士団がそれを知って彼を生かしておくとは思えん。お主達は改宗すればナリだけは間違いなく殺されもしようが、ユキ

「そんな――」

ユキナリが死ぬ。

考えた事も無かった。

体そのものは普通の人間と大差無い様に見える。触れれば柔らかく温かいし、ベルタ達と同様に飲み食いもする。心臓を潰すなり、頭を刎ねるなりすれば、死ぬ、という事だ。これはつまり血が通った生き物という事であり——逆に言えば、今まで考えた事も」

「私——私、そんな事、出来る事をすれば、それは、自然とユキナリを守ってやるが良い。お主におるならば、お主の力でユキナリを守る事にもなるでな」

そう言って——ウルリーケは〈デールリンガー〉の銃身を撫でた。

アルドレイルから宣教騎士団がいつやってくるか分からない。この為——ユキナリは想定される彼等の侵攻経路に注意を払っていた。具体的には神殿や物見台とは反対側の街門の傍に陣取って、いつでも対応出来る様にしていた。広めの街道に繋がる事もあって、街門はフリートラントに存在する出入り口の中でも一番立派なものである。一応は此処が街の正門、という事になる筈だ。

「……とはいえ」
ユキナリは傍らを眺める。
「なに？」
と首を傾げるのはダーシャだ。
彼女は当然、といった様子でユキナリの隣に居る。いざ戦闘となったら危険だからシリングス邸に居た方が良いとは言ったのだが、彼女は聞く様子が無い。むしろ〈レッチリ〉を片手にユキナリの傍から離れようとしなかった。
「待つ身ってのはこれで中々、辛いよな」
「緊張をある程度まで維持し続ける為の気力――忍耐が求められるからな」
と答えるのは、戦装束を身に纏ったヴェロニカである。
未だ傷は完全に癒えている訳ではない様だが、それでも戦うと主張しているので、彼女もまたこの場に居る。そしてその背後には、彼女が訓練した街の青年団が数名、〈デュランダル〉を手に待機していた。
彼等はアーロン達と違って、戦闘に関しては素人だ。
以前から街の治安――揉め事や犯罪に対応してきた者達だが、あくまで彼等は自警団の域を出ない。集団対集団で、しかも必殺の武器を持ってぶつかり合う経験は無いし、その

覚悟もあるかどうかは怪しい。いかにヴェロニカが彼等を訓練したと言っても、数日では『居ないよりはマシ』程度にしかならないだろう。

それでも人手が足りないユキナリとしては、彼等を駆り出さざるを得ない訳だが。

「いざ戦闘となれば、畑仕事をしている者達を街の中に戻すと同時に、連絡係を走らせて残り五十人をそれぞれ、ユキナリの所と、ウルリーケの所に配する」

とヴェロニカは言った。

彼女の訓練を受けた者は八十人前後だが、さすがに〈デュランダル〉や〈デールリンガー〉、そしてその弾薬を彼等の数だけ造っている余裕は無かった為、実際に銃を手に戦えるのはその半分、残りはその支援として連絡や、物資の運搬役として働く予定だった。

一応……侵攻が予想される二つの経路には、それぞれユキナリがダーシャと共に仕掛けを施しておいたので、それが上手く働いてくれれば、相手の動きを遅らせる事が出来る筈である。それで宣教騎士団の者達が怖じ気づいて帰ってくれればそれに越した事は無いが、そこまでユキナリは期待していなかった。

「――ユキナリ」

呼ばれて振り返ると、フィオナが歩いてくるのが見えた。

さすがにもういつ宣教騎士団が攻めてきてもおかしくはないので、彼女は今、街の住人

達に警戒を呼び掛けて回っている。畑仕事に出ている者達や、猟に出掛けている者達にも報せてあるので、宣教騎士団が姿を見せればすぐに連絡が来る筈だった。

「概ね、声掛けは終わりました」

「ありがとう。済まないな」

ユキナリはそう言って――それから溜息をついた。

「本当なら、皆を怯えさせる様な事はしたくなかったが、仕方ない」

「……ユキナリ？」

ふとフィオナは眉を顰め、首を傾げた。

「少し気になっていたのですが」

「何だ？　不安な事が在れば今のうちに――」

「貴方、ひょっとして……自分一人が宣教騎士団と戦えばそれでいい、本当はそうするべきだ、とか思っていませんか？」

「……」

問われた意味が一瞬分からず、ユキナリは言葉に詰まる。

本来ならばそうであるべきだろう。自ら求めて就いた立場ではないが、ユキナリはこの

街を守護する神の役目を任されているのだから。

「とりあえず、俺が守護聖人像をぶち壊せば、アーロン達の時みたいに、連中が戦意喪失してくれると思う。皆にはそれまでの時間稼ぎをして貰えれば――」

「そうではなくて！」

フィオナは焦れったそうにユキナリの言葉を遮った。

「あなたの見積もりが甘いのではないかということです！　守護聖人像も二つ攻めてくるなら、守護聖人像は宣教騎士団一つにつき一体、宣教騎士団が二つ在る筈でしょう？　一つをユキナリが破壊出来たとして、もう一方はどうする積もりです？」

「ああ、その為にウルリーケには向こうに行って貰った」

確かに、ロストルークから遠いため、ウルリーケは本来の力を発揮できない。それでも物見台の近くには森林が広がっている。植物の地神イグドゥーラの眷属であるウルリーケには地の利を与えてくれる筈だし……眷属達の身体能力は、普通の人間よりも遙かに高い。宣教騎士団を攪乱する事は充分に可能だろう。

「でも、こちらに攻め込んでくる騎士達は、向こうの状況なんてわからないのでしょう？」

「あ、ああ……そりゃそうだけど……」

「だったら、もしユキナリが守護聖人像を破壊したとしても、彼等にはもう一つ頼みの綱

が残っているという事です。それで戦意が喪失すると断言できますか？」

「……」

ユキナリは黙り込んだ。

「ユキ……」

ダーシャが気遣わしげにユキナリの手に触れてくる。

ずっと一人で――いや彼女と二人で戦ってきた。

降りかかる火の粉を払うように相手を斃してきた。自分達の身を守れれば、それで良かった。目の前の敵を斃していれば、それで充分だった。その向こう側を見る必要など、無かったのだ。今までは。

しかし……

「あなたには守護聖人像を破壊してもらわなければならない。掻いても無理でしょう。けれどそれだけで終わるとは限らないを失わない場合、結局は街の人間も戦わざるを得ないんです。宣教騎士達が戦意私や、ベルタを含め！」

「……」

ユキナリとしては言葉も出ない。

つまりフィオナが言っているのは、『何でもかんでも自分一人で背負った気になるな』

という事か。ユキナリはあくまで戦うのは自分の仕事で、街の住人達にはそれを『手伝って貰う』様な気持ちで居たのだ。

だからこそ申し訳無いと思う気持ちが何処かに常に在った。さがあれば、彼等を危険に晒したり、辛い事をさせたりする必要は無いのだ——と。

ベルタは野兎を撃てなかった。

彼女に限らず、戦う事に躊躇を覚える者は居るだろう。だがはなれなかった。人間としてそれはむしろ、正しい気持ちだろらこそ彼等を戦いに駆り出さざるを得ないこの状況を、ユキナリは思う。罪悪感の様なものを、抱えていたのだ。

しかし——

「本当、しっかりしてください、我等が神」

フィオナはユキナリの顔を覗き込んでそう言ってきた。

「貴方は私達の為に尽力してくれました。今もしてくれているもの——それはその通りでしょう。しかし信徒は信徒で、神の恩恵に応え報いる義務を負う。私達は与えられるものをただ口を開けて貪るだけの恩知らずではありません。無償のものなんてこの世にありません。私達は私達で、貴方を手助けし、守りたいんです。中

途半端な遠慮をされては、困ります」

「……」

「これは、彼女が正しいと思う、フリートラントの神、ユキナリとヴェロニカが苦笑を浮かべて、言ってきた。

彼女の方を振り返ると、彼女と――その背後に控えていた数名の青年団の者達が揃って頷いた。誰の顔にも怯えの色はあるが……しかし、同時に、覚悟の色も確かに在った。

「分かった、ありがとう。覚悟はよ」

ユキナリはそう言った。

そして――

「――来たぞおっ!!」

まさか話が一段落付くのを待っていた訳でもあるまいが――会話の途切れた静寂の間に、悲鳴じみた声が飛び込んできた。

見れば野良着を着た街の住人が数名、足をもつれさせながら、くる。いつも携えている筈の農具も手にしておらず、相当に慌てているのは見ただけで分かった。

「……よし」

頷き合うユキナリ達。

「ユキナリ、無事で」

「ああ、心掛ける」

そう答えながら、ユキナリは、街中に戦いの始まりを告げる伝令役の者達の姿を見送った。

●

物見台の上で見張りを続けていたベルタの視界に――物々しく緩やかに森を迂回する形で続く街道から、一人、また一人と馬に乗り、鎧を帯びた姿の者達が湧いて出てくる。彼等は止まる事無く細長い隊列を組んでフリートラントに向かって進んでいた。

「……う」

怖い。ベルタはそう思う。

街に居るアーロン達を見てもう特に何も感じない。だが同じ格好をしているのに、森の向こうから続々と姿を現す宣教騎士達は、ベルタに強い圧迫感を与えていた。未だかな

りの距離が在る筈なのだが、足が竦む様な感覚が在った。
何か、刃物の様なものを喉元に突きつけられているかの様な――恐怖。
それが宣教騎士達の放つ敵意、殺気、そういったものなのは、ユキナリに対してだった。
間が必要だった。ベルタはユキナリが戦う場に何度か居合わせた事がある。だが大抵は異獣や亜神が相手で、しかもそれらが敵意や害意を直接に向けているのは、ユキナリに対してだった。
だが今は――恐らく彼等はこちらの存在を未だ意識してはいないだろうが――放散される敵意や殺気の矢面に立っているのはベルタなのだ。相手が変わったのではない。彼等と【戦う】積もりでそこに居るベルタが、以前は感じていなかった殺気や敵意の類いに、敏感に反応する様になった……という事である。
「わ……私……」
出来るだろうか。不安がまた胸の内で膨らんでいく。
あの者達に銃弾を撃ち込む事が出来るのか。だが彼等を止められなければ、街は間違いなく蹂躙される。そしてそれよりも何よりもユキナリが殺される。
暑くもないのに、額から汗がにじみ出るのをベルタは感じる。
手が痛くなるほど〈デールリンガー〉を握りしめた。練習をしていた際に感じていた以

上の重みが手の中にある様な気がする。これは他人の命を一方的に奪い得る武器だ。自分は今から誰かを殺そうとしているのだ。

「……」

未だ撃たない。

確実に命中させる事が出来る距離までは無駄に撃つべきではない——言い訳の様にそう自分に言い聞かせるベルタ。ほんの少し撃つのを先延ばしにしただけで、何が変わるという訳でもないだろうが。

森の奥から姿を現した宣教騎士はおおよそ七十名余り。更にその後ろから、超大型の馬車が悠然と進んでくる。その程の人間が徒歩で随伴して歩いているのが見えた。積み荷が何なのかは荷台に幌が掛けられているので見えないが、恐らくは守護聖人像だろう。

そして——

「そこまでじゃ——止まれ！」

凛然とした声が響き渡る。

全貌を見せた宣教騎士団の前に、一人の童女が数名の供を従えて立ち塞がっていた。

ウルリーケとイグドゥーラの眷属達である。

老若男女様々だが、髪は緑の色を示し、頭部に角の様な枝が生えているのが見て取れる。
しかし異形と言えばその程度なので、一見すると、何かの染料で髪を染め、角を模した装身具を頭に着けている様にも思える。
距離が在るのでベルタの位置からは詳細は分からないが……宣教騎士達の浮かべる怪訝な表情が見えるかの様だった。
「何だ君は？」
先頭の宣教騎士が馬上から大声でそう言うのが聞こえた。
「子供が来るところではない。そこをどきたまえ！」
勿論……ウルリーケとその宣教騎士の距離は、ベルタ程には離れていない。大声を出さずともお互いに聞こえるだろう。なのにわざわざベルタの位置でも恐らく恫喝の意図が在ったのだろう。立ち位置からはっきりと聞き取れる声を出しているという事は……
属達をウルリーケが率いているのは一見して分かった筈だ。相手は子供、ならば大声で脅せば怯えて道を空けるとでも思ったに違いない。
しかし……彼等はとんでもない勘違いをしている。
「やかましいのう。大声を出せば相手が怯えて退くとでも思うたか？」
そう言うウルリーケもまた大声である。こちらはベルタにも聞こえるように、という配

慮からだろうが。彼女は挑発するかの様な口調でこう続ける。

「幼稚な事、この上ないのう？」

「子供が生意気なー」

途端――宣教騎士達の態度が刺々しいものに変化する。

子供に馬鹿にされたのが我慢ならない、といった所か。

「おう、尻の青い小僧が生意気に吼えよるわ」

ウルリーケが笑い、そして眷属達も揃って笑う。

宣教騎士達は気付いただろうか――彼等が全く同じ調子で笑っている事に。

彼等の目の前に居るのは、見た目通りの存在ではない。そもそもウルリーケですらも数百年前の生まれだ。彼女からすれば、確かに宣教騎士達は洟垂れ小僧の類いだろう。

「我は地神イグドゥーラの眷属、ウルリーケである」

「なに？　今、なんと……？」

宣教騎士達の間に困惑の色が広がっていく。

無理もあるまい。イグドゥーラの様な地神は非常に珍しい。

そもそも宣教騎士達が思い描く『地神』は大抵が、異形で巨大で『さあ人間を喰らうぞ』とばかりに牙を剥き出しにした肉食の獣であろう。中途半端に人間めいた顔をしていても、

人間そのものといった姿の地神を見る事はまず無い。
「無知な輩に教えてやろう。我等は地神イグドゥーラにしてその眷属である。我等は個によって全、全にして個、汝等とは異なる摂理に生きる存在と心得よ！」
「地神、だと!?」
宣教騎士達の動揺はベルタにも伝わった。
それでも元々は各地の地神を斃す為に派遣された宣教騎士団の者達だ。混乱する事は無く、前に出ていた数名が、少し後退――細長かった隊列を組み直す。
「地神？　こいつが!?」
「やはり第六団は地神に……？」
どうやら彼等はイグドゥーラがこのフリートラントの地神である、アーロン達はイグドゥーラと戦って敗れたのだ、と勘違いをした様だ。恐らくこれは最初からウルリーケが目論んでいた事だろう。彼女は敢てロストルークの名を口にしていない。
「汝等にこの地を踏む資格を我は認めん。疾く去ね――さすれば見逃そうぞ」
殊更に傲然たる口調でウルリーケはそう告げる。
最初に相手を萎縮させ、叶能であれば引き返させる、それが無理でも説得で時間を稼ぐ、そういう腹積もりなのだろう。

しかし……は逆効果だった様だ。

「敵だ……」

「敵だ……！」

「敵だッ!!」

むしろウルリーケの言葉が膨れ上がっていくのをベルタは感じた。同時に彼等は口々に宣教騎士達の間で、敵意動き、完全に陣形を整えて——戦闘態勢をとっていた。何事かを叫びながら素早く既に説得どころの騒ぎではない。

それが分かったのか、ウルリーケ達も一歩、後方にさがる。あるいはその動きを『気圧された』と感じたのだろうか。途端ち——指揮官らしい一人が高々と叫んだ。

「抜剣っ！」

指揮官らしい騎士が叫ぶを抜き放つ。

部下の騎士達が次々と剣と銀色に刃が光る。それは、木々の緑日差しを受けてギラギラ死の象徴として、強烈な違和感を放つ中にあって……冷たく硬いていた。

「異形の化け物を討てー！」
「世に知性の光をもたらすのだー！」
「我等が神の為にー！」
それぞれ声を張り上げて騎士達が馬を走らせる。
既に彼等に動揺や躊躇は感じられない。相手が子供だろうが素手であろうが『敵』と認識した以上、彼等は迷い無く斬りかかれる。教義の名の許に全てを正当化出来る――罪の意識を都合に合わせて切り離せる、それがハリス真教会の宣教騎士達の強みだった。
対するウルリーケ達はやはり武器も無く、構える様子も無い。
そもそも眷属達は武術の類いなど知らないのだから、構えようも無いのだろうが。
そして――
「……愚か者共がッー」
泰然と構えていたウルリーケが、何処からか取り出した道具――『玉串』というのだと途端、騎士達が、乗っていた馬ごと、揃ってつんのめった様に一回転する。
ベルタはユキナリに教わった――を手に、まるで舞い踊るかの様に一回転する。
「なっ……!?」
躊躇無く突撃していただけに、被害は甚大だった。

先頭の十名ばかりが吹っ飛ばされる様にして落馬する。単に着込んだ状態で馬の背中から落ちれば、まずただでは済まないが悪ければ骨折だ。しかもその上に馬が倒れかかってくる事すらある。

地に落ちた宣教騎士達はいずれも起き上がれず、呻くばかりである。

「なんだ!?」

「こいつ、怪しい術を――」

後続の、何とか落馬を免れた宣教騎士達の間に緊張が走る。

彼等が注意深く地面に眼を向けていたならば、気付いたかもしれない。腐葉土に隠れて見えにくいが、そこに編み目を成す様に走る何十本という……

一本一本はそう頑丈ではないとしても、数本寄り集まれば、はなる。予めウルリーケ達が種をまき、イグドゥーラの力で急生長させておいたものだ。

更に――

ウルリーケを中心に、何処からか、何かが輪を描く様に降ってきて、地に突き刺さる。

それは――木製の棍棒だった。

太く、長いそれは、幾つかの突起や、持つための柄の部分が組み合わせて作られている訳ではなく、木の幹から直接削りだしたらしい、一つの塊だっ

た。

しかし……

「ぬっ!?」

馬での突撃は危険と判断した宣教騎士達は、馬から下りて身構えている。そこに眷属達は棍棒を手に躍りかかった。

「ぬおっ!?」

騎士の一人が老婆の一撃を食らって、構えた剣ごと吹っ飛ばされる。一見するとあり得ない様な——両者が示し合わせて演じている、喜劇的な光景だった。

「こやつ等……！」

別の騎士は猛然と、自分の傍に来ていた少年の姿の眷属に斬り掛かる。頭上から叩き落とす様な一撃を、少年姿の眷属に喰らわせられた棍棒によって易々と受け止められていた。

鍛えた騎士が、真上から重量のある剣で打ち下ろした一撃——ようとして、それは掲げしかも剣はろくに棍棒に食い込んでいない。非常に浅い部分で刃は止まっていた。

木は水に浮く——それが常識とされているが、実際には、ある種の木は水に沈む。そう

した木の多くは、重いだけで非常に硬い。眷属達が使って来た棍棒なのだろう。武器として振り回すには、相当な膂力が必要となるだろうが。

「ば、化け物！」

見た目からは想像もできないウルリーケ達の戦闘力を目の当たりにして騎士は叫んだ。だが訓練されている彼等は、退かない。

騎士達は次々と眷属に斬り掛かった。

上段からの斬撃が利かないのであればなぎ払う。これも防がれれば今度は足下を狙っての攻撃も防ぎきったが――しかし、状況はここで膠着状態に陥りつつあった。

眷属達は強い。単純な筋力でいえば騎士達よりも数段上であるし、それでいて動きも素早い。相手が獣や、武芸の修練を経ていない素人であれば、そのまま圧倒し、駆逐する事も出来ただろう。

だが宣教騎士達には、武芸という名の技術がある。

戦闘能力で劣る彼等は、しかし、戦闘技術では眷属達を上回る。眷属達にある動きの無駄が宣教騎士達には殆ど見られないのだ。

これが奇妙な均衡状態を生んでいた。

眷属達は先にベルタにウ
以前、ユキナリと戦った時
の生長を制御し、それその
様に罠を仕掛けておく程度
ウルリーケが挑発じみた
そして――
「くそっ、埒があかん！」
指揮官らしき宣教騎士が
「かくなる上はっ、聖人出
「おおっ！」
「聖人出陣！　聖人出陣ん
騎士達は眷属と斬り結ぶ
同時に馬車が大きく回頭
付近に取り付けられた鍵盤
を走らせる。
分厚く重なるオルガンの

ルリーケが言った通り、ロストルー
の様な強さは発揮できていない。ま
ものを武器として使う事も、出来な
。それも少々時間が掛かる。
会話で稼いでいた時間は、その為の
ものだった。
叫んだ。
陣！　聖人出陣だッー」
ッ!!」
のを止め、後退しながら口々に聖句
を唱え始める。
し……後方の荷台を、前に押し出す
楽器に一人が取り付き、これの蓋を
開けると、素早く両手の指
音が辺りに広がっていく。

そして――それは悠然と立ち上がった。

「……」

ベルタは息を呑む。

大きい。以前見たものと変わらない大きさである筈だが、今されてしまう程に巨大だ。人間の数倍は在る身の丈の、鋼鉄の巨人が、掛けられていた布をまるで外套の様に身に纏わり付かせて、ウルリーケ達の前に歩み出る。

守護聖人像。宣教騎士団の最終兵器。

「いけー！　邪悪なバケモノ共に、神の威光を知らしめるのだあっ！」

宣教騎士が吼える。

その声に促される様に、

宣教騎士達は後ずさる。眷属達は半円を描いて守護聖人像を取り囲んだ。

「ユキナリの話にあった、これが、教会の人形か」

とウルリーケが言う。

同時に眷属達は一斉に手にした棍棒をその足に向けて撃ち込んだ。

ごぉん、と鐘を鳴らすかの様な音が響く。しかし、それだけだった。

巨人は小揺るぎもしない。その装甲は分厚く、その巨体は重く、眷属達が揃って叩いて

もこれを壊す事も、退かせる事も、出来ない。
だが気圧される事無く眷属達は攻撃を続けた。
狙いは全て足だ。背丈に違いがありすぎるだけに、狙える場所がそこだけしかない。足のものには効果がなかったためか、臑や膝や小指といった人体の弱点とされる部分を狙うが——しかし、効果は無い様だ。
しかも……
「いかん、退けっ！」
何かを察知したのだろうウルリーケが叫ぶと同時に眷属達の守護聖人像の腰の辺りから、四方八方に炎が噴き出たのは次の瞬間だった。
「……ッ！」
炎の端に触れた眷属達の衣服が、燃え上がる。
彼等はしかし慌てず騒がず、燃えている部分を引きちぎって捨てた。人間としては既に死体同然の彼等は、この程度で恐慌状態に陥る事は無い……が。
「火を使うか……」
ウルリーケが唸る様に言う。
鋼と炎。それは獣は決して使う事の無い——人間の力そのものだ。

特に火炎は、植物型地神であるイグドゥーラにとっては、ほぼ唯一と言っても良い位の弱点である。眷属達に怯む様子は無いが、本体たるイグドゥーラの方では恐怖めいた何かを感じているかもしれない。

「見よ、神のご威光がバケモノ共が退かせるー」

「おおおっ」

宣教騎士達が歓喜の声を上げる。

実際には神の威光ではなく、単なる火炎である訳だが……それでも意味などあるまい。

守護聖人像は、一歩、一歩、フリートラントに向けて進んでいく。どうやらウルリーケ達を一人一人嬲すよりも本来の目的である街への侵入を優先するようだった。

「むう……」

ウルリーケが唸り、同時に眷属達が地面に仕込まれていた蔓を引っ張った。先程は騎馬を転倒させたそれを腐葉土の下から引きずり出し、縄を掛ける様にして守護聖人像を縛り付けて、動きを止めようというのだろう。

しかし――

「聖なるかな聖なるかな聖なるかなッー」

宣教騎士達の唱和と荘厳なオルガンの音色が鳴り響く。
次の瞬間、守護聖人像は巨大な剣を引き抜くと、自分に巻き付けられた蔓を残らず切り払い、巨体に絡みついて残った部分も、引きちぎって捨ててしまった。
やはり守護聖人像を眷属の力だけで止める事は難しい。
「私……私は……」
ベルタは〈デールリンガー〉の銃床を握り直す。
ただ見ているだけでは意味が無い。何の為に何百という弾を使って修練を積んできたのか。今此処で撃たねばならないのだ。そうせねばユキナリの役に立てない。そうせねばユキナリを守れない。
「……」
覗き込んだ光学照準器の視界の中で、傲然と守護聖人像が歩いて行く。
ベルタは息を止め、眼と指先に全ての感覚を集中して――一撃を送り込むのに最適の瞬間を、待った。

虚空を断ち割らんとするかの様な勢いで、巨大な剣が振り下ろされる。
ユキナリは身を翻してこれを回避していた。
巨剣はそのまま地面に叩き付けられ、亀裂の如き溝を穿つ。剣そのものの重量と守護聖人像の膂力が生み出す――これもまた一種の『奇跡』なのだろう。少なくとも人間には到底繰り出す事は不可能な一撃だった。
ユキナリとて、これをまともに喰らえば、ひとたまりもない。
既にアーロン達がユキナリに敗北したという事は窺い知った上で、ある程度の『覚悟』はしていたのだろう。宣教騎士団は姿を見せると同時に、問答無用で守護聖人像を起動、そのまま攻め込んできた。
むしろユキナリの方が全力を出す為の準備をする機会を――〈蒼い御遣い〉の姿になる機を逸してしまった位だ。
しかも……
「おいおいおい……！」
ユキナリは顔をしかめる。
宣教騎士達は、守護聖人像を出して尚、彼等自身も後ろに下がる事は無かった。守護聖人像の攻撃に巻き込まれる事を恐れていない。予め綿密な打ち合わせがされているのか、

それとも巻き込まれて自分が死ぬ事も厭わないのかは、分からなかったが。

ユキナリが、素早く立ち回って守護聖人像の一撃を回避したところに……宣教騎士がまとめて斬り掛かってくる。

さすがに数は多くない。

宣教騎士達は密集隊形を取らず、数名が波状攻撃の形でほぼ同時に――しかし微妙に機をずらして斬り掛かってくる。優れた動体視力と身体能力でこれを回避する事は可能だが、〈御遣い〉本来の姿に【変身】する余裕は無かった。

しかも――

「――ッ!?」

宣教騎士達が唐突に左右に退いて――割れる。

その隙を縫う様にして、巨剣が振り下ろされたのは次の瞬間だった。ユキナリは体勢が崩れるのも構わず身体を捻ってどうにかこの一撃を回避した。

刃の起こす風が頬を撫でる。

もう数センチ近ければ頭を砕かれていただろう。いや。数ミリでも肩ごと腕を切り落とされていたかもしれない。〈御遣い〉の能力を使えば復元は可能だろうが、どうしても無防備になる瞬間が生じる。その間に宣教騎士達に斬り掛かられては防ぎようが無い。

「……やっぱり厄介だな、コイツ」

守護聖人像の動きは速いといった単独の動作に限った話――例えば一撃を避けられたときただしそれは斬撃、蹴りといった一撃に移るまでの動きは、全体としてみればむしろ緩慢だ。

ころから身体を返し、次の一撃に移るまでの動きは、全体としてみればむしろ緩慢だ。

これは守護聖人像の動きが、短い動作単位で分割され、その組み合わせで成り立っているからだ。例えば剣を振り下ろす、一歩前に出る、その動きそのものは予め機械的に組み込まれている為、構造上の限界に近い速度が出る。だが別の動作と組み合わせる為、自ずと無駄が生じるのだ。

場で宣教騎士達が行っていた動きになる。

結果、妙にぎくしゃくとした動きになる。

これが、しかしまるで爬虫類か何かの動きの様で、微妙に先読みしにくい。

（むしろ制御している奴を叩くのが一番簡単なんだが――）

守護聖人像のあちこち、主に背中には、大量の、命令受信用の音叉が装着されており、運搬用馬車に据え付けられたオルガンの音を介して、宣教騎士達はこの巨大兵器を操っている。つまり、そのオルガンの奏者を叩けば守護聖人像そのものを破壊しなくとも、無力化は出来る筈なのである。

しかし……守護聖人像に加えて、宣教騎士達の波状攻撃の為、ユキナリは〈デュランダ

ル〉の有効射程まで中々近づく事が出来ない。当たれば幸運、駄目元で、と撃ち込んでみるのは可能だが、銃の特性に気づいて相手が引っ込むと厄介だ。守護聖人像に命令を下しているのは音なので、オルガンごと物陰に隠れられては、もう狙う事は出来ない。

とはいえ……

（今度の指揮官は、えらくまた無茶をするな）

守護聖人像は、前述の通り、宣教騎士達が予め定められた動作を選択して組み合わせ、動かしている。つまり、実際の人間の様に、精密な狙いを定める事などできないし、咄嗟に剣を引く事もできないだろう。

前に出る宣教騎士達にとっては、かなり危険な状態である。予め打ち合わせはされているとしても、一歩間違えば、敵ごと守護聖人像の剣で刈り取られるかもしれないのだ。

どうにも守護聖人像に近づけない。

もっとも守護聖人像は、近接戦闘用として、腰の辺りに火炎放射器を装備している。宣教騎士達が居るお陰で、それを使ってこないので、上手く彼等をかわして近づければ、守護聖人像を破壊するのは、ユキナリにとって簡単なのだが。

「……！」

背後で剣戟の音が鳴り響く。

視線だけで確認すると――ヴェロニカが長柄戦斧で宣教騎士達と斬り結んでいた。ユキナリに波状攻撃を仕掛けている者達とはまた別の、大きく左右から回り込み、街に向かった者達である。ヴェロニカはそれをまとめて引き受けてくれているのだ。

更に――

「ユキッ……！」

叫びと共に銃声が響く。

ユキナリの背後に回り込んだニカに斬り掛かる宣教騎士達も居るが、こちらはあくまでダーシャの護衛役である。彼街門の脇からダーシャが〈レッチリ〉で援護してくれているのだ。

〈ランダル〉を持った街の住人達等に乱戦状態の敵を狙い撃つ技量はさすがに無い。

「せやッ！」

ダーシャの狙撃で宣教騎士達の動きが鈍った所を、ヴェロニカがまた一人、騎士を突いて倒す。彼女は宣教騎士達に比べれば軽装である為、動きが素早く、相手の隙――鎧の隙間を狙って剣の届かない間合いで長柄戦斧を一撃、仕留めても仕留めなくても次に移る、という戦法を繰り返していた。

宣教騎士達は彼女に翻弄され……更には銃声に動揺して動きが鈍っていた。

「なんだ、今のは!?」

「雷か!?　しかし――」

彼等は銃というものを知らない。

銃弾は目に見えないし、銃撃を受けただけでは咄嗟に何処から誰に何をされたのかも分からない。目の前のユキナリやヴェロニカに注意を向けている為、少し離れた場所に居るダーシャの攻撃だとは理解出来ていないのだ。

あるいはユキナリやヴェロニカの攻撃だと誤解しているかもしれない。

しかし……

「さがりなさい！　聖人前進ッ！」

大型馬車の御者台の上、制御用の旋律を奏でるオルガンの横で女の宣教騎士が叫ぶ。

どうやらあの女騎士は、離れた場所から全体を指揮している関係で、『銃』に――というよりダーシャの攻撃に気付いた様だった。

宣教騎士達が後方にさがり始め、守護聖人像が前に出る。

好機とばかりにユキナリも前に出るが、守護聖人像に手が届く距離まで肉薄する前に、

吹き付ける炎に阻まれた。

更に――

「弩に切り替え！　構えッ！」

宣教騎士達は後退しつつも、背中に背負っていた弩弓を構える。

彼等はそれを前進する守護聖人像の脇から射ってきた。

「ちっ……！」

咄嗟に〈デュランダル〉でこれを弾くユキナリ。

だが一斉に放たれたそれを全て叩き落とす事は出来ず、肩に、太ももに、鉄製の矢が突き刺さる。〈御遣い〉の身体であっても、これだけは変わらない激痛が、ユキナリの手足を這い回った。

「ユキ……！」

「出てくんなッ！」

ダーシャの叫びが聞こえるが、ユキナリは前を向いたままそう叫んだ。

そしてそれに被さる様に――

「――!?」

万雷の如き銃声が轟いた。

「ぐわっ!?」

ユキナリに矢が命中したのを確認し、改めて前に出ようとした宣教騎士の一人が、肩を押さえて仰け反る。同時に辺りの地面がまるで泡立つ様に、あちこちで弾けるのが見えた。

「ユキナリ様を、ユキナリ様をお助けするんだー」

街門の傍、ダーシャの脇に控えていたフリートラントの住人達がそう叫ぶ。

彼等が一斉に〈デュランダル〉を撃ったのだ。

「街を守るぞー」

「教会の奴等に好き勝手はさせねえー」

彼等は口々に叫びながら街を支配しかけた事があったが……そのせいで街の住人達は、アーロン達が前に一度、意気を上げる。

ハリス真教会が街を占拠すれば自分達がどう扱われるかを理解している。これがヴェロニカの訓練と相まって、彼等に十分な戦意を抱かせた様だった。

勿論、今の一撃はただの偶然――放たれた弾丸の殆どは地面にめり込んだだけだ。多くの場合、訓練が十分でない素人の撃つ弾は、下に狙いがずれる傾向がある。反動に対してつい予め対応しようと、引き金を引く瞬間、余計な力が手に掛かる――いわゆる『ガク引き』という現象だ。

恐らく今の彼等に、狙って当てる事は至難の業だろう。

だが……

「な、なんだ今のは!?」

「先程も……あれは、地神の呪いか!?」

「こ、後退だ、守護聖人像の後ろに、後ろに！」

女騎士の指揮を待たずに、宣教騎士達が更に後退する。

守護聖人像の攻撃に巻き込まれて死ぬ覚悟は在っても、訳の分からない異教の攻撃はやはり恐ろしいという事か。彼等にはやはり銃撃がある種の呪術か何かに見えているのかもしれない。

「聖人前進ッ!!　前進んんッ!!」

女騎士が叫び、守護聖人像が前に出る。

腰の火炎放射に加え、手に持った剣を振り回し続けている為とても近づけない。

「あれだ、あれをやっつけろ！」

フリートラントの住人達は〈デュランダル〉で守護聖人像を攻撃するが――効果が上がらない。さすがに仰角をつけて巨大な守護聖人像を狙うので、地面に着弾する様な事は無かったが……守護聖人像の装甲は分厚く、拳銃弾では貫通出来面に咲き乱れるだけだ。

しかし……

「ユキナリ、今のうちだ」

ヴェロニカがユキナリに肩を貸し、背を低くして街の方へと後退する。

だが少し移動した所でユキナリはヴェロニカの手を掴んで首を振った。

「悪い、まずこの矢を抜いてくれるか」

「……むしろ流血が増えるぞ」

「いいから、早く。異物が身体にねじ込まれてると、集中出来ないんだよ」

「……」

ヴェロニカは頷くと、ユキナリを下ろし、次の瞬間、猛烈な勢いで旋回させた長柄戦斧（ハルヴァード）の柄で――正確にはその先端の金具、石突きの部分で、ユキナリの肩を貫通している矢の先端を叩いた。

「ぐっ――」

鋭い痛みと衝撃。

だが矢は一瞬でユキナリの身体から抜けていた。

武芸に長じたヴェロニカならではの、抜き方である。続けて彼女は太ももの方の矢も同様にして抜いてくれた。傷口からは血が――いや実際にはユキナリの身体を流れているの

は血と似て非なる物質だが――零れ落ちる。

「ユキナリー」

叫びと共にヴェロニカがユキナリを突き飛ばす。

反動で彼女自身も後方に跳び、二人が一瞬前まで占めていた空間を守護聖人像の剣が断ち割ったのは次の瞬間だった。

「ヴェロニカー」

「私は問題無い、逃げろー」

ヴェロニカが地を転がりつつそう叫んでくる。

一方――

「まずあの白髪の男を潰しなさい！」

女騎士がそう命じる。

太ももを射貫かれたユキナリは未だ満足に動けない、そう判断しての事だろう。

「ユキー！」

「ユキナリ様ー」

ダーシャやフリートラントの住民達が銃撃を繰り返すが、塊とも言うべき守護聖人像が退く事も倒れる事も無い。

勿論、その程度で重装甲の

ユキナリは、意識を集中して身体の復元を試みるが――

「潰しなさいー」

一歩、二歩、前に出て確実にユキナリを間合いに捉えた守護聖人像の剣が振り上げられる。さすがに『変身』も肉体修復も間に合わない。

しかし……

「宣教騎士を後ろに下げてくれて、助かったよ」

ユキナリは呟いて、〈デュランダル〉を撃った。

守護聖人像ではなく、自分の、すぐ傍の地面に向けて。

轟音が辺りの空気を揺さぶる。

「なにっ!?」

動揺する女騎士。

当然だろう――盤石の動きでユキナリに迫っていた守護聖人像が、大きく姿勢を傾かせたからである。その右足が大きく、地面に沈んでいた。

予めユキナリが仕掛けておいた――守護聖人像対策の落とし穴だ。

深さ二メートルばかりで穴というよりは横に長い溝を掘りだ上で爆薬を仕掛け、土を被せておいた代物である。

守護聖人像は、きちんと制御されていれば、その途方も無い能だが、中に人間が乗って逐次アナログ的に制御している訳で意味では、非常にデジタル的で…だからこそ、突発的な状況には弱いとユキナリは踏んでいた。

例えば、落とし穴に片足を突っ込んでしまう様な。

勿論、これで守護聖人像を破壊出来るとは思っていない。人仕掛けてあるのでもない限り死なないだろう。

落とし穴ならば、下に槍でも二足歩行というものは、相当に微妙な均衡で成り立っていだが、人型機械の制御、特にる。一旦、姿勢を崩して倒れてしまうと、そこからの復帰は手間取る筈だった。

実際――

「何をしているのですか、起こしなさい、早く！」

女騎士が悲鳴じみた声でそう叫ぶが、守護聖人像は痙攣する身を起こせない。単に平地で倒れた程度であれば、身を起こす動きは予め組み込んであったかもしれないが……片足を落とし穴にとられた状態となると、途端に組み合わせる動き

も複雑化して、難度が跳ね上がるのだ。

元々は、こうして艶しておいて、じたばたと藻掻く守護聖人像にユキナリが駆け寄り、物質変換の力で足なり胴なりを塵に還す積もりだったのだが――

「……」

ユキナリは意識を身体に集中する。

ぱん、と何かを拝む様にあわされた両手の間から青白い光が漏れ始め、次の瞬間には辺りを圧する程の眩しさにまで膨れ上がる。物質を変換する際に生じる錬成の光だ。

人の姿のままでは行使しきれない力を、使う為の身体へのし――ユキナリ自身の変換。

そして――

「そ、その姿は――」

女騎士が驚きの声を上げる。

「〈蒼鋼の冒涜者〉……！」

蒼黒い異形の騎士――ユキナリのその姿を見た者は、先ずそんな印象を受ける。

無駄な装飾は持たず、ユキナリの体にぴたりと密着するかのような装甲は、まるでその鋼の肌を持った一つの生物であるかのように生々しい輪郭を備えていた。

唯一の例外とも言うべきものは、背中の翼だ。

黒水晶で作られたそれは、しかし飛ぶ為のものではなく、物質変換の際に生じる膨大な余熱を放出する為のものだ。

この姿を採る事でユキナリは装甲で身体が内から弾け飛ぶのを防ぎ、翼で熱を放出する、〈御遣い〉としての力を十二分に使える事になる。

「ユキナリ様が！」

「我等の神が、戦装束を!!」

「ユキナリ様！　ユキナリ様！」

歓喜に沸き上がるフリートの住民達。

彼等の声援を背中で受けつつ――しかしユキナリは仮面の下で苦笑を浮かべていた。

やはり自分は彼等を甘く見ていた、というか侮っていた様にすら思う。

彼等はユキナリが守らなければ何も出来ない様な、無気力で非力な存在ではない。

いや……かつて地神の支配を受けていた際にはそうだったかもしれないが、ユキナリに彼等の『神』が代替わりし、ユキナリの行動や考えに触れている内に、きちんと彼等自身が積極的に物事を考える様になってきていたのだ。

世界は変えられる。運命は変えられる。

現状が不満であるなら、自分達が望む形に。

それを彼等は学んだ。学んでいた。

だから理不尽な支配をしようとする者に対しては、武器を手に戦える。

フィオナの言った通りだ。

ユキナリはフリートランドの防衛について、基本的に自分一人で全て背負い込む積もりだったし、それ以前に、ハリス真教会の支配領域の拡大については、自分達に火の粉が掛からなければ気にしない積もりでいた。

だが、いつまでもそのままでは居られない。

むしろユキナリは彼等に教えられた気分だった。

「〈蒼い御遣い〉……堕天の使徒！」

宣教騎士達の間に驚きと怯えの声が飛び交っていた。

〈蒼い御遣い〉、もしくは〈蒼鋼の冒涜者〉。

それが、王都でハリス真教会の中心部に壊滅的な打撃を与えられた名前だ。教会の威信を傷つけぬ様にと対外的に件の事件は秘密になっているものの、宣教騎士達の多くはそれを知っている。何しろ宣教騎士団も中枢に居た者達が軒並み殺され、再編成を余儀なくされて、随分と教化遠征の予定もずれ込んだからである。

彼等にとって、〈蒼鋼の冒涜者〉は悪夢そのものだ。

その存在は彼等の信仰すら揺るがしかねない。

だが……

「ひ、退いてはいけません、恐れてはいけませんッー！」

鞘に入ったままの剣を掲げて女騎士は喚いた。

「我らは亜神をも誅する宣教騎士団！　たとえ相手が〈御遣い〉であろうと、怯む必要など微塵も無しッー！　吶喊！」

女騎士の叫びに促され、宣教騎士達が武器を構え直す。

オルガンの旋律が狂気じみた早弾きで辺りに響き渡り、守護聖人像もようやく、巨体を軋ませながら立ち上がる所だった。

「戦いはこれから――」

「そうだな。まあすぐ終わるけどな！」

ユキナリはそう告げて――錬成を開始した。

●

空気が、変わった。

それは倉庫に閉じ込められていても肌で感じる事が出来た。

ささくれ立つ様な……それでいて身体に纏わり付く様な、独特の空気だ。『牢屋』は壁に接する様にして設置されている為、壁際に寄ると換気用の窓の真下に立つ事が出来る。耳を澄ませばそこから、遠雷の様な銃声と、重い何かがぶつかる際のものらしい音も聞こえてきた。

恐らく守護聖人像だ。

街の中は静まり返っている為に、余計、街壁の外の音が他に紛れずよく伝わってくる。恐らく住人達は家の中に引きこもって息を潜めているのだろう。

「……」

アーロンは手の中の道具に視線を落とした。

これを使えば此処から抜け出す事は可能だろう。後は取り上げられたアーロン達の武具を奪い返し、戦場に駆けつけてユキナリやヴェロニカを挟み撃ちにすれば良い。いかにユキナリが強いといっても、背後から攻められては対応し切れまいし、何ならフィオナ辺りを人質にとっても良い。

光輝満つる宣教騎士団の一員としては人質をとるのはどうかと思う気持ちも在ったが、正しき教えを広げるという大義の名の許には、大抵の行為は許される、それがハリス真教会だった。

「……」

アーロンは早速、作業に取りかかる。

他の騎士達は、黙々と道具を片手に作業を始めたアーロンに等は特に何も言わず、その手元を見守っていた。

もしアンジェラ達がユキナリを斃す事に成功すれば……縄を未来をふと想像するアーロン。

街の様子はきっと変わるだろう。

それはかつてアーロン達が行いかけた『教化』の達成を意味し様な聖印を首に填められ、刃向かう者には苦痛が与えられる。

事を何よりも先ず、人々は強制される。

初めてフリートラントを訪れた時……街の連中が恐怖に顔をは思い出す。あの時の彼はそれが当然で、高尚で、尊く、まと信じて疑わなかった。不服従によって一瞬の痛みや恐怖を加り崇高なるハリス真教会の教えに目覚めさせる為に、それは必ハリス真教会の教えは素晴らしい。

アーロンはそう思う。

しかし……

『でも、感謝しているのは本当のことよ。今日の仕事が終わったら甘い物でも用意させておくから、楽しみにしてなさい』

『うん。ありがとう、らんずだうんきょうの、おぢちゃん』

『俺からも礼を言う。ありがとう。フィオナから聞いた。フィオナと、それからあの子らと……街の皆を守ってくれたんだよな。俺の留守中に』

「……」

自然と眉間に縦皺が寄った。

あの空飛ぶ亜神が街を襲った時……確かにアーロン達はフリートラントを守って戦った。

別に下心があったわけではない。

住人の歓心を買おうなどと思った訳でもない。

殆ど何も考えていなかった。勝手に体が動いただけだ。フィオナに何故と問われて『信

徒になり得る者を守った』などと適当な理屈をでっち上げてみえていた訳ではない。

しいて言えば、あの醜い怪物に人間が蹂躙されるのが我慢ならなかっただけだ。

その結果――与えられたのは、金でも物でも名誉でもない。

の誰かに見せびらかす事も出来ない、単なる音の羅列だった。

感謝の言葉。

あんなものはその気が無くても言える。本当にただの言葉だから意味など無い。気にする必要は無い。

「……」

縄を数本、切る事が出来たその場だけで消え去り、他牢を成している木材数本を強引に押すと、何とか人が一人くぐり抜けられそうな隙間が出来上がった。ここから先は簡単だ。倉庫の扉は内側からなら換気用の窓まで登って、そこから出てもいい。

「あの、ランズダウン卿……？」

そこでようやく、仲間の一人がおずおずと声を掛けてきた。

「まさか……ここから出る……と？」

「そのまさかだが？」
とアーロンは他の宣教騎士を振り返って言った。
「ですが……それは」
宣教騎士達の顔には躊躇の色が滲んでいた。
ここしばらくの扱いで、すっかり、彼等はフリートラントの住民に気を遣って躊躇してしまう。元々、是が非でもと違って、街の巡回警備や商隊の警護についていた者達は、フリートラントの街に協力的でいる事に抵抗を感じていなかった者が多い。
アーロンは改めて宣教騎士達を一人ずつ睨み据えて言った。
「強い者につく。それが私の信じる道だ」
アーロンはそう告げた。
「知っての通りハリス真教会は強い。今や王族や貴族ですらも、教会の意向を伺う事無しには何も出来ない。世界最強はハリス真教会だ。それは間違いは無い」
「それは……」
宣教騎士達は顔を見合わせる。

アーロンの話は改めてされるまでもなく誰もが知っている。
「だから私は宣教騎士団に入った」
弱い者が一人で吼えようが何も変わらない。一人暴れようが、より強い者の庇護の下に入るしかないのだ。
る。自分が自由でいる為にはあっても無敗ではなかった」
「だがハリス真教会も最強ではなかったのだろう。
「え……？」
意外な事を言い出したと思を浮かべている。
宣教騎士達は戸惑いの表情
「教皇猊下は殺害され、宣教騎士団本部のお偉方も殺された。犯人は未だに捕まってはいない。天罰が下る事も無く、のうのうと生きている」
「それは――あの」
「見方によっては、教会が負けた、ともとれる」
「……」
「私は強い者が好きだ。強い者の側につく。何と言われようとそれが私の信条なのだ。だから――」
アーロンは一同を見回して言った。

「私は〈蒼鋼の冒涜者〉の側につく」

「……」

どよめきが宣教騎士達の間に広まっていく。

まさか、アーロンがフリートの側について戦う為に脱出しようと思っていたとは、誰一人考えなかったのだろう。

「異論がある者は今すぐ前に出ようとはしない。敵となる前にここで叩き潰しておく」

アーロンはそう言うが、誰も前に出ようとはしない。

「無理にこちらの味方をしろとは言わん。この行動が背信だ、耐えられない、そう思う者はここへ籠もって目を閉じ耳を塞いでいろッ！」

腹の底から、あらん限りの力を振り絞ってそう叫んだ。

それはハリス真教会を裏切るという宣言だ。アーロンとて全力を振り絞らなければとても口から出せなかった。他の宣教騎士達が尚も戸惑いの表情を浮かべているのも当然だろう。伊達に経典を読み、朝晩に祈りを唱えてきた訳ではない。彼等の中にはしっかりとハリス真教会の教えが根を下ろしている筈だ。

アーロンは彼等の反応を待つ事無く、『牢』から這い出すと、取り上げられた武器がある筈の場所に向けて走り出した。以前と変わっていないなら、アーロン達が閉じ込められ

ていた倉庫から、すぐ近くである筈だ。

「……」

後日――自分の行いに後悔をする日が来るかもしれない。

一時の気の迷いで在ったとは、この日の行動を恥じ入る事になるかもしれない。

だが――

「感謝されるのは、気持ちの良いものだ！」

アーロンの顔には、何故か晴れ晴れとした表情が浮かんでいた。

●

銃本体を横に傾け、長い銃身を中程で折り、口を開けた薬室に弾丸を押し込み閉鎖する。

傾きを戻して光学照準器を覗き、中に浮かぶ交差線に守護聖人像を捉えた。

「……」

息を殺して身体から銃に伝わる揺れを抑え込む。

何度も繰り返した練習そのままに、ベルタは引き金を引いた。

轟音。

耳にねじ込まれる様な強烈な銃声と共に弾丸が撃ち出される。ユキナリによれば、ダーシャの〈レッチリ〉や彼の〈デュランダル〉よりも遙かに強力な弾丸が、蹴りつける様な反動をベルタの身体に残して飛んで行く。

標的の人形ならば一撃で身体を貫通される威力。

だが――

「……あ」

ベルタが声を漏らす。

命中はした。だが表面に火花が一つ咲いただけで、巨人は小揺るぎもしない。その装甲も光学照準器で確認する限り、それだけだ。

「……きか……ない……？」

相手は人間ではない。生き物でもない。

だからこそベルタは比較的、躊躇無く引き金を引く事が出来しかし撃つ事が出来ても、効果が無ければ全く意味が無い。

「……そんな」

改めて息を止めて引き金を絞る。

二度目の強烈な反動と銃声をその場に残し、弾丸は再び守護聖人像を襲い――そして同じく火花を一輪咲かせただけだった。

「……」

ベルタは再び銃を斜めに倒して銃床部分を折り曲げ、薬室を開放――自然とはじき出された空薬莢の代わりに、新しい銃弾を装填する。練習したお陰で、この辺りはもう殆ど無意識の内にこなせる。

しかし、このままでは何発撃ち込んでも守護聖人像は斃せないだろう。

この〈デールリンガー〉はユキナリが携えている〈デュランダル〉と同じ原理で動いているる武器だ。ユキナリだったら、あるいはダーシャであったなら、もっと有効に使うことができたのだろうか。

自分は、やはり能なしの役立たずか。

そう思うと哀しい気持ちが胸の奥から湧き出てくるが、それに浸っている暇は無い。

物見台側の状況は一進一退を繰り返している。

ウルリーケ達は――眷属達は善戦してくれていた。

勿論、地神イグドゥーラの力を充分に発揮出来ないのは同じだ。そして彼等の武器や膂

力では守護聖人像を破壊する事もまた出来ない。ただ、ウルリーケ達はすぐに考えを切り替えると、守護聖人像ではなく、その背後に居る宣教騎士達を襲いかかった。

こちらであれば、互角かそれ以上の戦い方が出来る。

そしてウルリーケ達が宣教騎士達を押さえに掛かっている為、守護聖人像はこれを無視して前に進む事が出来ず、命令を下すオルガンの奏者が前に出る為には、守護衛役の宣教騎士達と共に、オルガンを積んだ大型馬車を前進させねばならないからである。

だが宣教騎士達とウルリーケ達の戦力はほぼ拮抗状態だ。

このままでは全く埒があかない。

今此処で自由に動けるのはベルタだけだ。

ならば彼女が何とかせねばならない。あの守護聖人像が街に入って、もう一体とユキナリを挟み撃ちにしたら、いくら彼が強くても勝てないかもしれない。

「なんとか……なんとかしないと……！」

呟きながらベルタは更に狙撃を繰り返す。

効果が薄いとしても、これが自分に出来る精一杯だ。自分の事実にすがりつく様にしてベルタは狙撃を続けていく。

それに与えられた役目なのだ。そ

「……落ち着いて……落ち着いて……」

自分にそう言い聞かせる。

焦っては当たるものも当たらなくなる。そうユキナリに教わったではないか。

だから愚直にベルタは彼の教えを実行しようとする。落ち着く。慌てない。焦らない。

何も考えない。〈デールリンガー〉の一部で在るかの様に、ただ、ひたすら、装填、照準、射撃、排莢を繰り返す存在として動作を続けていく。

しかし――

「おい女っ！」

「ひゃっ!?」

突然背後から声を掛けられベルタは思わず叫び声を上げてしまった。

知らぬ間に宣教騎士に回り込まれたのか。恐怖で身を竦ませながらベルタは〈デールリンガー〉から手を離して背後を振り返る。長く重い〈デールリンガー〉を背後に向けるのは、およそ現実的ではなかったし、ベルタは考えもつかなかった。

「ア、アーロン、さん……？」

驚いた事に、そこに立っていたのはアーロンだった。

彼は額に玉のような汗を浮かべ、肩で息をしている。どこからか全力疾走をして今此処

に辿り着いた、といった様子である。
「状況はどうなっている!?」
「は、はい！」
「はい、ではない！　状況はどうなっているかと聞いている！」
「ひっ……」
強い口調で怒鳴られベルタは身を竦ませる。
アーロンの顔は勿論、知っていたが、彼と個人的に口をきいた事は殆ど無い。だから彼が自分に向けて怒りの表情で話し掛けてくる、それ自体が、ベルタには恐怖だった。
しかし……
「ああ、もういい、退け！　と思ったのか、アーロンはベルタを押しのけるようにして物見悠長に待っていられない膝をついて、戦いの様子を見た。台の端に行き――そこで片きているか！」
「やはり守護聖人像が出て、ベルタは――はたと気付いた。アーロンの呟きを聞いてこの街にやってきたのだ。アーロンは守護聖人像を携えてかつて、アーロンらも守。あるいは彼ならば、狙うべき場所人像の事をよく知っている――弱点とも言うべき場

を教えてくれるかもしれない。
「あ、あの、ランズダウン……様……？」
「女ー　それがユキナリが言っていた狙撃銃という奴だな？」
アーロンはベルタを振り返って言った。
「ここからでも、敵を攻撃できる銃だな？」
「あ、は、はい、そうですー　でも、あの巨人は頑丈で、その、当たってもまるで平気で……」
「当たり前だー　守護聖人像の装甲がどれだけ厚いと思っている!?」
「す、済みません……」
「闇雲に撃っても無駄だ！」
アーロンはそう言って額に手をかざし、眼を細めて遠くを見遣る。
やはりアーロンには何か策があるのだ。
ベルタは期待を込めて彼を見つめる……が。
「狙うならば守護聖人像を操る奏者だー」
「え……!?」
「あの守護聖人像は、オルガンの音で操られている。オルガンを演奏できる者がいなけれ

ばもう動かん！　演奏者を撃て！　あの馬車の御者台近くに居る奴だ！」

「……」

ベルタは絶句した。

奏者は――人間だ。

「人……人を、撃つ、んですか……？」

「何を惚けている！　守護聖人像に攻撃が利かんなら、奏者を撃つ！」

どうしようもなく当たり前だ。

「でも、でも人……人間なんですよ……!?」

「でも人……人間なんだ。ベルタと同じ、人間。生きている。血の通った、それを――撃つ。殺すという事だ。

「だから何だ!?」

「そんな……酷い……事……！」

「……ならば何故お前は、それを持って此処に居る!?」

アーロンは苛立たしげにそう言ってきた。

「殺す覚悟も無い奴が武器を持つな！　戦陣に立つな！」

「ご、ごめんなさい、で、でも」

「くっ――」

アーロンはしかしベルタに眼を向ける。

「イグドゥーラの眷属共めと、アーロンは身を翻して物見台を吐き捨てる様にそう言うと、

「かくなる上は、私が馬車まで近づいて、奏者を斃せば――」

「あ、あの、ランズダウン！　戦い方がまるでなっとらん！

「女、お前にやれる事をやれ！　お前にしか出来ない事をやれば、自分が奏者を斬ろうというのだろう。確かにアーロンは宣教騎士だ。だから相手の宣教騎士達も彼を仲間だと考えて、攻撃を仕掛けたりはしないだろう。

しかし……この乱戦状態の中で、ウルリーケ達と斬り結ばずそれ以前に、ウルリーケ達はアーロンを見て、宣教騎士達はどう考えるだろうか？　そして奏者の所に辿り着くのは、難しい様にも思えた。

「でも……」

ベルタは、仕方なく〈デールリンガー〉を持ち上げ光学照準器を覗いた。守護聖人像の向こうに控える宣教騎士達の姿は見えた。アーロンが言う、オルガンを演奏する者の姿もだ。

ただ、守護聖人像が手前に居るせいで、時々その巨体が射線を遮って邪魔をする。

「私……」

やるのか。できるのか。自問するだけで胃が重くなる。

そんなベルタの目の前で、ウルリーケ達は懸命に戦っていた。

ウルリーケは、言った。

戦わなければロストルークが、自分の街が危険にさらされるから戦うのだと。そしてユキナリも殺されてしまうのだと。

ヴェロニカは、言った。

じっと身を固くして待っているだけではかえって状況が悪くなることもあると。それは、ユキナリやダーシャとの関係についての話だったが、目の前の状況についても、当てはまる。

怖いからといって、ただ黙って問題が過ぎ去るのを待っているだけでは、後悔してもし

きれない状況に追い込まれる事がある。嫌でも自分の手で何かを成し遂げねばならない瞬間がある。

それは理屈として理解は出来た。

でも怖い。

でも……

「女、お前にやれる事をやれ！　お前にしか出来ない事をやれ！」

アーロンはそう言った。

かつて敵であった筈の彼が、そう言って、彼にしか出来ないどういう心変わりがあったのかは、ベルタには分からない。

しかし――

「私にしか……出来ない事……」

初めてユキナリがベルタに与えてくれた御役目。

初めてユキナリがベルタに与えてくれたもの――〈デールリンガー〉。

生け贄として捧げられ、巫女として仕えるようになってからも、まともに役に立ったことはなかった。些細な生活の下働き程度で、神たる存在への供物の役目が果たせるとは思っていなかった。できることがないのなら、『女』として役に立てればと覚悟を決めていたが、一向に手をつけられる様子もない。

ベルタがどう役立てばいいか手をこまねいている間にも、ユキナリがこの街にもたらした恩寵は、まさに神の威光と呼ぶに相応しい、大きなものだった。多分、孤児院の『妹』達も餓える事無く生きていけるし、大きなものだった。生け贄も無ければ口減らしも無い。自分達は明日に、いずれくる未来に、怯えながら生きずに済む。

ベルタにとってユキナリは憧れだった。

彼に少しでも恩返しをしたかった。

その為に自分を捧げる。

身体を。精神を。生命を。存在全てを。

ならば――

「……」

ベルタは、自分が、自分の事しか考えていなかったのに気づいた。自分が怖いから、自分が他人を傷つけたくないから、自分に自信がないから、できないと思っていた。嫌だ、

怖い、そう思った。

ユキナリに自分を捧げると、言っていたくせに。

怖いと思うこの気持ちも彼に捧げればいい。

何かを失うというのならば、それこそが、彼に自分を捧げる事が出来た証だ。

「……」

ベルタは改めて光学照準器を覗き込む。

怖いのはそのままだった。震えそうになる自分を必死に抑え込む。大きく息をし、呼吸を落ち着けようとする。

だが――

「――！」

ベルタは息を呑んだ。

光学照準器の中、守護聖人像は益々街に近づいており、視界を遮る頻度が増えていたのだ。このままでは狙撃は難しい。ベルタが思い悩んでいた間に、狙撃の難易度が桁外れに上がってしまっていた。

やはり自分は駄目な娘だ。

忸怩たる気持ちでベルタがそう考えた――時。

「行かせん！」
ウルリーケの叫びが聞こえた。
そして続く――爆音。
「……！」
照準器の中から守護聖人像が、消える。
思わず照準器を覗き込んでいた右目を閉じて左目を開いて見ると、傾いているのが見えた。先にユキナリから説明を聞いた――あれは彼とダーシャが準備した『守護聖人像に対する為の仕掛け』だろう。端的に言えば細長い落とし穴だ。
この落とし穴、ウルリーケや眷属達が間違って落ちない様にと、守護聖人像が大きく先の爆音はそれを退ける為のものだろう。
「……」
慌ててベルタは照準器を覗き込む。
見えた。オルガンを弾いている奏者――その後ろ姿が見える。
今なら当てられる。確実に。ベルタが思い描いた場所に。
息を殺して。心を殺して。
引き金を――引く。

銃声。

放たれた銃弾は一瞬で目標に到達、照準器の狭い視界の中で椅子から転げ落ちるのが見えた。同時に奏者の身体を貫通した銃弾が、オルガンそのものにも命中したか――その筐体に弾痕が穿たれ、その周囲に亀裂が走るのも、見えた。

がくん、と守護聖人像が動きを止める。

御者台の傍に居た他の宣教騎士達が、慌ててオルガンに取り付こうとするが――

銃声。

二発目の銃弾が今度こそオルガンに直接、着弾。

白い鍵盤が弾け飛ぶのが見えた。

「守護聖人像が……！」

宣教騎士達の間に動揺が走る。

浮き足立つ彼等に対し――逆に、勢いを得た眷属達が襲いかかったのは次の瞬間だった。

〈御遣い〉の姿になればユキナリは己に備わる全力が出せるそれは間違いないのだが――

くなかった。あの女騎士に対しては大見得をきったが、それは多分にハッタリである。

「……さて、どうするか、だなユキナリは仮面の下でそう呟いた。

そもそも〈御遣い〉はハリス真教会が布教用に奇跡を演出する道具として作ったもので

あり、戦闘は最初から考慮されていない。ユキナリが高い戦闘能力を発揮できるのは、彼が意識して〈御遣い〉の物質変換能力を使っているからであり、実際の戦闘力――その中心を成す『攻撃力』は、基本的に物質変換能力ではなく、錬成して造り上げた各種武器類である。

そしてそれらの多くは――〈デュランダル〉の44マグナムのライフル弾にせよ、〈デールリンガー〉の圧倒的な質量と、そこから来る強固な防御力を突破出来ない。

直接ユキナリが触れて物質変換の能力を使えば、確かに装甲の厚さなど関係なく守護聖人像を分解出来るが、対人用武装の火炎放射器がある為、迂闊には近づく事が出来ない。

また……宣教騎士達も不可解な武器『銃』の恐怖と動揺から立ち直りつつあった。

〈デュランダル〉でフリートラントの住人達は銃撃を続けているが、素人が、動く目標にそう命中させられる筈もなく、音に比して被害が少ない事に宣教騎士達は気づき始めたのである。

勿論、ダーシャは〈レッチリ〉を使った狙撃で確実に宣教騎士達の足や肩を打ち抜き、彼等を牽制しているが――一人ではいかんともしがたい。

何より相手は訓練された職業的な戦士である。

恐怖というものをねじ伏せる術を心得ている。彼等は先に倒れた騎士の持っていた盾を拾い上げ、これを重ねたり、連ねたりして、フリートラントの街門へと肉薄しつつあった。

これはアーロン達と戦った時とほぼ同じ流れである。そしてダーシャの〈レッチリ〉では二枚重ねにした盾を貫通できない。

確実に防げるとわかれば、あとは物量に物を言わせて押し切ってくるだろう。

「すぐに終わると言っていなかったですか？」

勝ち誇る様な口調で指揮官らしき女騎士が言ってくる。

「如何〈御遣い〉の力を持っていたとしても、たった一人、に勝てると思う方がおかしいのですよ」

「……」

叩き付けられる巨大な剣を回避しつつ、しかしユキナリはそれをどう受け止めたか、女騎士は獲物を嬲って遊ぶ猫の様な笑みを浮かべて、言った。

「吶喊、一気に殲滅なさい！」

しばらく防御に専念し、ユキナリ達の力を見定めていた宣教騎士達が――女騎士の号令で一気に攻めに転じた。

騎士達の基本戦法は突進力にものを言わせた突撃である。

勿論、最大限にそれが発揮されるのは馬に乗っている時だが、彼等の武術は走り寄って、突き殺す、あるいは押し倒して、踏み殺す、という形で最も威力を発揮する。本領を発揮して迫り来る宣教騎士達を前に、フリートラントの住人達は、途端に浮き足立った。

白兵戦になれば勝ち目は無い。

遠くから〈デュランダル〉で狙い撃つだけならまだしも、剣年も修練を積んできた本職に勝てる筈が無い。

そして――乱戦になればダーシャも援護するのが難しくなる。彼女自身、接近戦に巻き

込まれればろくに戦う事は出来ないだろう。
アーロン達と戦った時の様に、大型の『砲』を錬成して、守護聖人像を撃つのが最も確実だろう。だがあの時と違って、宣教騎士達が斬り掛かってきており、ユキナリはこれを捌くのに忙殺されている。
五秒もあれば、『砲』を錬成出来るが、その五秒がどうにも手に入らない。
しかし……
「ぎゃあっ!?」
「て、敵――げえっ!?」
突撃してきた最前列の宣教騎士達ではなく、悲鳴は後方、女騎士が居る大型馬車の辺りから聞こえてきた。
「……!?」
眼を細めてそちらを見遣る。
するとそこには――いつの間に潜り込んだのか、長柄戦斧を片手に暴れ回るヴェロニカの姿が在った。恐らく、先程、守護聖人像を落とし穴に足を取られて倒れた際、舞い上がった土煙に紛れて回り込んだのだろう。
「りゃあああああああっ！」

完全武装の騎士が相手では、刃物で攻撃するためには鎧の隙間を狙わなければならない。

だがヴェロニカは相手を殺す事にはこだわらず、大きく振って遠心力をつけた柄で兜を殴り、石突きで膝を正面から突いてゆく。明らかに敵陣を掻き回して、時間稼ぎをする積もりだろう。

そうすればユキナリが、あるいはフリートラントの住人達が、状況打開の方策を見つけて実行する――そう考えているのだ。

次々と宣教騎士を薙ぎ払い、ヴェロニカは女騎士にまで肉薄する。

だが――

「――ッ！」

腹部を狙って繰り出された槍を、女騎士が抜き放った長剣が弾いた。

「くっ!?」

思いの外、強い力であったか、ヴェロニカが僅かにだが姿勢を崩す。

対して女騎士は馬車から飛び降りながら、改めて剣を構え直し、獰猛な笑みを浮かべて叫んだ。

「甘いー　若い女だとしてもお飾りの指揮役ではないのですよー！」

「……」

ヴェロニカは顔をしかめつつ後退を始めた。
女騎士を討つ事には拘泥しない。望んで敵陣に斬り込んだとはいえ、この状況は極めて危険だった。宣教騎士達が体勢を立て直せば、包囲されて四方八方から斬り掛かられて、その瞬間にヴェロニカは終わりだ。
「はっ――」
笑いながら女騎士が次々と剣の攻撃を繰り出していく。
本来、剣と長柄戦斧ならば間合いの大きな後者の方が有利だ。しかし女騎士の動きは鋭く、速く、積極的に前に出てヴェロニカを追い詰めていく。攻撃の殆どは突きで、ヴェロニカの反撃を僅かに身体を反らしてかわすと、強烈な刺突を何度も放ってきた。
ヴェロニカが明らかに押されている。
そもそも……ヴェロニカは怪我が癒えたばかりで、体力まで完全に戻った訳ではない。むしろ今まで縦横無尽に駆け回り、宣教騎士達と打ち合えていた事そのものが驚きであり、彼女が天才の域に達した優秀な兵士である事の証と言える。
とはいえ――
「その程度の腕で私の前に立つのは間違いなのですよ！」
勝ち誇る女騎士。

ヴェロニカが一撃を繰り出す間に二撃が返される。

確かに言葉通り、あの女騎士はお飾りなどではなかった。自分の武器の特性と、相手の武器の特性の差を見極め、最適な戦法を採ってくる。

「……！」

長柄戦斧が弾かれ、ヴェロニカがこれを取り落としてしまう好機、とばかりに女騎士が更に間合いを詰め、ヴェロニカに突きを放つが――

「――っ!?」

これをヴェロニカが更に弾く。

長柄戦斧を落としたばかりの彼女の手には、剣が握られていそう。長柄戦斧は弾き落とされたのではない。恐らくヴェロニカは弾き飛ばされたと装いつつ、長柄戦斧から剣に持ち替えた、だけだ。相手の女騎士は武器を叩き落としたという安心感から、つい、攻撃の手が緩む。その瞬間に間合いを詰めて、剣と剣の戦いにヴェロニカは移行したのである。

「愚かッ！」

女騎士はしかし嘲りながら剣を振り続ける。

今度は斬撃に切り替えた為、空中で衝突する刃と刃が、幾つもの火花を咲かせた。

「長柄戦斧（ハルヴァード）で勝てないものが、剣で勝てると思いましたか!?」
その言葉通り、ヴェロニカはひたすらに押されていた。
やはり体力が落ちた身では、瞬発力はあっても持続力が無い。
やがて防戦一方になっていくヴェロニカ。
「これで――終わりです――ッ！」
女騎士が上段から振り下ろす一撃。
これをヴェロニカは剣で受け止めて――両者は鍔迫（つばぜ）り合いの様な形になった。
だがその体勢では、体力で劣（おと）るヴェロニカが不利である。
女騎士もそれを理解しているのだろう、得意げな表情で剣を押（お）し込んでいく。
そして――

銃声。

「……ッ!?」
突然、襲（おそ）ってきた猛烈（もうれつ）な音の暴力に、女騎士の身が竦む。
ヴェロニカの使っていた剣とは、〈デュランダル〉だ。勿論、狙って撃ったものではな

いので、弾丸は明後日の方向に飛び去っただけである。しかし強烈な44マグナム弾の銃声を間近で浴びた女騎士は、明らかに動きが鈍っていた。

あるいは間近でいきなり銃声を聞いたせいで、耳が――人体の平衡を保つ為の器官であるこの三半規管が、何かおかしくなったのかもしれない。

ヴェロニカはその隙を見逃さなかった。

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

その場で体を回転させ、勢いを生み出し斬りつける。その一撃は女騎士の首を刈らんと迫るが、これは咄嗟に掲げた体勢で、ヴェロニカの渾身の剣で防がれてしまう。しかし崩れず、女騎士はその場に転倒していた。

「ぐあっ!?」

女騎士の鳩尾にヴェロニカの長靴の靴底が叩き込まれる。

悶絶する女騎士を足下に置きながら、周囲を見回し、宣教騎士達を睨み付けるヴェロニカ。まさに包囲して襲いかかろうとしていた彼等の動きが、止まった。

そしてそれは、ユキナリに向かっていた宣教騎士達も、そして馬車の上のオルガン奏者も同様で――

「……感謝だな」

呟きながらユキナリは後退し、左の掌に右の拳を押し当てた。
既に一度作り出したものだ。頭の中に設計図は残っている。
ど単純だ。間違い様が無い。
頑丈な筒に火薬と弾丸を詰め、一方を雷管で蓋をする。
後は尾部に衝撃を与えれば、弾頭を撃ち出す――使い捨ての
ただし、今回は少し構造を変化――いや追加してある。
即ち……大砲。

「……ううううらあああああああああああッー」
それは全長二メートル、直径十五センチの、巨大な『トンファー』だった。
砲身から枝の様に突き出た部分を握りながら、ユキナリはこれで守護聖人像をぶん殴り、
相手が仰け反って胸部の装甲に出来た隙間へ、砲身をねじ込むのだ。近接射撃なので殴打によって生じる砲身の歪みなど気にする必要は無い。
ねじ込みきって止まった瞬間、砲身の尾部に取り付けられた部品が、慣性で前進し、
雷管を叩く。銃声とは比べものにならない程の轟音が迸り、発射された砲弾は、守護聖人像の胸に、文字通りの風穴を穿っていた。
赤黒い液体を飛び散らせ、びくんとまるで生きているかの様に硬直する守護聖人像。

次の瞬間、宣教騎士団の最終兵器は、鈍い音を立てて大地に横倒しになる。

「……！」

指揮官と守護聖人像。

一つの柱を失った宣教騎士達は、さすがに表情を強張らせて後ずさり始めた。

ここで戦い死んでも恐らくもうそれは無駄死にだ。必要とあれば本能的な死の恐怖を圧殺出来る彼等でも——いやも無駄死にでしかない状況は、忌避するのだろう。

そして——

「……退けッ!!」

そんな叫びが街中から聞こえてきた。

何事かとそちらを見遣る宣教騎士達。

街門から走り出てきたのは、驚いた事にアーロンだった。

彼は両手を顔の左右において、大声で更にこう続けた。

「もう一方の守護聖人像は破壊され、宣教騎士団は退却したー

したくなければ、退けー

「……」

このまま揃って無駄死に

宣教騎士達が互いの顔色を窺う様にして左右に視線を走らせる。

そして――

「た、退却、退却だ！」

一人がそう叫ぶと――それを皮切りに、宣教騎士達は潮が引くかの様に退却を始めた。

●

ハリス真教会の宣教騎士達が撤退していく。

傷を負った者は、馬に、あるいは運ぶ対象を失って空になった大型馬車にしがみつきながら、去っていく。無傷の宣教騎士が殿を務め、フリートラント側の追撃を警戒している様子が見えた。

もっともフリートラント側に追撃の意思は無い。

後顧の憂いを残さない、という意味ではここで全て制圧しておくのが賢い考え方だろうが、そこまでしている余裕は無い――というのがユキナリの本音だった。少ないとはいえ、フリートラント側にも被害は出ている。

そして――

「な、何故、殺さな、いので……」

足下から苦しげな呻き声と共にその問いが聞こえた。

問いの主は指揮官だった女騎士である。恐らくこの女騎士がアーロンの話に出ていたアンジェラ・ジンデルであろう。ヴェロニカの長靴は、未だ、女騎士の腹を踏んだままだ。

「……」

ユキナリもまた、問う様な視線をヴェロニカに向ける。

実を言えば――ヴェロニカがアンジェラに止めを刺さなかったのは意外だった。ヴェロニカは傭兵である。戦争を生業としている、玄人だ。ベルタとは異なり、敵を殺す事に躊躇はすまい。実際、今回の戦闘でも何人かは宣教騎士を殺している。

しかし……

「……そうだな。殺すべきなのかもな」

道の彼方で姿が消えつつある宣教騎士達を見遣りながら、ヴェロニカはふと思いついた様に口を開いた。

「だが、ここでお前を殺しても得られるものは無い。いや、それも言い訳か。案外、ここの神様の、平和惚けが移ったのかもしれんな」

「……平和……惚け……？」

意味不明の単語を聞いたかの様に、アンジェラは顔をしかめる。

ヴェロニカは溜息をつくとそこでようやく視線をアンジェラに向けて言った。

「それで納得できないのならお前達に捕まった私の仲間を助ける為――とでも思っておくがいい。お前は捕虜で人質だ。だが、散々、蛮族だの無知蒙昧だのと辺境の民を嘲ってきたんだ、よもや、真っ当な扱いを期待してはいまいな？」

物憂げな口調でヴェロニカはそう言った。

終章　変わりゆく神と神

戦いの後始末を終えた頃にはすっかり日が暮れてしまっていた。

フリートラント側としては奇跡的な程に少ない死傷者数であったが、負傷したまま現場に残された宣教騎士達を収容して道の脇に退けたりするだけでも、半日以上の時間が掛かったのである。

その後、街の周囲に数名、最低限の見張り役を残し、ユキナリ達はシリングス邸に集まった。応接室にて今回の戦いの結果を鑑み、今後の方針を検討する為だ。

「まずは、皆さんお疲れ様でした」

フィオナは一同を見回してそう言った。

「この街を代表して、皆さんの奮戦に感謝申し上げます」

応接室に居るのはフィオナ以外に、ユキナリ、ダーシャ、ベルタ、ウルリーケとヴェロニカ、そしてアーロンである。それぞれが戦いを乗り切った倦怠感と共に応接室のソファに身を沈めている。フィオナはその後も手ずから飲み物を配り、一人ずつねぎらいの言葉

を掛けていった。

ちなみにアーロンの左頬には平手打ちの跡が未だ赤々と残っているが、これはフィオナによるものである。結果としてフリートラントに味方してくれたとはいえ、街の決定に反して牢屋を抜け出した事は褒められた話ではない。平手打ち一発でそれを清算するというのは、むしろ彼女の温情とも言えた。

ともあれ――

「とりあえず乗り切ったってのが、正しい感想だな……」

住人達や、捕虜にしたアンジェラなど、怪我を負ったものは医師による手当てを受けているが、前述の通りフリートラント側は奇跡的に殆ど死傷者が出ていないが、『次』も同じであるとは、とても思えない。

今回はあくまで宣教騎士達は『教化に失敗した街に再度教化を試みる』積もりだった。つまり地神役たるユキナリや、元々追っていた傭兵のヴェロニカに対しては、殺す積もりで挑んできていない。そこに宣教騎士団側の甘さがあった。

だがはっきりと宣教騎士団側に死傷者を含めた損害が出た以上、次回があるとすれば、今度は本当に全面戦争の積もりでやってくるだろう。

「……ハリス真教会は間違いなくまた攻めてくるだろうな。逃げ延びた騎士からの報告で、この町が『教化』から逃れてしまったことは伝わったとみて間違いない」

ヴェロニカが物憂げな口調でそう言う。

現状――この世界に存在する全ての街や村がハリス真教会に教化されている訳では、勿論ない。辺境に行けば行く程、教会の威光は薄れてくる。当たり前の話だ。

だが、いざ、教会が教化に乗り出して、失敗した街というのは聞いた事が無い――とヴェロニカは言った。傭兵として各地を回ってきた彼女の言葉だ、恐らくは正しいのだろう。

となれば、ハリス真教会は、是が非でも――威信にかけてフリートラントを攻めてくる可能性が高い。

「ユキナリ様……」

不安げな声を出すのはベルである。

ユキナリは、今回の戦闘で街の背中を彼女とウルリーケに任せる事になった訳だが……実戦を経て彼女の性格が変わってしまわないか、その事を少し心配していた。いや。変わるというより『壊れる』と言った方が正しいだろうか。初陣で人を殺したという衝撃から、立ち直れないまま心を病む者はたまに居る――とヴェロニカから聞いていた。

だが、今の所、ベルタに限ればその心配は無用である様だ。

やはり彼女は気弱げなままである。逆に言えばその性格でよくここまで頑張ったと言えた。

あるいは……彼女が撃ったというオルガン奏者が、一命を取り留めた事も影響しているのかもしれないが。重傷だが命に別状は無いとの事だった。

「場合によっては、中継基地となっているアルドレイルに、こちらから攻め込む事も考えなければならないんだろうな……」

そう言いつつも、今ひとつその実感が湧かない――アルドレイルに攻め込む自分達というのが想像がつかない。望んで戦っている訳ではないのだ。自分達から積極的に打って出るなど、以前は考えもしなかった。

だが……

「ユキ……」

ダーシャが隣で、ユキナリの手を握ってくる。

自分が不安なのではなく、ユキナリが、初めて戦闘に対して積極的ともとれる発言をしている事を気にしたのだろう。彼女はユキナリの性格をよく知っている。無理をしていないかと案じてくれているのだ。

「大丈夫だよ」

そう言って手を握り返し、ダーシャに笑いかける。

分かっていた事だ。だが今まで敢えて眼を逸らしてきた。
望む望まぬにかかわらず、力を持つという事はそういう事でも周りが放っておいてくれない。フリートラントを守るためには理するだけでは足りない。攻めてきた相手をその都度撃退していつか破綻する。
自分一人であればともかく、街全体の命運を左右するというが起こり、どのような対処を行うのか……先手先手と予め先をればならない。
アルドレイルの事もその一つだ。
ましてヴェロニカの仲間は未だ捕まったまま、宣教騎士団がかも分かっていない。一度、偵察に誰かを向かわせる必要は虜にしたアンジェラを含め、数名の宣教騎士達を尋問するか。
いずれにせよ――
「俺は、考えが甘かったん
改めて周囲の者を見回してユキナリは言った。
「だが今更、後には引けなだと思う」
いだろう。今後も街の人達を巻き込み、死なせる可能性も出て

くる。生け贄を求めないとその言葉を制するユキナリ。
事になる可能性もある」
「ユキナリ、それは……」
「分かってる」
フィオナに片手を挙げて
「それも含めて、近くだけを見てちゃ駄目だって話だ。目の前の怪我人や人死にだけを見てると、将来的に生じるもっと大きな被害を止められなくなる可能性も在る。だから覚悟が要る——明日に流れる血を止める為に、今日の血を流す覚悟が」
そう言ってからユキナリはアーロンの方を向いた。
「それから、アーロン。今回は本当に助かった。お前が居なければ、もう一体の守護聖人像は街門を突破していたかもしれない。同じ宣教騎士を相手に戦うのは躊躇も苦痛もあっただろうに。本当に、ありがとう」
「……」
ユキナリに頭を下げられて、アーロンは——束の間、眼を丸くして固まっていたが。
「ふ、ふん。私の力を思い知ったか」
若干、ずれた事を言いながら、彼はそっぽを向いた。

照れているのだというのはユキナリは敢えて突っ込まなかった。

「ベルタもありがとな。かなり無理をさせてしまったけど……」

「い、いえー」

慌てて首を振るベルタ。

彼女は一同の視線が自分に集まるのを感じて首を竦めたが——やがて、おずおずと、はにかむ様な笑みを浮かべて続けた。

「そんなこと……ない、です。私……初めてユキナリ様のお役に立てて……怖かったですけど……でも……良かったというか、嬉し……その……」

ついつい顔を下げて、次第に声も小さくなっていく。

しかし——

「——ベルタ」

横からヴェロニカが声を掛ける。

ただそれだけの事だったが、何か思う所があるのか、ベルタは一瞬、はっとした表情を浮かべると、瞬きを二度ばかりして——両手で自分の服の裾を握ってから、少し決然とした仕草で顔を上げた。

「私、ユキナリ様の為なら頑張れます。何だって出来ます」
「あ……お、おう、ありがとう」
ベルタの、初めて見るその表情に気圧されて、ユキナリは頷うに眼を細めているのが見えたが……まあそれはさておき。
「……俺は、戦うって決めた」
むしろ何処かしみじみとした口調でユキナリは言った。
「本当はベルタみたいな子に無理をさせたくはないし、アーロくはないんだが。ダーシャにも無茶はして欲しくないし、フィい。本当に、避けられるものなら避けたかった。けど」
ユキナリは一つ深呼吸して、一同を見回した。
「もう甘えは捨てる。だから頼むよ。俺を手伝って——いや、助けてくれ」
「何を今更」
と——頭を下げるユキナリに苦笑するのはフィオナである。
「貴方は私達の神でしょう。もっと堂々としていてくださいな」
「……おう」

皆の視線を浴びながら――ユキナリは頬を掻いて苦笑した。

●

火急の報が、辺境に派遣された宣教騎士団からもたらされた。

伝書鳥ではなく、軽装の宣教騎士が乗る早馬で――途中、亜神や異獣に襲われる危険を覚悟の上で届けられた重大案件である。宣教騎士団本部の騎士団長ウォルト・ディクソンは即座に教皇への謁見を申し入れた。

宣教騎士団長の申し入れだけあって、謁見は即日に許可が出ウォルトは疲労困憊の騎士を叱咤して礼服に着替えさせ、教ースと謁見する為に、大聖堂に向かった。

そして――

「……猊下？」

ウォルトは眉を顰めてその場に立ち尽くしていた。

ジャスティンの姿は変わらない。大聖堂奥の謁見の間もいつだが……そこに見慣れない要素が一つ増えている。

即ち――

「お父様？」

それは若い娘だった。

年の頃は十五か六といった所だろうか。小柄で、未だそこかしこに幼い丸みを残した様な、そんな少女がジャスティンの座のすぐ横に侍っている。

肩口で切りそろえた銀の髪と、深紅の眼、それに――王都でも少しずつ出回り始めた、視力補正具――眼鏡が、特徴的な外見を生み出していた。

「この方達は誰？」

「……」

指を指されてウォルトは困惑した。

この少女は一体、何者か。

ジャスティン・チェンバーズは未婚の筈だ。錬金術師の女と密通しているのではないかという噂もあったが――それが事実で、その女との間に子供をもうけたのだとしても、こんなに堂々とその子を脇に侍らせる筈も無い。

「……団長、これは一体」

「無用な詮索は、往々にして命を縮めるぞ」

戸惑いの表情を浮かべる宣教騎士に、ウォルトはそう告げて、自らも疑問や好奇心を押し殺しに掛かった。

余計なことは考えず、ただ己の使命を果たせばそれでいい。

「――ディクソン団長。何か急ぎの報告があると聞きましたが」

少女の問いは無視し、ジャスティンはそう問うてきた。

まるでそこに自分を『お父様』と呼ぶ少女など居ない――とでも言うかの様に。

「は。猊下にご報告があり参上いたしました」

一礼して片膝をつき、ウォルトは言った。宣教騎士もそれに倣う。

「実は、アルドレイルに駐屯していた教化遠征軍、第九宣教騎士団、及び第七宣教騎士団から、にわかには信じがたい報告がもたらされました。驚くべき事に、守護聖人像二体を喪失した、との事で」

「……守護聖人像を？」

ジャスティンが僅かに眼を細める。

驚いているのだろう。当たり前だ。守護聖人像を二体もまとめて失うなど、本来はあり得ない。地神すらも斃すハリス真教会の最終兵器である。ま

「原因は？」

「それが――教皇猊下にご説明差し上げなさい」

ウォルトは脇の宣教騎士を促した。

宣教騎士は改めて頭を下げると、問題の事件が起こった場所について――フリートラントと呼ばれる辺境の都市について説明を始めた。

既に第六宣教騎士団によって教化を終えたと報告のあったフリートラントは、実は、早々に第六宣教騎士団を下し、守護聖人像を破壊していたらしい事。

フリートラントは反教会勢力の拠点となりつつあるらしい事。

そして――そのフリートラントに、神として君臨している者が居るらしい事。

何より……

「……その際に目撃されたのが、あの、〈蒼鋼の冒流者〉であると……！」

その一言を宣教騎士が口にするのを聞いて、ウォルトは緊張した。

教会においてその名は禁忌であり、ある程度以上の地位にある協会関係者は皆が知ってはいるものの、表だっては口にする事すら憚られる――そういう存在だ。

ジャスティンが不快感を、あるいは怒りを示すかもしれない、とウォルトは考えていた。

現教皇の立場で、〈蒼鋼の冒流者〉の名を突然、耳に入れられては、嬉しい筈も無い。

しかし……

「そうですか、そうなのです」

怒鳴らず、喚かず、ジャスティンは薄い笑みをその口元に浮かべている。

「猊下――」

「そこにいましたか〈蒼鋼の冒涜者〉……」

彼は満足げに頷きながら、傍らの少女に眼を向ける。

「……お父様？」

正体不明の少女が首を傾げる。

ジャスティン達の会話の意味がまるで分かっていない様子だ。

しかし――

「喜びなさい」

彼女に対してジャスティンは優しい口調で言った。

「存在理由を全うする時が来た様です――」

あとがき

どうも、軽小説屋の榊です。

『蒼鋼の冒涜者』三巻をお届けいたします。

三巻目、まずは読者の方々、担当氏、そして赤井てら師、皆様方に感謝を。

一巻のあとがきから言っている様に元々『蒼鋼の冒涜者』は異世界チートハーレムで、銃器を出そう、というコンセプトで始まった訳ですが。

いざ書いてみると微妙にハーレム感薄いというか、ダーシャと他の娘に存在感の差がありすぎてしまう結果になりまして。特にベルタ。ウルリーケが出てくるに至り、作者的にもあり、益々印象薄い可哀想な子に。

こちらの娘が扱いやすい事出す方法は色々あるんですが、あコメディだと、存在感をまりこの作品はコメディシ

ーン入らないし。

という事で、改めて今回はベルタに焦点を当ててみました。

その一方でハーレム増強についても忘れていません。ええ。

という訳で前回がロリ系サブヒロイン追加であった事から、ン追加であります。しかも片方は敵です。敵なので戦った後はッー！……かどうかはさておき、女性キャラが増えるのはいいものですね。

表紙では若干後ろに追いやられてますが、今回初出のサブヒロイン、ヴェロニカは何となく『ロードス島戦記』のシーリスのイメージで書いておりました。傭兵で、実は高貴な出……って設定を作った時に何となく。彼女が赤毛なのはそのせい。

アンジェラに関しては、実は最初期、つまり一巻の辞典で登場が決まっていたのですが、意外と一巻の分量が増えてしまった為に彼女の登場はオミットされ、三巻になりようやく日の目を見た感じです。

ただ一巻の段階ではむしろ天然系のシスター扱いだったのですが、三巻では宣教騎士団

の副団長という扱いに変更した為、若干、違った感じのキャラクターに。

そして絵にはなっていない様ですが、遂に、『あの方』がご登場でございます。

いいですよね、骨肉の争いー（きらきらした瞳で）

とにかく本巻はベルタ推しに加えてお姉様回というか、お姉様・お姉ちゃん系のキャラクターの登場も当初から予定していた事なので、作者的には何とか辿り着いたな、という印象であります。話が話なんでイチャイチャしてませんが。

また、シリーズの構造としてはここで一つ大きな転換期を迎えます。

それが何かはまあ、読んでいただくとして。実を言えば今れになるので、ちょっと作者的には戦々恐々としております。

ともあれ、こちらの事情はあくまでこちらの事情。

読者の方々には、普通に楽しんでいただければ幸いであります。

ではでは、また次の本で。

2015／12／8

榊一郎

ファンレターのあて先　ご意見、ご感想をお寄せください

〒151－0053　東京都渋谷区代々木2－15－8
(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部
榊 一郎 先生／赤井てら 先生

HJ文庫
616
http://www.hobbyjapan.co.jp/hjbunko/

蒼鋼の冒涜者3
ブルースチール・プラスフェマ

2016年1月1日　初版発行

著者――榊 一郎

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン

〒151-0053
東京都渋谷区代々木2-15-8
電話　03(5304)7604（編集）
03(5304)9112（営業）

印刷所――大日本印刷株式会社
装丁――AFTERGLOW／株式会社エストール

乱丁・落丁（本のページの順序の間違いや抜け落ち）は購入された店舗名を明記して
当社パブリッシングサービス課までお送りください。送料は当社負担でお取り替えいたします。
但し、古書店で購入したものについてはお取り替えできません。

禁無断転載・複製

定価はカバーに明記してあります。

©Ichirou Sakaki

Printed in Japan

ISBN978-4-7986-1149-5　C0193

HJ文庫毎月1日発売！

タタリ・ブレイカー弑子

著者／榊一郎
イラスト／bon

富士宮瑞人、君に頼みがあんねん

成績容姿とも平々凡々。ただし趣味はちょっと変わった「フィギュア造り」の高校生、富士宮瑞人。こっそり好きな娘のフィギュアを製作中の彼だったが、そのモデルである少女、鹿沼美裕希は最近ずっと学校を休んでいた。そんなある日、瑞人は美裕希の家の前で、不吉な恰好をした少女を見つける。

発行：株式会社ホビージャパン

匡平、王女さまのお兄ちゃんになる!?

模造王女騒動記 フェイク・フェイク

著者／榊 一郎　イラスト／藤田 香

平凡に暮らすことが夢の南部匡平のもとに、突然現れた全裸の美少女。匡平は、「王女パミルの身代わりアンドロイド」を自称するその少女の面倒を見るハメになり、平凡な人生が超音速で遠ざかってゆくのだった。

シリーズ既刊好評発売中

模造王女騒動記 フェイク・フェイク カーム・ブレイカー
模造王女騒動記 フェイク・フェイク ルナティック・シスター

最新巻 模造王女騒動記 フェイク・フェイク エイリアン・ネイション

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

お気楽道中の王女ナナを襲う呪われた運命

プリンセスはお年頃！

著者／榊一郎　イラスト／深山和香

「おまえ―ちょっと処女喪失してこいや」と言われ旅に出たヌビアス王国王女ナナ。呑気な婿探し道中になるはずが、その前に現れたのは暗殺者だった。立ちふさがる陰謀は、やがて世界の命運を巡る戦いへとナナを誘う……。

シリーズ既刊好評発売中

プリンセスはお年頃！1
プリンセスはお年頃！2

最新巻　プリンセスはお年頃！3

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン

HJ文庫毎月1日発売！

征天の無双神器

著者／坂本一馬
イラスト／七六

この二人、常勝不敗！！

ひょんなことからエリーと名乗る少女と同居することになった少年・如月蓮は、彼女とともに人型兵器「神器」の操縦者を目指すことになる。だがエリーの正体は「第一世代」と呼ばれる最強の神器で、蓮こそが彼女の潜在力を引き出せる唯一の存在だった──。最強コンビが、人類を狩る「機械天使」を相手に無双する豪快バトルアクション、堂々開幕！

発行：株式会社ホビージャパン

元最強の冒険者は再び伝説となる!

セブンスターズの印刻使い

著者／涼暮 皐　イラスト／四季童子

伝説の冒険者集団《七星旅団》の六番目。《紫煙の記述師》と呼ばれた元日本人の青年アスタは、魔力を制限する呪いを解く方法を探し魔術学院へと通っていた。
しかし彼は、学院の課題の迷宮へと潜ったことをきっかけに、退いたはずの戦いの最前線へと身を投じることとなる――。

シリーズ既刊好評発売中

セブンスターズの印刻使い1

最新巻　セブンスターズの印刻使い2

HJ文庫毎月1日発売　発行：株式会社ホビージャパン